壁伝いSOS

都宮　京奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
壁伝いＳＯＳ

【Ｎコード】
Ｎ８９６８Ｚ

【作者名】
都宮　京奈

【あらすじ】
犯した覚えのない父殺しの罪で実刑判決を受け刑務所に服役していた久手は、医療刑務所に移送される前日、ある少女と面会する。久手は少女から「布団に入り夢を見ろ」と助言され、『はじめに』というタイトルの文章を書き残し眠りに着く。そして醒めることのない眠りの中で長い夢を見る。
夢では二人の少年がそれぞれを助け出すために奮闘していた。遠藤圭という少年の過去を思い出す姿。御名風ハルという少女が遠藤圭を助け出す姿。二人は互いを救い出すことができるのか。

はじめに

はじめに

この物語は非常に複雑に入り組んでいる、荒唐無稽な小説群です。筋を説明すると、高校生である主人公が自分の作り出した少女に心を救われる、という至極簡単な一本道ではあるのですが、何ぶん主人公が少女に救われる過程というものが前代未聞なのです。

これを北海道の南にある刑務所の獄中で書いている私自身、どうして選択肢を間違ってしまったのかという疑問で頭を痛めてしまうのですが、こうなった以上は仕方がない。読者に裁量をお任せしようと思い、こうして不本意ながらもお詫びを告げる章を設けた次第です。

さて、この話を読み進める前にひとつだけ、書かなければならぬことがあります。

それは、何が虚構で何が現実なのか、作者である私自身理解できていないということです。

きっとこの文章を読み進められている読者様たちは、小説で起きる数々の出来事を嘘か真か各々に備わっている慧眼で審議するであろうと思います。ですが、それは止めたほうがいいと進言しておきます。

なぜなら私には過去が無く、その無い過去を思い出すためにこうして文章を綴っているからです。つまり、まったくの嘘かもしれないということです。

もちろん中には私自身が経験した真実も含まれていますが、その経験も嘘かもしれない、誰かに創られた世界かもしれない可能性があるのです。

私は犯してもいない父親殺しの罪を償うため、存在しているのか定かではない自分の半生を振り返るべく「犯罪はこのように起きて

しまったのではないか」と仮説を立てて獄中にて小説を執筆しています。

実を言いますと、こうして書いている私自身、誰かに書かれることによって創られた人物なのではないかという疑いの念を晴らせぬまま、手の動くままに文章を書いています。

私はどこの誰で、どうして謂れのない罪を着せられてしまったのか、まったく合点が行かぬまま、それでも警察の方に突きつけられた父親殺しの罪を認めようと尽力しております。

もしかしたら私は空白の存在なのではないかとも考えました。

ということは、誰かに経歴や人生観を書かれなかったのではないかと思っております。ですから、できれば誰か、読んだ誰かしらの手で私の経歴を、この紙の隅にでも書き付けてくださることを祈っております。

そのような諸々の理由から、読者様たちは出来るだけ頭を空にして、文章を読み進めていただくことをお願い申し上げます。

また、恥ずかしながら、下に明記する署名は私が以前から使用していた筆名です。

この物語が私の過去となるよう祈りを込めて。

久手（くで）　贄緒（にえお）

誰かが書いた短編　倉庫娘

あなたは八歳の娘を亡くしました。
交通事故でした。
大事な一人娘を、与り知らぬところで亡くしてしまったのです。
ちょうどそのとき妻と折り合いが悪かったので、事故をきっかけにして別れます。
独り身は寂しいものでした。家庭の癒しの場として購入した庭付き一戸建ても……一人で暮らすにはとても広く感じられて、手放すことに決めました。
引越し先は、庭付き一戸建てとは違ってとても狭いですから、持ち込める荷物も限られてきます。別れた妻は自分の荷物だけを持っていったので、荷物はあなたのものと、娘のものだけでした。
あなたは悩みます。生前、娘が着ていた服や遊んでいた玩具の数々を捨てようか――どうしようかと。
アルバムぐらいなら思い出として取っておくことができますし、何よりも場所をとりませんから持って行くことができます。ですが、服や玩具となると話が違ってくる。娘に買い与えた服と玩具はかなりの量で場所をとってしまいます。
……とはいっても娘が触って着て遊んだ実物です。
あなたは捨てられません。荷造り用の箱に大事に仕舞っておくのです。
引越し先は、一人で暮らすには丁度いい狭さでした。六畳一間しかなくとも生活する分には困りません。なにより、もう娘はこの部屋にはいないのですから、娘と遊ぶ部屋も本を読んであげるだけの大きい布団もあなたには必要ありません。
……あなたは荷物を箱から取り出して、整理を始めます。家具や家電、そして衣類を四方に置く。最後に娘の服と玩具を床一面に広げ、分厚いアルバムを敷き布団に広げます。

布団に腰を下ろし、分厚いアルバムを最初の頁から順々に捲っていきます。
娘の可愛い写真一枚一枚をじっくり見ては、頭の中で思いだし思いだし目を細めます。
アルバムの最後の頁を捲ると、真っ白な頁にたどり着きます。娘との思い出旅行もこれでお終いです。途中で列車から降ろされたあなたは、足を動かすことはできません。次の列車には乗れないのです。

さて、あなたは空腹を感じました。
財布を手に取り、近場の飲食店へ向かうことにします。
着いた飲食店は賑わっていて、繁盛している様子です。慌しく右往左往している店員を横目で見て、席を探すことにします。
店内を見回すと、ぽっかり空いている四人掛けの席を見つけました。あなたは空いた席に向かいます。
あなたが座ろうとしている席の後部席には、二人の男が向かい合わせで座っていました。男たちは楽しそうに談笑しています。一人は大柄な男で、その体躯に似合わない高い声でひきつった笑いを漏らしています。もう一人のほうは、長い髪をだらしなく垂らしている細身の男で、大柄な男の話を聞きながら氷をがりがり噛み砕いています。見るからに、嫌な感じ。
席に座り定食を頼むと、やることもないので宙に視線を彷徨わせました。楽しそうな話し声と、明るい曲調のＢＧＭの雑音が周りにあふれていました。
ふと、あなたは思いつきます。そして紙ナプキンを取り出しました。
長方形の紙ナプキンを丁寧に正方形にちぎり、鶴を折り始めます。
一回一回慎重に紙ナプキンを折り折りして、できあがった鶴をちょこんとテーブルの上に座らせます。とても小さい鶴はじっとテー

ブルの上に倒れないように座っています。
　机の上の鶴が寂しくないように、もう一つ鶴を折ろうと紙ナプキンに手を伸ばしたときでした。
「それで、倉庫娘は元気か？」と大柄の男が言いました。
　あなたは、後から聞こえてきた言葉に含まれている単語の、聞きなれない響きに戸惑います。
　――「倉庫娘」とはなんだろう。
　紙ナプキンを正方形に切り取りながら、あなたは『倉庫娘』とは何かを考えます。
「こんなところで……え？　まぁいいです。元気といっても客層が客層ですから。ほら、品質管理が大事でしょう？　ニーズに答えるのは想像以上に骨が折れますね」長髪の男が答えます。
　折り紙を慎重に折り折り……。
「なるほど。でも信じられないよな。わざわざそんなものに高い金払うなんて。俺には価値のあるものには見えないけど。処理も大変だろう？」
「今日も会いに行くのですか」
「……お前もくるかい？」
　あなたは「処理」という嫌な単語が耳について離れません。
　二つめの鶴を折り終わり、一つ目の鶴の横に並べました。ちょうどウエイトレスの声がして、定食がテーブルに置かれます。
「本当にこの定食でよろしいですか？」
　……すでに『倉庫娘』は、あなたの中で逃れられない呪いの言葉のようになっています。どんなものなのか知りたい。何をしているのか知りたい……ぐるぐると頭の中をその言葉が走り回って止まりません。
　どんな可愛い顔をしているのか……あなたの中の『倉庫娘』は、亡くした娘の顔になり、無邪気に笑いかけます。
　後の席に座っていた大柄な男たちは立ち上がり、お会計をするためにレジの方へ歩き出します。

「本当にこの定食でよろしいですか？」
二人組みの後を追うのです。早く、ほら急いで。

気づけば外は暗くなっていました。鴉の鳴き声がします。
二人が着いたのは、港のはずれにある倉庫群でした。
いくつもの倉庫の間を抜けて歩き続ける二人に見つからないように、倉庫の壁に隠れながら後を追います。
辺りはとても静かでした。男たちは一番奥の小振りな倉庫の前に立ち止まると、周りを何度も見渡して、扉の近くの装置をいじめます。あなたはまじまじと小振りな倉庫を見つめました。
倉庫は灰色に塗り固められています。目を凝らしてみると、ところどころ塗料が剥がれ、それでも無口に聳え立ち、体の中の荷物をしっかりと見守っているように感じました。
――きっとあの中に「倉庫娘」は居るんだ。胸が高鳴るのを抑えようと、口に溜まっているどろどろの唾を飲み下します。
痛々しい声を上げながら扉が上がりきると、二人の男は倉庫の中へ、まるで吸い込まれるようにするりと入りました。あなたは胸の鼓動をいくつか数えてから、扉に近づき、そっと中を覗き込みます。
まず最初に二人の男の背中が見えました。大柄な男は大きめのごみ袋を持っています。長髪の男は青いビニールシートを畳んでいました。そして二人は何かを見下ろすようにしゃがみこんで話し合います。
倉庫の中はとても簡素な作りで、壁の左右に大きさのバラバラな角材が積まれているだけです。どうやら「倉庫娘」は二人の背中で隠れているのだろう、そう考えて二人の背中の奥に目を向けます。
……ですが、上手い具合に隠れてしまっていて、二人が見下ろしているモノが何かわかりません。
もちろん、あなたは二人が見下ろしているモノは「倉庫娘」です。そして、どうしても娘をあなたは見たいのです。ですから、二人に

気づかれないように慎重に体内へと踏み込むのも当然ですし、壁に置いてあった丁度いい角材を手にして、きつく握り、それを二人の頭頂部に振り下ろすのも当然ですよね。
あなたはやっと、「倉庫娘」と対面を果たすことができました。

気がつくと、あなたは娘と一緒に布団の中で眠っていました。
腕の中で眠っている娘に口付けをすると、あなたはいそいそと押入れに向かいます。
お目当てのカメラを手にして、眠っている娘の布団の中に滑り込みシャッターを切ります。上手く取れているか心配なあなたは、立て続けに二回目、三回目とシャッターを切り続けます。
これでアルバムを完成させることができるのです。嬉しくなったあなたは、娘を起こすことにします。
――さぁ、朝だぞ。起きなさい。
娘は寝ぼけ眼を擦りながら上半身を起こします。
「ぱぱ。もう朝？　眠たいよう」
――寝坊すけさんだな。今日は二人で出かけよう。動物園がいい？　それとも遊園地？
「わぁい！　どっちも行く！」
両手を上げて喜ぶ娘を見て、あなたは娘が何も身に付けていないことに気づきます。
床に散乱している服を手繰り寄せ、娘に着せることにします。
「ねぇ。ままは一緒にいかないの？　ままも一緒じゃなきゃイヤだよう」
あなたは困ってしまいます。妻とは離婚してしまったのです。どう言おうか思案しながら、娘の着付けを終えると、
――我がまま言わないの。そんなこと言ったらどこへも連れて行かないぞ。
誤魔化すことにしました。

「ぶう……ゆうえんちは別にいい。もっと寝るう」
あなたはため息をついて、布団に潜り込んだ娘に人形の玩具をちらっと見せます。
――人形遊びでもしよう。だから機嫌を直してくれよ。
娘の顔がふにゃっと緩みました。あなたは出かけるのを止めて一日中人形遊びに付き合ってあげることに決めたのです。

次の日、目を覚ましたあなたは、娘が虫に集(たか)られているのを目にします。
急いで小虫を手で払うと娘に呼びかけます。
――大丈夫か？　どうしたんだ。顔色が悪いぞ。
娘の顔は歪み、昨日着せた服の中からのぞく体には無数の紫色の斑点が広がっています。
「へへへ。大丈夫だよぱぱ。ちょっと体が痛いだけだよう」
力なく笑う娘を見て、目じりが熱くなるのを感じました。急いで顔を手で隠すと、あなたはなんとも言えない嫌な匂いがするのに気づきます。まるで何かが腐っているような、すっぱい匂いが鼻腔を痛めつけるのです。
どうやら娘のほうから、その匂いは漂っているようでした。
それでも構わずあなたは抱き寄せます。
――痛いんだね。ぱぱがついてるよ。ぱぱがいるから。
抱き寄せた娘の体はぶよぶよしていて、今にもぽろりと腕が取れそうでした。その娘の体を優しく丁寧に、それでもきつく抱きしめると、あなたは唇を強く噛みます。
――何が欲しい？　何がしたかった？　ハル……どうして……。
言葉が詰まって出てきません。交通事故で亡くした娘が、また遠い所へ行ってしまう。
娘は虚ろな目をどこかに向けて、ポツリと言います。
「ふたつ……ぱぱにお願いがあるの。聞いてくれる？」

あなたはもちろん頷きます。何度も、何度も。
――うん。お前のためなら何だってしてあげられる。言ってごらん。
娘は、一瞬痛さも忘れたようなあどけない表情で笑います。
「一つはね、ままとぱぱが一緒に居るところが見たい。二つ目は……弟か、妹が欲しいな。お姉ちゃんになりたいの。そしたら、なんでも我慢できちゃう」
娘はそう言い終わると、目を閉じ、意識を腕に預けました。一斉に蛆虫達が娘の全身を覆い尽くします。異臭はさらに増して、部屋の明かりは急に薄暗くなります。布団は黒っぽい何かで汚れ、あなたの服は何かの液体でぬるぬるです。
腕の中で笑っていたはずの娘の顔を覗くと、眼球が収まるはずの場所は寂しく空いており、そこには何十、いや何百もの虫たちが蠢いていました。
……あなたは、その後どうするでしょうか。「倉庫娘」をもう一度求めるでしょうか？
あなたは、

玩具箱から世界を想像する男

ごうごうと吹きすさぶ雪と風のせいで、窓ががたがた音を立てている。窓の外は真っ暗で雪の白色（はくしょく）が闇夜にアクセントをつけるようにちらついている。壁掛時計は深夜一時を指していた。

ここは函館にある少年刑務所の独房である。

四畳半の独房は立て付けが悪く、壁も薄い。部屋の中なのに吐く息は白く、暖房が満足いくほど利いていないので手足の先は感覚のないほど凍えきっている。がたがたという音がなっても仕方がないほど、古いものばかりだった。

独房に備えられているのは、剥き出しのトイレとブラウン菅のテレビ、畳の上に積まれている一式の敷布団。そして机と筆記用具。

この独房に収容されている男は、久手といった。年は十七、グレーの上下服は受刑者として普通ではあるが、頭にぐるぐるに巻かれている包帯は見るものに奇怪な印象を与える。

包帯を巻いている理由は、この久手という男が収容される間際、頭から硫酸を被ったからであった。顔面の皮膚がケロイド状に溶けてしまい、見るものを不快にさせるため包帯で顔を覆い隠していたのだが、そのせいで表情が読み取れず、刑務所の看守は久手を持て余していた。

久手は、窓の外の世界を視認すると、今まで机に向かい貪るように書き続けていた原稿用紙へと視線を落とす。雪がちらついている、と独りごちて鼻歌を歌う。

久手は父親殺しの罪で実刑判決を受けここに収容された。だが、精神に問題があると診断され、本州にある医療刑務所に収容される運びとなった。その本州への移送はこの次の日、一月十二日のことである。

この日――一月十一日――の面会時間に、久手の元を訪れた人がいた。

久手はその人との面会が大層楽しかったのか、楽しそうに鼻歌を歌い続ける。そして、急にハミングを止めると、原稿用紙を検分し始めた。
久手は原稿を検分しながら、着物を着た西洋人形のような顔を持つ少女を頭に思い描く。
そう、面会者である伊井筋（いいすじ）　桐真（きりま）という少女との会話を思い出していた。

面会室に、包帯男と着物を着た銀髪の少女が向かい合せになって座っている。当然プラスティック板で二人の間は隔てられている。包帯男の後ろには大柄の看守、銀髪の少女の後ろには小柄な看守が立っていた。看守たちは、面会室に緊張感を演出している。
少女の手には紐で綴じられた原稿用紙の束があった。
「あなたの書く小説は、なかなか興味深かったです」
人形のように整った顔を久手に向けて、面会者は笑いかける。
「それはよかった」
久手も伊井筋に笑いかけた。包帯で顔面が覆われているため、笑い声で応答した、というべきか。久手の斜め後ろに立っている看守は、包帯男の機嫌がいいことを悟ると、安堵の表情を浮かべた。
「あなたの書いたこの『倉庫娘』という小説、最後の文章が完成されていませんけど、どうしたんでしょう。『あなたは、』の後になんと書くつもりだったんですか？」
伊井筋は銀色の長い髪をかきあげて、久手に問いかけた。
「最後の文章は決まっているんです。ただ、書きたくないというか……完成させるのをためらっているんです。それよりも、あなたは……」
「伊井筋桐真と申します。桐真と呼んでください」
「桐真さん、あなたはどうして僕と話がしたいと思ったんでしょう」
久手はかさついた皮膚が痒いのか、包帯の上から力強く頬を掻い

た。
「僕はあなたを知らない」
銀髪の少女は事も無げに答える。
「ですが、私はあなたを知っている」
「フェアじゃないですね」
「ええ。あなたがここに居ることと同じです。でしょう？」
久手は口の両端を持ち上げてくつくつと笑う。そのおぼつかない笑いは、見るものをぞっとさせるものだった。
「僕はなぜだろう、殺した覚えもない父と、居た覚えのない姉のせいでここにいる。言われてみればそうですね。まったくフェアじゃない」
「記憶を失っているんですか？」
包帯から覗く両の瞳を濁らせて、久手は言葉を繰り返す。
「僕は記憶を失っているんですかね」
「あなたは何処の誰で、何者なんでしょう」
「何者なんでしょうかね」
久手の後ろに立っている大柄の看守は言う。
「こいつ、いつもこんな調子なんですよ。何を聞いても答えやしない。質問するだけ無駄ですよ」
伊井筋の後ろに立っている小柄な看守は、その発言をいなす。
「黙ってろ」
大柄のほうの看守は、そう言われてばつの悪そうに舌打ちをした。
そのやり取りを見て、楽しそうに久手は笑う。
「いいんです。僕が悪いんですよ。僕は過去をもたない。ないものはしゃべれない。捏造するしかないんです。誰か、いませんか？僕の過去を捏造できる人は」
そういって人をなじり小馬鹿にする態度は、大柄な看守の機嫌を損ねたみたいだ。
「人を殺しておいて……この」
伊井筋は、その言葉を遮るようにして久手と看守の間に割って入

る。
「まあまあ。落ち着いてください」
少女は、大きくため息を吐くと久手を見つめ、言葉を吐き出した。
「私は全て知っています。あなたが久手じゃないということも知っていますし、過去を持たないということも理解できています。だって、あなたはこの世界に居ていい存在じゃない、遠藤圭という人物の偽物なんですから」
それを聞いた久手は、体を固め、伊井筋を注視した。伊井筋は、紅に染まった下唇を人差し指で弾く。
「気づきませんでしたか？　あなたは遠藤圭の形（なり）そこないです。人は誰しも自分の分身をもっています。この意味、分かりますね」
久手はいきなり立ち上がり、震え出す。それを見た大柄な看守は、久手の両肩を掴んで椅子に無理やり押さえつける。
伊井筋は、不様に押さえつけられる久手を見ながら、手元に置いてある原稿用紙を彼に開いて見せた。
「見てください。『倉庫娘』という小説、あなたは確かに書きましたよね」
久手は開かれた原稿容姿のマスを目でなぞる。
「一文字も書かれちゃいません。白紙です。『倉庫娘』を書いたのはあなたじゃないです。遠藤圭が書いたものなんです」
少女が言ったとおり、原稿用紙は空白のマスが並べられている、まったくの白紙だった。
「じゃあ僕は……」
「誰でもない存在です。人間の形そこない。架空の罪を犯した架空の存在です。世の中には、そういう架空の領域というものがあるんです。そこから救うことができるのは、私だけです」
少女は立ち上がると、後ろに立っていた看守に目で合図を送る。
看守は頷いて、廊下に繋がる扉を開いた。
「ま、待ってくれ！！　僕は、一体……」
少女は言葉をそっと置くように残した。

「心配はいりません。布団に入り、夢を見るのです。そうすれば救われます。いいですか、あなたは眠りにつくのです。そうすれば二度と目覚めることはありません」
久手は伊井筋に縋るようにして質問する。
「どんな夢を見るのですか？」
その問いに少女は答えず、そのまま扉から姿を消す。
面会室に残されたのは大柄な男と久手だけだった。

久手は、はじめに、という文章を書き終えて、布団を敷いた。
掛け布団を捲り、体を布団と布団の間に差し込ませる。
どんな夢を見るのだろうか、と久手は想像を張り巡らせる。それはとても心地のいい妄想であった。とても魅力的で気が違ってしまうほどに。
まさか自分がなあ、と一人言を呟き目を瞑る。
ごうごうと吹きすさぶ雪と風のせいで、窓ががたがた音を立てている。窓の外は真っ暗で雪の白色（はくしょく）が闇夜にアクセントをつけるようにちらついている。壁掛時計は朝三時を指していた。
独房に備えられているのは、剥き出しのトイレとブラウン菅のテレビ、畳の上に敷かれている一式の敷布団。そして机と筆記用具。
もはや独房に敷かれた一式の布団の中には、誰も居なかった。

壁伝いSOS1　こんこんと鳴る壁

――曇り空と同化する建物。
僕が病棟を見上げたときに思った第一印象はそれだった。
灰色で塗り固められた病棟を見上げて僕は白い息を吐く。
12月だというのに、生暖かい風が頬を撫でるように吹き抜けていく。
目の前に聳え建っているのは、精神病棟だった。聞くのも嫌な、セイシンビョウの人が入院する病院だ。
これから病棟にいるであろう姉を訪ねに、この不気味な四角い箱の中に侵入しなければならない。ただ、姉の安否を確認するだけなのだけど、僕にとっては心苦しく、同時に怒りを覚える行為であった。
頭を振ってそんな怒りを頭の片隅に追いやり、足を前へ踏み出す。
大丈夫、姉が好きな折り鶴もちゃんと千羽ぶん折って、肩掛け鞄に入れてある。僕はそれを手渡して、微笑みかけてやればいい。
なんて言えばいいのだろう？
かける言葉は用意していなかった。だって、自分が傷つけられた分けじゃないし、あくまでも姉の気持ちは姉にしか分からないのだから。下手な言葉では、もしかしたら姉を傷付けてしまうかもしれない。あれこれと言葉をかけないように気をつけなくてはならない。
僕は、病棟の入口に近づくにつれ、だんだんと不安感を募らせてゆく。
どういって励ませばいいのだろう。千羽鶴は姉の心を癒してくれるのだろうか。
入口の前に着いて思考を巡らせていると、鼻先にぴっという冷たさを感じた。
僕は顔を曇天の空に向ける。
雪だ。雪が降ってきた。

今年は雪が振るのがだいぶ遅れている。天気予報のキャスターは楽しそうにそう告げていたのを思い出した。
僕は視線を入口のガラス扉に向けて、唇を噛む。
受け止めることの出来ない事実は、忘れてしまえばいい。
そのために家族という絆があるんだ。
父や母でなくても、この弟である僕が。
姉を守るのは他の誰でもない僕だ。
僕は決意をして、精神病等の入口のガラス扉を開けた。

僕は中学を卒業して、受験を越えて高校生になった。そこまでランクの高い高校ではなかったけれど、親友である御名風（みなかぜ）ハルと一緒の高校に行くことが出来て若干嬉しかった。そのことを、まだ姉に伝えていなかった。父や母が僕の受験に迷惑がかかると、姉の居場所を受験を理由に教えてくれなかったから、姉が入院してから顔を合わすのは初めてのことなのだ。
両親は僕から姉を引きはがした。何度もそのことに不平不満を言った。けれども、両親は聞いてくれなかった。仕方がないことだと一辺倒の答えばかり。けれど、僕は諦めなかった。
高校の成績が上位十番以内であれば姉の居場所を教えろと発破をかけ、どうにかして姉の現状を知るよう努力したのだった。
見事入学早々の期末試験で十番以内を確保して姉の場所を教えてもらって、今に至るのだけど、少しだけ釈然としなかった部分があった。
どうして、両親は僕に家族である姉の現状を教えてくれなかったのだろう？
普通なら、僕は姉の一人だけの弟なんだからと、教えるのが普通なんじゃないのか？
いろいろな疑問があったが、そんな疑問は浮かべるだけ無駄だと思って生きてきた。
僕の世界では、現実はシステマティックで合理的な世界なのだ。

人それぞれの能力のメーターに出来ることと出来ないことが割り振ってあって、能力値の高い〇大に出た人が見える世界と、能力値の低い僕が見ている世界は完璧に違う。字の通り壁に隔てられた世界に生きているのだ。

そんな思いをずっと抱いて生きてきた。〇大に入学出来るような偏差値がないと、生きる価値がない。そう、本気で思っていたのだ。

それを根底から否定する存在がいた。それは姉だった。

姉はいつも優しい声で、可愛い顔を隠すように切り揃えられている前髪を揺らして、言うのだ。

「元気だして、ほら私がいるから。けーちゃんはどうなっても私の一人だけの弟だよ？」

僕は受験の期間、幾度となく姉の優しい声に癒された。そうでなくとも、僕が子供だった時分から何度となく迷惑をかけたのだ。恩返しするとしたら、心の安定を崩してしまった今しかないだろう？

僕は、入口の受付の女性に姉の居場所を聞き、足早にそこに向かう。

どうやら姉は三階の右廊下（ろうか）の突き当たりの左側にある部屋にいるみたいだ。

僕は走って姉の病室の扉を開けた。

病室は姉のベッドだけが置いてあった。それを見て、初めて個室だったことを知った。

目の前のベッドに横たわっている少女は、紛れも無く姉だった。

姉は、ふがふがと掛け布団を動かしている。

「三春姉ちゃん？」

姉は僕の姿を見て、もう一度動こうとするが、そこまで動くだけの力がないのか、ぼこぼこと掛け布団を蹴っては、「ふー」と言うだけで、やがてゆっくりと動きが停止してしまった。

僕は駆け出し、姉の顔を見る。

姉の表情は青ざめて、力なく項垂れている。長い睫毛も同様に濡

れ伏せていた。
「大丈夫！？　具合悪そうだよ」
何度か声を掛けるが、返事がない。僕は慌ててナースコールをかけるためのボタンを、ベッドの頭部分から探りだし、見つけて押す。
そのとき、姉の頭頂部分――右の壁のほう――からこんこんと音が鳴り、それからすこし経って壁越しから幼子の聞こえてきた。
――お姉ちゃんを助けたい？
僕はその子供の声を聞いて一瞬耳を疑ったが、姉の顔色の悪さをなんとかするのが先決だと、枕元に放り投げられているボタンを手にとって、ナースコールをかけ続ける。
それでも声は止まない。
――助ける方法があるよ。
何度押しても応答のないボタンを投げ出し、両手で耳を塞ぐ。
それでも声は止まらない。
――すべて知っているんでしょ？
「誰だ？　どうして姉を苦しめるんだ。どうして僕を苦しめるんだ」
今度は目を瞑る。けれど、瞼の裏に姉の苦しむ顔が浮かび上がる。
――いい？　これから言うことを順番を守ってするんだよ？
この声は誰だ？
もう一度声がした。
――いい？

1

僕は目を覚ました。
はっと意識を揺り起こす。どうやら随分長い間ぼーっとしていたみたいだ。
一旦背伸びをして欠伸をこなすと、もう一度ばかし学習机の上に据え置きされているパソコンのモニターを凝視する。

モニターは、ちりちりと点滅しながら、メモ帳を表示している。メモ帳には、たくさんの文字が敷き詰められていた。

さっきまで書いていた創作小説の文章を流し読みして、一通り確認をする。それが終わるとフォルダに保存して、パソコンの電源を落とした。

ぐるりと回転椅子を回して部屋を見渡してみる。視界の左側にあるカーテンの隙間に目を向けると、どうやら窓の外は雪景色みたいだ。雪が地面に向かって降りつけている。

目元がしぱしぱするのを感じたので、目元を手で揉んで首を鳴らす。小気味良い音が部屋に鳴り響いた。

かなり長い時間椅子に座っていたみたいだ。……それなのに、小説のほうは数行しか進まなかった。

構成はすでに出来上がっているのに、なかなか良い文章が思いつかない。スランプなんて経験したことないのだけれど、これがそうなんだろう。

（気分転換に、首を３６０度回してみようか）

僕は、そんなことできっこないのに、いちおう無理くり首を捻ってみる。結局、首と共に肩も動いてしまって、ちっとも面白くはなかった。

回転しないものは回転しないのだ。そういう風に作られてないんだから。

くだらないことをしたと一人ごちて、椅子から立ち上がる。そして何事も無かったかのように一階の居間へ下りようと、玄関に通じるドアに向かって歩き出す。

……ふいに、灰色の壁のほうが気になって、足を止めてしまう。

三春（みはる）姉ちゃんの部屋と弟である僕の部屋を仕切っている灰色の壁は、強固に聳え立っているように見えた。三春姉ちゃんを必死で守るように、がっちりと。

（三春姉ちゃんの痛みの程度を数値で表示することはできないだろうか）

僕はそんな馬鹿馬鹿しいことを真剣に考えてみた。１８０？　それとも２００？　それとも……そもそも１００がどれぐらいの痛みなのだろう。

唐突に視界を襲う眩暈。目元がしぱしぱしてくる。

もう一度、手で揉むために目元へ指先を向かわせると、湿った液体が目尻から流れているのを知った。

少し疲れたみたいだ。僕は、居間に降りるのを気持ちぶん……疲れが取れるまで遅らせることにして、部屋でもう少しグズることにした。

灰色の壁に隣接しているベッドに向かって歩き出すと、突然壁越しから乾いた音がする。

――こんこん。

僕は返事してあげるべきか迷った。返事をすれば三春姉ちゃんが傷つかないのか分かっていた。けれど、それをすることに気乗りしなかった。

少し間を置いて、また壁から壁を叩く音がする。

――こんこん。

ベッドに飛び込み枕で頭を覆い隠す。

音は、もう一度だけ鳴って、鳴りを潜めた。

――こんこん……こん。

2

ちょうど一週間前のことだ。

いつものような家族四人の夕食が終わると、突然に父さんが僕に向かって「話がある」と言い出した。

僕は僅かばかし体を強ばらせて、思い当たることを懸命に頭の中から探し出そうとした。

そんな僕の隣で食器を片付けていた三春姉ちゃんは、一瞬手を止めて僕のことを覗くようにして見ると、顔を曇らせた。けれどそれ

は一瞬のことで、三春姉ちゃんはそそくさと僕の分の食器まで重ねて台所に持って行き、居間のドアを開けて子供部屋のある二階へ消えていった。
向かい側に座っている母さんは母さんで、わざとらしく咳払いをすると、いそいそと親父の食器と自分の食器を重ねて立ち上がり、台所のほうへ消えていく。
「……ねぇ何のこと？　もしかして勉強のこと？　それなら三春姉ちゃんにから教えてもらっているから心配いらないよ」
僕の言葉になんら影響されず、父さんは母さんにお茶の催促をする。
多少ぎこちなく返事をする母さんに一瞥くれると、一方的に話し始めた。
「実はな、お前に隠していることがあるんだ」
親父は僕を睨みつけながら、重そうに唇を開けて僕に向かって言った。
「大分昔にな、三春は、ある事件に巻き込まれて、心と体に大きな傷を負った」
「……何の冗談？」
冗談をいうような父ではないことは長い付き合いで重々承知している。だけれども、あまりの唐突さに目を丸くしてしまった。いや、恐ろしくなったといったほうがいいかもしれない。
母さんは二人分のお茶をテーブルの上に置いて、居間と外を分けるドアをちらちらと落ち着きなく見ている。三春姉ちゃんは部屋に行ったっきり戻ってこない。
「……それ、僕だけ知らないこと？　家族の中で僕だけ？」
家族が僕にずっと隠していた……それが僕には恐ろしく感じたのだ。
父さんはじっと僕の目の奥を見据えて、喉仏を動かした。テーブルの上のお茶をひっ掴むと一気に飲み下して、三春姉ちゃんが巻き込まれたらしい事件の顛末を詳しく語り始めた。

「三春が二十歳の時……つまり今から一年前だな。ある冬の日、変質者に誘拐された。どうやら帰宅途中、一人でいたときに連れ去られたらしい」
やけに淡々と語っているのはわざとだろうか。父さんは目線を動かさず、まるで何かに縛られている猛獣に見える。
「……その二日後、三春が発見された。当時住んでいた〇〇県の霊園で……裸のまま……茂みの中で放置されていた。気を失っているだけで一命は取り留めたものの……」
父さんの目は血走っている。母は首を出来損ないの玩具みたいに振り回して、ドアをちらちらちらと落ち着きなく見ている。
「三春は誘拐犯に性的暴行を受けたらしく、心を病んで、病室の窓から……」
僕は、眩暈を覚える。視界がブレて、今ここがどこなのか分からなかった。
「え。ちょっと待って。三春姉ちゃんなら生きてるじゃない。死んでないでしょう。聞いたこともない」
もちろん僕の声は父さんには届かない。
「それから、そこには居づらくなって、ここに越してきた。本当は伏せたまま暮らしたかったんだ。だがな、三春がどうしてもお前にだけは秘密を打ち明けたいっていうもんだから……」
そのとき、居間のドアが開かれて、三春姉ちゃんがおずおずと入ってきた。
「ごめんね、けーちゃん。けーちゃんだけには隠したくなくって。ショックだったでしょう？」
三春姉ちゃんは困惑していた。当たり前だ。僕のほうが困惑してる。だけど、その当たり前であろう反応が僕には恐ろしく感じられた。
「いや、ちょっと。ちょっと待って……」
僕の声はやっぱり届くはずがなかった。父さんは、顔を顰めて胸ポケットからキャビンマイルドの箱を取り出し、一本引き抜き、ラ

イターで煙草の先っぽに火をつける。
大きく煙を吸い込んで、どこか遠くを見たあと、おもむろに立ち上がり三春姉ちゃんの肩に手を乗せた。
「あとは……二人で話し合いなさい。きっと、圭(けい)も聞きたいことがいろいろあるだろうから」
三春姉ちゃんは、少し目を潤ませて、僕をきつく抱きしめた。
「……けーちゃん。けーちゃん。けーちゃん」
泣き始める三春姉ちゃんを……僕はなんとか抱きしめることができた。

3

僕は根気負けして、いつものように返事することにする。
――こんこん。
このやり取りは、三春姉ちゃんが取り付けたものだった。あの日、三春姉ちゃんが泣いているのを僕が慰めたときに――三春姉ちゃんの身に起こった出来事を聞いたときに――泣き顔で、僕にそうするよう懇願したのだ。
どうやら三春姉ちゃんは、事件を聞いたことによって僕が自分を嫌うのではないかと心配になったらしい。僕はそんなことないよと言ったのに、なかなか信じてくれなかった。
それならばということで、三春姉ちゃんが心細い時に壁を叩いて合図する。それに僕が嫌いじゃないよという意味を込めて、合図を返すのだ。それがこのやり取りの持つ意味だった。
正直あの日以来三春姉ちゃんのことも、父さんのことも、母さんのことも良く分からなくなってしまっていた。
父さんに何度か説明を求めたけれども、「勉強しろ」の一点張りだったし、母さんにいたっては、その話を振ると何処かへ逃げていく。もちろん三春姉ちゃんには聞くことなんてできない。
大体……そんな事件なんてあったのだろうか。家族三人で何か企

んでいるのではないだろうか。そんな疑心暗鬼に満ちた気持ちで今までを過ごしてきた。
――こんこん。
僕は、機械的に返事を返す。
――こんこん。
……もしそのような事件が三春姉ちゃんの身に起こったとしたら、僕が今日会った三春姉ちゃんは一体誰なんだろう。全くの別人なのだろうか。そもそも三春姉ちゃんはどういうつもりで僕にこの話を打ち明けようと思ったのだろう。傷ついてまでして僕に知らせる必要はあったのだろうか。
全てが謎だった。
考えれば考えるほど僕には全く関係の無い話のように思えた。
――こんこん。
――こんこん。
こんなことを何回も繰り返し考えて、とうとう居ても立ってもいられなくなった。
（その事件の記事を探そう。そうでなくても、）
――こんこん。こんこん。
（三春姉ちゃんのアルバムを引っ張り出して、五年前と五年後の写真を見比べてみて、顔が似ているか似ていないか確認してみよう）
――こんこん。こんこん。
僕は、取り合えずベッドから立ち上がり部屋のドアから廊下に出た。
結局父さんは、前聞いた似たようなことを繰り返して、僕を追い返した。アルバムの場所すら教えてくれなかった。母さんにも尋ねたが、それも逃げられてお終いだった。
とぼとぼ部屋に戻ると、気を取り直して、パソコンに電源を入れる。
ネットを使えば、事件の記事ぐらいは引っ張り出せるだろう。
父さんがあの時語っていた事件の詳細を思い出しながら、検索フ

ォームに文字を打ち込んでいく。
○○県　霊園　二十歳　強姦……。
最後のキーワードを苦々しく思いながら打ち込み、検索をする。そして、丁度一番上に表示されたリンクをクリックしてみた。
だけど、リンクが切れていたみたいでお目当てのウェブページは開かなかった。
回転椅子を一回転して、目元を指で揉み解す。そうしていると、突然部屋のドアが音を立てる。
――こんこん。
壁からじゃない、新たな「こんこん」を発見した。ドアから音がするのは初めてのことだった。僕はパソコンのモニターの電源を落とし、ドアまで行って、ノブを回そうとする。
その時に、ふと、本当に開けていいのだろうか。もし開けたらどうにかなるのではないだろうかという不安が頭を過る。
――ねぇ、けーちゃん。開けて。寂しいよう。
三春姉ちゃんのその一言が僕を心苦しくさせた。……どうしてもドアを開けなければならないみたいだ。
灰色のドアの向こうの廊下には、パジャマ姿の三春姉ちゃんが、枕を抱きながら立っていた。後ろ髪をピンク色のヘアゴムでまとめて右側に流している。いつもの三春姉ちゃんが寝るときの格好だ。
胸が高鳴るのを感じる。それと同時に不安感がどんどん増してくる。
「どうしたの？　三春姉ちゃんってそんなに寂しがりやだったっけ？　前は頼れるお姉ちゃんって感じだったのにな」
僕はドアノブから決して手を離さずに、三春姉ちゃんに何気ない返事をする。
三春姉ちゃんは、枕に顔を埋めながら、ほっぺたを膨らませた。
「……前と今は違うもん。それより、酷いよ」
三春姉ちゃんは右で一纏めにした後ろ髪の束を適当につかみ指でいじる。

「え？　ごめん。僕何かしたっけ」
僕は喉を鳴らした。ごくり。ドアノブを握っている手はじんわりと汗を滲み出している。
「……こんこんって、すぐにへんじ」
僕は三春姉ちゃんの心が読めなくなっていた。いや、そもそも彼女の心をわずかでも読めたことがあっただろうか。彼女はいったいなんなのだ。
「お姉ちゃん、けーちゃんに嫌われたら、生きていけないよう」
「……ははは。嫌いになんてなるはずないじゃない。三春姉ちゃんのこと大好きだよ。心から思っている」
「だって、お姉ちゃん傷物になっちゃったんだよ？　お嫁にいけない体に――」
「――そんなこと無いよ。嫌いになんかならない。ずっとそばにいる」
「じゃぁ今すぐ抱きしめて……」
三春姉ちゃんが枕を落っことした。それと同時に彼女の手のあたりにキラリと光る何かが見えた。
ドアを思いっきり手前側に引っ張る。けたたましい音をたてて、灰色のドアは閉まった。
何かが見えたはずだ。キラリと光る……アレはなんだろう。僕をどうにかするつもりだったのだろうか。
目を剥きながら灰色のドアを凝視していると、ドア越しから彼女のすすり泣きが聞こえる。
――いっぐ……。どうして？　そばにいるって言ったじゃんか。寂しいよう。寂しいよう。
僕はなんとか言い訳しようとした。だけれども思いつく言葉は一つもなかったし、あった所で出てこないということを確信していた。だって、口が乾きすぎていたから。
――けーちゃんは私のおとうとなんでしょう？
しばらく同じ言葉を繰り返していたが、やがて静かになり……ま

た不吉な音が鳴る。
――こんこん。こんこん。
僕は返事することができなかった。そして、そのこんこんが消えてしまうまでドアノブから手を離す訳にはいかなかった。
……僕は、三春姉ちゃんのおとうとなんだろう？

×××

○○新聞　１２月２９日
父親を絞殺、凶器の縄で首を吊って少年Ｋ意識不明の重体

１２月２８日午後１２時半ごろ、裂目（さけめ）町二条四丁目の住宅の一室で「夫が殺された。息子が殺した」と一一０番通報があった。
警捜一課によると、被害者はこの住宅の家主である遠藤隆（４８）であると判明。検死の結果直接的な死因は首を締められたことによる窒息死とのこと。
また、同時刻、同住宅の二階の一室で首を吊っていた被害者の子供で長男の少年Ｋ（１７）を保護。首を吊ってから発見されるまでの時間が短かったため一命は取り留めたが、意識不明の重体で病院に搬送された。
警察は、通報者で被害者の妻である遠藤美鈴（４６）の証言や、少年Ｋが首を吊るのに使用した縄に被害者のと思しき唾液が付着していたことから、被害者を絞殺した凶器と同一のものであると断定、少年を最重要容疑者として捜査を進めている。
また事件当日、現場の近くに不審者が居なかったか聞き込みを行なったところ、大柄な男を見たという目撃情報を入手。この大柄な男の捜査も並行して勧める模様だ。

事件の真相は掴めず

父親を絞殺した疑いがかけられ、自らも首を吊った少年Kの事件（以下、裂目町少年K事件）の捜査が早くも暗礁に乗り出していると警察は記者会見で発表した。

その理由は、発見者であり容疑者の妻の遠藤美鈴さんが錯乱しており正確な証言が得られないことが一つ、また容疑者である少年Kの意識が戻らないためだ。

この事件の記者会見で警察は「少年Kの意識が戻り次第逮捕勾留し、事件の全容解明に努める」と発言した。この発言（逮捕勾留）に少年法の強化を呼びかけている弁護団体は、発言撤回を要求、証拠物件の不備と主張。会見現場は終始大荒れの様相で締めくくられた。

一方、不審に思われた大柄な男の情報も十分に集まらないため、警察は少年Kを第一の容疑者とみて捜査を進める方針だ。

ハルの冒険１　少年はちょっとやそっとのことじゃ頷かない！

１

――あなたは、けいちゃんの親友でしょう？

１２月の月が綺麗な夜一時。ひとけのない山奥の忘れ去られた神社。

山奥では本当にいろんな音がする。古ぼけた神社であっては言うまでもない。

枯れ葉が石段に擦れる音。

「はぁ、はぁ」

からっ風の吹き抜ける音。

「はぁ、はぁ……」

両脇に生えつらなるカエデの木々の騒めく音。

「はぁ……」

そして、ただひたすらに階段を上り続ける変わり者の息遣い。

厚手の黒いパーカーに、カーキ色の七分ズボンを履いている小柄な少年。パーカーのフードを目深にかぶっていて顔は一見して見えない。それが、変わり者の風貌だ。

変わり者である所以は、普段なら誰もこの神社に参拝なんてしないからだ。

参拝どころか散歩する人の姿もこの神社では年中見ることが出来ない。

そんな場所で、しかも夜中に、この少年は階段を黙々と駆け上がっている。これが変わり者ではなくてなんであろうか。

変わり者ことミナカゼ　ハルは、誰もここに訪れないからこそこの場所を選んだ。他人に見られては困る理由があったからだ。

鳥居から本殿に向けて真っ直ぐ上に伸びている石造りの階段を、少年はただ黙々と上り続けている。

ときおり枯れ葉が鳴らす音を聞いては、それを合図に立ち止まり、誰か来たかと周りを見渡して、息を整えまた上る。
階段を上りきり参道を駆け抜け、神様の鎮座する本殿の前にたどり着き、賽銭箱の前で立ち止まる。その賽銭箱の上からだらりと垂れている綱を力いっぱい揺らし、鈴をがらんと鳴らす。
鈍い音を確認してから二拝二拍手をきちんとこなし、最後の一拝でしばらく手を合わせる。
ただの普通の参拝風景である。だが、やはり普通ではない。
その理由は、この神社が「首なし神社」として有名な神社だからだ。……要するに、いわくつきの神社で、山奥というのもあって、誰もここに来たがらない、忘れられた場所ということだ。
それでも少年は、この神社を選んだ。
本殿の明かりは、ハルを仄かに照らしている。その明かりはとても弱々しく頼りないものでもあった。こんな寂れた神社で願をかけて、はたして叶うのか疑わしいほどに。
それでもハルは願うことをやめなかった。
「お願い……します」
そう口に出すと、本殿から体を翻し鳥居に向けて歩き出す。少し寒気を感じてパーカーのポケットに手を突っ込んだ。ふと気づいて、賽銭箱にしゃがみこむと、箱の周りに敷き詰められた小石を選び、拾いあげてポケットに滑り込ませる。
目的を終えて、立ち上がり一つため息をつく。
――本当ならひしひしと沸き上がる達成感に小躍りしたい気持ちであるはずだ。だが、終わったあとに感じた気持ちはそれと別種の虚無感だったのだ。そう、胸が空っぽになったような。
ハルは夜空を見上げて、また、ため息をついた。上の空である。
空に浮かぶ三日月はとてもおおきな弓なりを形づくっていて、黄色に光り輝いている。
この神社の境内には本殿から漏れる明かりしかなく、ほの暗い。微かにぼうっと灯る本殿の明かりと、鋭く輝く三日月の月明かりが

さらに不気味な神社を演出していた。
ハルは気持ちを切り替えたように右手をきつく握ると、足を前に踏み出した。
とたん、体が仰向けにひっくり返り、境内の地平線に吸い込まれるように消えていく。
「なぁあああああっ！！」
なんとか体勢を立て直そうとするが、ハルの足元には足場がどこにもなかった。そこでやっとハルは階段を踏み外したことを悟った。
「おちるうううううううううううううううううう！！」
そのとき、誰かに後ろから引っ張られる。
引っ張られたハルは、何者かに受け止められたのだ。
ハルにとって、一瞬何が起こったのかわからない出来事だった。それも当然のことで、この少年にとっては、この神社は誰もいないはずの空間であったし、それを何度も確認したはずだと思っていたのだから。
いつのまにか体を後ろから支えられていたハルは、ようやっと大柄な誰かに受け止められてることを知った。
「あ、あれ？　誰か……」
「……大丈夫か？」
声のトーンから、ハルは女の人だろうと推測した。
「お姉さん？」
まず頭に思い浮かんだことは、このまま下におっこちなくてよかったな、という間の抜けた感想だったろう。感謝の気持ちとか、どうしてこの場所にいるのかとか、どうして落ちそうになったのかとか……いろいろと言うべきことを思い浮かべただろうが、少年の口から飛び出た言葉は、場にそぐわない戯言だった。
「つ、月が綺麗だったから……なんです」
言ってしまった後で、ハルは脱げてしまったパーカーフードをかぶり直し、両手で頭を抱え、やってしまったと後悔する。
とっても恥ずかしい。冗談じゃなく本当に顔から火が出そう。そ

う思ったのか、ハルは、じたばたともんどりを打とうとする。が、脇腹をしっかりと固定されていたので、体は微塵も動かない。ハルはようやっと、ワンテンポ遅れて、体がしっかりと固定されていることに気づく。

慌てて立ち上がろうとするハルの体が、勝手に持ち上がる。

後ろにいる女の人がハルの体を持ち上げたのだ。そのまま体は起立する。

「上ばかり見ていては危ない」

女はそういってハルのズボンをパンパンと払った。ハルは取り敢えず体だけでも感謝の意を示そうと、お辞儀するために振り向こうとする。が、両の腕はがっちりとつかまれて、振り向くことは叶わなかった。

後ろの女は、

「鳥居を抜けるまで誰にも会ってはいけない。そうだろう？」

といって、つかんだ腕を離した。そしてハルのフードのてっぺんをポンポンと叩き、背中をつんっと押す。

どうやら、振り向かずにそのまま行け、という合図らしい。

「あ、ありがとうございます」

ハルは、フードの端をつかみ、深くかぶり直した。

2

参道から鳥居まで続く階段を下るあいだは、とても不思議なひとときだった。

――確かにハルの後ろに女の人は居る。けれど、彼女のあまりにかすかな足音と、会話の一つもしようとしない態度に、本当に彼女は存在するのか？　人でない何かなのではないだろうかと思っても仕方ない。

顔も見ていない存在に対する疑惑の念をすっきり晴らすことが出来なかったのだろう、ハルは何度も首を動かしていた。

その疑惑を取り除くため階段を下りるあいだ、ハルは何度も彼女に話しかけようとした。けれども、そうしようとする度に自分が口下手であると思い返して、諦めたように首を正面に戻した。
ハルの不思議な挙動は、首を動かす他に、もう一つあった。
それは、この人物に対して怪しく思っているのにも関わらず気持ちが穏やかに落ち着いたのか、柔和な笑みを浮かべたのだ。
――確かに柔らかい何かに包まれているような、ぬるいお湯に使っているような居心地で、強い圧迫感も感じない。そういった、攻撃的な雰囲気を彼女は微塵も醸し出していなかった。
赤色の鳥居を抜けて、ようやくハルは後ろを振り返る。
今までハルの背中に立っていたのは、身長が一メートル八十センチほどある大柄な女だった。
顔立ちは非常に整っていて、鼻梁は筋通り、彫り深い目元。外にハネる赤みがかった短い黒髪が、凛々しさをより一層際立てている。服装はチーターのロゴで有名なスポーツメーカーの赤色ジャージであったが、その運動服特有のだらしないイメージはなく、ま逆の清潔なイメージを見る者に与えさせる。きっと筋肉が人よりもついているからだろう。どちらかというと、アスリートというよりも、軍人さんみたいだとハルは思う。
「その、軍人みたいでカッコイイです」
そう声を出してしまってから、ハルは失礼だっただろうか物案じ、あからさまに目を逸らせた。そのようなハルの想像に反し、彼女は頭をぽりぽり掻き、少し照れたようにもじもじと体をくねらす。そして握手を求める手を伸ばす。
「ありがとう。私はクリフ」
ハルはクリフの伸ばした手をどうしようか、一瞬思案してから、握ることにする。その手は初冬の夜には似合わず、とても暖かい。
「あったかいです」
「……お前の名は？」
「……ハル。御名風（みなかぜ）　ハルです」

クリフはそのまま手を引っ張って、道路をまたぎ、鳥居の向かい側にある公園のベンチまでハルを連れていく。
公園には、キリンを模した滑り台と、黄緑色一色ののぼり棒（ところどころペンキがはげ落ちて錆び色を見せていた）、あとは二畳ほどもない砂場があった。どれもが今では誰も遊ばない、誰も喜ばない遊具の類だったが、この公園を囲う茶色い柵の下一面に広がる街明かりや、海面が反射する夜明け光は絶景である。
クリフが何も言わず滑り台の向かいにあるベンチに腰を下ろしたのを見て、連れられたハルも同様にクリフの隣に腰を掛ける。
彼女は物々しく口を開いた。
「……何をお願いしていたんだ？」
「え？」
「お百度参り」
クリフはそう言って、顎に手をあて頭をかしげた。どうやら古い記憶を呼び起こしているみたいだ。
「……違うのか？」
ハルはその言葉を聞いて驚き声をあげる。
確かにハルはお百度参りをしていた。それも、今日で百日目の大団円で目的を終えたところだった。
でもそのことを他の誰にも話した覚えはハルにはなかった。だって、誰かに話したならば願いは叶わないと有名であるし……そんなことを話せる人もいないのだから。
参拝中は誰にも会ってはならないという制約も有名だ。だからわざわざ郊外からかなり外れた、山奥の寂れた神社までこうしてハルは参拝していたのだ。
「ど、どうしてそのことを知っているんですか！？」
慌てていたせいで、無意識裡に大きな声を出してしまう。
クリフは何でもないことのようにさらりと答えた。
「私は毎日ここを走っているんだ。だからハルを見たのはこれで初めてじゃない」

そしてにっこりと笑う。
「実は毎日お前を見ていた」
「た、助けてくれて、ありがとうございました」
正直ちょっと引くな、変態さんだな、とハルは思ったのか、腰を引き、距離を取ろうと、ハルは立ち上がる。
そうやって逃げようととするハルの腕を、クリフはがっちりとつかむ。
「……待て」
「なにか？」
振り向くと、クリフがポケットに片手を突っ込み何かを取り出す動作が見えて、ハルは怯える。身の危険を感じたハルは体を震わせて、クリフを見下ろす。一方、クリフはお構いなしにポケットから手を抜こうとする。
「ま、待ってくれ。渡そうと思ったんだ」
「何をだよっ！！　あ、すいません、け、結構ですので……大丈夫です。まだ見ていませんから、関係ないですからオオサメクダサイ」
逃げようと腕を引っ張るが、逃がすまいとする大女の怪力には叶うはずも無く、それどころか掴む力がだんだん増しているせいで、掴まれた腕がミシミシと音を立てる。
かなり力強く握られたので、とうとう耐えられず「いたっ」と声が出てしまった。
その声を聞いてクリフはぱっと手を離す。
突然腕を離されたので、それまで逃げようと足に力を入れていたハルはベンチとは反対方向の砂場に吹っ飛んだ。
「そんな物騒なものじゃない。ただ、この、缶コーヒーを」
弁解しよう思ったのか、クリフはあたふたと身振り手振りで腕を動そうとする。だが、ポケットにつっこんだ腕がなかなか抜けず、それでも無理やりポケットから手を抜いたばっかりに缶コーヒーが勢い良く発射されてしまった。その缶コーヒーは砂場に倒れた砂まみれのハル目掛けて一直線に飛んでいく。そして、ハルの頭をすこ

ーんと鳴らした。
「は、は……すまん」
ハルはゆっくりと頭を抑える。脱げたパーカーフードをかぶり直す。足元にはさっきクリフが言ったとおりの、なんの変哲のない市販のコーヒーの缶が転がっていた。……どうやらマンデリンのコクが美味しさの決め手らしい。
「……」
その缶コーヒーを拾い上げて、クリフのほうにゆっくりと時間をかけて振り向く。
「あ、あの……その……お疲れ様」
目の前のベンチ座っているクリフは気まずそうに苦笑いを浮かべている。
ハルはとりあえずといった調子で、こういった。
「ナイスショット」

3

ハルは手の中で缶コーヒーの缶を弄び、ベンチの隣脇にそっと置く。
「……とってもぬるい……ですね」
――ベンチに二人並びながら座っている。階段を下りるときに感じた不思議な感覚がふんわりと蘇ってくるようだ。ぬるいお湯に浸かっているような、柔らかな布に包まれているような、とにかく不思議な感覚だ。
「神社にいるあいだ、クリフさんがぼくに話しかけなかったのは、お百度参りだと確信していたからですか」
クリフはハルが置いた缶をいったんみてから、ハルの顔をむいた。
「合っている。でも、今日が何日目なのかは知らない」
「なぜ、お百度参りだって分かったんですか」
ハルがそう言うと、クリフは右のほうを指さす。指を指したむこ

うには、神社の鳥居があった。
「鳥居の根元に積んである石。石で回数を数えるのはいいが、ちゃんと最後まで片付けなきゃだめだ。気づいた日から私がずっと片していた」
「す……すいません」
そういってハルは肩をすくませる。
「でも……気づいていたのなら、話しかけるタイミングはずっとあったじゃないんですか。ぼくが鳥居を出て石を置いているときとか……」
「……最後まで待つ必要があった。今日はこうして長話をするつもりだったから、石の個数が九十九個になるまで待ったんだ」
「な、なるほど……」
数秒の沈黙。
「あれ？　どうしてクリフさんは階段の上にいたんですか？」
「もう必要ないであろう小石を戻すために、賽銭箱のある階段の上に登る必要があった。そのとき空を見上げながら歩いているハルを見つけた」
「そ……それもすいませんでした」
申し訳なく思ったのか、ハルはもっと体を縮ませた。クリフはハルの考えていることに気づいたのだろう、階段の上でやったように頭に手をのせて、ぽんっと叩く。
「気にするな」
「……」
また来る数分の沈黙。
ハルは身を縮めたまま、恐る恐るクリフをちらと覗き見た。クリフはとても幸せそうに微笑んでいた。
「何が目的なんですか？」
そうだ。もしかしたら何か要求してくるかもしれないと思ったのか、クリフの真意が分からず、ハルはどうしても怯えてしまう。
「あの……長話って、なんですか？」

「まず先に、後を付けるような真似をしてしまい、申し訳なく思ってる。許して欲しい」
クリフは頭を深々と下げる。それを見て、ハルはきょとんとした。
「別にいいですよ。ぼくも久しぶりに人と何気ない話が出来て嬉しかったですし」
ハルにとっては本心だった。こうやって、アレコレものを考えて言葉を選ばなくて済みそうな人はハルの周りには一人もいなかった。ハルの周りに居る人は総じて気を使わなくてはならない対象だった。そうしないと――
「――ハル。また何か深く考えているのか？」
「えっ？」
「顔に出てる。私はそういう表情は嫌いだ」
「す、すいません」
「自然に口から出た言葉を話せばいい。想像したり、考えたりするのはそのときがくるまで他のやつに任せればいいんだ」
「トンチンカンですね」
けれども、その二人の雰囲気は妙に優しく甘い様子で、ハルは笑いを漏らす。クリフもそれをみて笑った。
しばらく二人して笑いあう。クリフは満足げな表情で、
「そうだ。それでいい」
と言った。
今の言葉を上手く理解することは出来なかったけれど、今の言葉には悪意が隠(こも)っていないと自分は感じている。
ハルはいつのまにか、クリフがどのような目的で自分に近づいてきたのかはもはや気にならなくなっていた。多分……心細かったのかもしれない。
気づけばまた、自然と口から言葉が溢れていた。
「クリフさんって、優しいんですね」
「自分のことを優しいと思ったことはない。でも、優しくなりたいとは思っている」

クリフはジャージのファスナーを首まで持ち上げて、襟首が作り出す隙間に少し顔を隠した。
その仕草は、心をさらに解すこととなる。
「少し、一人ごと言っていいか？」
「どうぞ。ぼくも一人ごと、よくしますし」
「私は……」
クリフが次の句を続けるまで、数分ぐらいハルは待っていた。
……外は相変わらず肌寒く、風もここ数日間ずいぶん強めだった。こういう日に外でじっと何かを待つのは、苦ではなかった。むしろ好きなぐらいだ。冷たくなる手のひらや、思ったように動かない指を見る。時が止まっている感覚が、好きなのかもしれない。
「私には、ハルぐらいの息子がいた」
「ぼくぐらいの……ですか」
ハルは手のひらを翻し翻し表裏をみて、厚手のパーカーのポケットに手を突っ込む。
「お前に似てる息子だ」
弟と言われ、少し複雑な気持ちになってしまう。そんなハルの気持ちに、どこか遠くの一点を眺めているクリフは気づかない。
「もう会うことはできないし、そのことは十分承知だが、やっぱり思い出す。あれをしてやれば良かった……こうしなければよかったなんてことを」
「だからぼくを元気づけようとしてくれるんですね」
「嫌だったか？」
ハルは首を横に振った。
「できれば……その息子さんの話を聞かせてください」
「……」
クリフは答える代わりに、ベンチから立ち上がった。そしてハルのほうに振り返る。
「いや、その話をするにはまだ早い。私の心はそれほど丈夫ではないんだ。だから、必要以上にハルに触れてしまった、ということを

納得してくれるだけでいい。納得してくれるか？」
「もちろん」
「ありがとう。……当然、それだけを伝えるために後を付けていた訳じゃない。ハルの願いを叶えてやることが出来るんだ」
その言葉にハルは総毛だったように放心した。
「ぼくの、願いを、叶えてやる、ことが、出来る」
いろいろな思いのせいで頭が真っ白になり、体は強ばる。ハルは一つずつ、たった今聞えて来た言葉の文章をぶつ切りにして単語に分解し、検分する。ハルの心に警戒心が芽生てしまった。
「ふふふ。それ、どういう意味ですか？」
クリフは今一度顎に手をあて、真剣な目付きでハルを凝視した。
その一連の動作は考えあぐねている様子にも見えるし、何かの暗示をかけているようでもあった。
クリフは何も言わず、ただ手のひらをハルの頭の上にかざす。
「何も想像するな。頭を空っぽにしろ」
――そう言ったとして、一度警戒した心はすぐには解きほぐされない。そんな突拍子もないことを言い出した驚きはもちろんあったのだろうが、なによりあれほど悩み続けていた心の傷を土足で踏みにじられた行為は許し難いのではないか。
「何も想像するな。頭を空っぽにしろ」
「ぼくは……」
「何も想像するな。頭を空っぽにしろ！」
クリフの大声でぼうっとしていたハルはうつらうつらしていた目を覚ます。
「クリフさん？」
「そうだ。私だ」
「クリフさんの大声、初めて聞きました」
「そうだ。初めてだした」
「とっても怖かった」
クリフはなにか言おうと思案し、もぐもぐと口を動かした。だが、

それは言葉となって表れないまま、からっ風に消えて流れていった。
　そんなクリフの虚しく溶けていった言葉の代わりに、ハルは、放心したまま、何度となく考えていたことをそっくりそのまま口にした。
「ねぇ、クリフさん」
「なんだ？」
「ぼくだって、願いが叶うなら、叶えてもらいたいです」
「必ず叶える」
「でもそんな簡単じゃないです。何かを叶えるなら相当の代価を払わなければならない。これって自然の摂理でしょう？」
「ああ」
「けれど、ぼくには何も引き渡すものなんて残っちゃいないんです。利用する頭もなければ、利用される価値すらない。どん臭いし、言われたことしかこなせない。周りにとってのぼくは存在しないも同然でした」
「その通りかもしれない」
「おまけに自分を騙さないと人を信じれません」
　次から次へとハルの口から言葉が流れ落ちてしまう。初めて会った人にこんなこと言うべきではないのに、自分の思いを否定しようとはしないクリフの返答に、ハルは苛立ち、言葉が勝手に口からこぼれ落ちてしまうのだ。濁りきってしまった言葉の数々を止めることは、ハルにはどうしても出来なかったはずだ。抗いたい一心でなりふり構わず行動してきたその全てを否定されることは、ハルにとっては耐え切れないことだったのだ。
「……そんなぼくにいっしゅんでも夢を見させるような言葉はあっちゃいけないです。だって、それってとっても残酷だと思いませんか」
「……」
「思いませんか？」
「……ハル、お前の言うことは概ね正しい。けれど、対価を決める

のはハルじゃない。ものの価値は単一ではない」
「なにデタラメを……」
「聞け。……確かにハルは利用する心もなければ利用される価値もないだろう。だがそんな他人に決められた価値は、ハルの価値なんかじゃ決してない」
「ぼくの価値……？」
「ごちゃまぜな考えに浸るな。何が一番大切かだけを考えろ」
ハルには、目の前に立っている大女の言っていることが正しいことなのか判断できなかった「でも」や「そんなこと言ったって」とうわ言を繰り返す。
「私には、いや、私たちにはハルの大切な願いを現実に変える力がある」
クリフはそういうと、ハルに片手を差し出した。
「思いを胸に秘めることは悪いことじゃない。問題は思いが腐ってしまうことに気がつかないことだ」
「……なんだか、食べ物みたい」
ハルは両の手を擦り合わせた。ごしごしと懸命に擦る姿をみて、それでもクリフは手を差し出し続ける。
「いいか、大事なことは算段なしに何かをしようとする気持ちだ。お百度参りするぐらいの気持ちを持っているハルだったらすでに持っているはずだ。次に、誰かに助けを求めることだ。夢を叶える近道は、助言の中にしか存在しない」
「クリフさんは、ぼくの悩みを知っていて、それを解決する術を知っている。なんの価値もないぼくを、クリフさんは必要としている……ということですか？」
「いや、悩みは知らない。だから知りたいんだ。その食べ物に貼られたラベルを私に教えて欲しいんだ。私を少しでも、信用してくれるなら……いや、この際信用しなくてもいい。もし、一人きりでアレコレ抱え込むのに疲れていたのならば、どうかこの手をとって欲しい」

彼女は、決して手を引っ込めようとはしなかった。でも、ハルの手を無理やり引っ張ろうともしなかった。
クリフは、なかなか手をつかもうとしないハルを見て、ため息をついて言った。
「……言いたくはなかったが……ハルは――」
とても言いにくそうに言葉をつむぎだそうとする。
言いにくいに決まっている。……なぜなら、彼女はこの言葉を回避するために、こんなに回りくどいことをしたのだから。直感ではあるけれども。
――そして、ハルのせいで彼女が傷ついてしまう……。
ハルはお互いのために、言葉を引き継ぐことにした。
「――はい。ぼくは死んでいます」
「……知っていたのか？」
「はい。ぼくは浮遊霊ってやつなんですよね？」

4

公園の電燈の光に負けないぐらいの光を纏っている三日月を、ハルはただ見上げる。
ハルは自分が死んでから今までの過ぎ去った時間を懸命に思い返していた。言わなければならないことが沢山あり、それを順序建てて説明しようとはしているのだけど、思ったよりもそれは困難な作業らしく、ハルはため息を一つついた。
そんな苦心しているハルを見て、クリフは出来るだけ優しく声をかけてやる。
「思ったことから話してくれればいい。それで、私は十分に理解出来る」
「そ、そうですか」
「……それに、敬語は好かない。くだけた言葉でいい」
「そ、そんなこと出来るわけない…です」

「ほら」
クリフはハルの頭をなでつける。ハルは体が火照るのを感じたのか、頭を俯かせる。
――こうまで優しくされては、彼女に従うしかあるまい。
「……知りませんよ？」
「ほら、ほら」
クリフの顔を見ると、若干楽しんでいるような様子だったので、ハルは両肩をすくませる。
「いじわる」
笑いをこらえきれなくなったのか、クリフはとうとう吹き出した。
「わ、笑うことないじゃんかー！！」
「ぷっ……」
吹き出したクリフをみて、ハルは何かから吹っ切れたのか、思ったことを片っ端から言ってみようと考えた。そう、出来れば彼女を困らせるようなモノであればあるほどいいだろうか。なんて、ハルはニヤニヤと笑う。
そんな謀略をハルが立てていることをクリフは露ほども知らず、おお笑している。
「クリフさ……いや、クリフ！」
「はい、なんでしょう」
いかついガタイの大女がいきなり敬語を使い始めたので、ハルは少し面食らった。けれど負けじと応戦に努める。
「あのね、ぼくのこと息子に似てるって言ったでしょ？」
「ああ。言ったな」
「あれ、イクない」
「ん？　何が？」
「わたし、女の子で、ございますことよ」
ハルは立ち上がってくるりと一回転。クリフは目をぱちくりしている。
スカートを履いているわけではないのできらびやかに翻るものが

あるわけもなく、パーカーのフードと首元の紐が宙に浮くだけの光景は、ただひたすらに滑稽だったが、ハルはそんなことお構いなしに得意げに鼻から息を漏らす。どう？　女の子っぽいでしょう？と言わんばかりに。
「……それは本当か？」
目をしばたたかせるクリフを見て、ハルは懸命に抗議する。「レディになにいってんだー」とか、そういった類の戯言だ。それでもポカンと口を開けているクリフを見て、業を煮やしたのか、ハルはとうとう、
「んじゃぁ、触ってみる？」といった。
そういってパーカーの中をちらりと胸を見せようとする。だが、凹凸のない白地のUネックのTシャツが覗くだけだ。クリフはまるで何を見せたいのか理解できないふうにぼんやりとその仕草を眺めるだけだった。
「……おっぱい」
「あっ……ああ。そうだな。とびっきりの女だ。女に違いない。はは」
「ごめんなさいは？」
「悪かった。よく見たらそう見えないこともないこともなくないな」
「……どっち？」
「悪かったよ」
それでよし、と人差し指を立て、ハルは含み笑いを漏らす。なんだか胸が軽くなったみたいだと感じているのだろう。そのおかげで、胸につっかえていた言葉がすらすらと口から流れ出す。
「どうしてぼくのこと見えるの？　クリフってなにもの？」
「何者に見える？」
「質問を質問でかえさないでちょうだいよ」
クリフはおてあげといった調子で両肩をすくめてみせ、質問に答えた。
「私は確かに人とは違う。よってハルの姿がばっちし目に映ってい

る」
「……といいますと？」
「謎は多いほうがいいだろう？」
「それ、卑怯じゃんか。せっかくぼくが死んでからのことを徒然と語っていくつもりだったのに」
「追い追い分かる。私が今この場で実は霊能力者なんだと言っても、信じれないだろう？」
「信じるよ。もう、ほんっとーに一から十まで信じるってば。だいたい、そんなこといったらぼくはフユウレイですよーってことだって、信じれないはずじゃん」
クリフはぽりぽりと頭を掻き、
「ようく見てろ」
と言った。
クリフは立ち上がると、目を瞑り、何事かを念じ唱える。
残念ながらそれは何語なのか見当もつかなかった。
クリフは三日月を見上げ、右手を上げる。指は、銀貨の一枚でも掴み取るような手つきで窄み、ハルの頭上を掠め取るように艶かしく動く。とたん、クリフの頭から、真っ白なものが垂直に伸び上がり、ちゅうとで後方に向かい捻じ曲がる、角と呼ぶべきものが生え始めた。それを合図に、ジャージの背中部分が盛り上がり、何かが突き破り始める。その何かは、黒々とした羽であった。おもう存分に生えきった羽はいっかいばさりと呼吸をするように動く。
ハルは、その角と羽をみて、驚き声を上げる。
「ひょえ……」
と口からかってに感嘆の声が飛び出してしまうほどに驚いた様子だった。
ただの角と羽が生えてきただけなのだけど、その漫画に登場するキャラクターの容姿は、威圧的で、どこかしら悲壮感を帯びていた。それ以上に衝撃的だったのは、クリフの黒目を切り込むようにして横に細く伸びた瞳孔であった。明らかに人の目ではない。

それはまさしく悪魔だ。山羊の角と瞳を持ち、コウモリの翼を生やすバフォメット、もしくはサタナキア。堕天使ルシファーに仕える悪魔そのものである。
「どこか、悲しそう」
それを聞いて、クリフは目を真ん丸にする。
「怖くないのか？」
ハルは首を横にふる。
「もし、この姿のまま、クリフが登場したならぼくは怖がっていたと思う」
「……」
「けど、ぼくにハイリョして隠してたんでしょ？」
「いや、」
「違うの？」
「それもあるが……私はこの姿が大嫌いなんだ」
「ふうん」
なるほど、と頷いて、ハルはクリフに顔を向けた。
「ぼくはカッコイイと思うけどな」
「あ、ありがとう」
「それで、ぼくを地獄まで連れていくためにきたの？」
クリフは答えない。
「だって、ぼくまだ天使に会ってないよ？」

5

ハルは、ずっと一人ぼっちでこの世をさ迷い続けていた。ハルが死んだ翌日、自分の身に起きた事態を理解してから、あらかたのことを試した。この姿で出来ることと、出来ないことをだ。けれどそれも三日で終わった。それは驚くほど簡単な分別行為だったからだ。
ひとつ、物を掴むことが出来る。けれど、食べることや飲むことは出来ない。

ふたつ、痛みなどの五感はある。けれど、空を飛んだり、壁をすり抜けたり出来ない。
みっつ、テレビを見ることが出来る。ゲームももちろんだ。本を読んで調べものだって出来る。
……けれど、人と接触することはできない。
いや、人にこっちから触れることは出来る。けれど、人から触れられたり、会話することが出来ない。
すべて霊からの一方通行の行為であった。
一度、接触しようとして人のパソコンを弄ったり、校庭に転がっているボールを蹴ってみたり、ブランコを漕いてみたり、禿げたおじさんの頭をペシペシ叩いたりした。けれど、それを見た人やされた人の反応は、どれも無かった。
皆一様に無反応。最初のうちは気を紛らわせて悪戯してみたけれど、一方通行の行為ほど虚しいものは無いと感じてからは、人と関わることを止めた。
……まるで何処にも繋がっていないパソコンみたいだ。あるいは、自己満足で送信する片道メールみたいな。
「……どうしてすぐに声をかけてくれなかったのかなぁ」
「……」
「そうすれば、こんなに悩むことなんてなかったのに」
「悪かった」
真っ白な角と黒い羽を生やした姿でお辞儀して謝るクリフの姿は、ハルにとってとても愉快なものだっただろう。自分が悪魔を謝らせているのだ。今まで娯楽がなかった分、今ぐらいは存分に楽しませてほしいと、ハルは思っていたに違いない。
「その角、なんの角なの？」
「……山羊だ。もともと山羊というのは黒ミサで生贄によく捧げられてな、生殖力の強い山羊は環境を破壊……」
「お手紙、食べれる？」
「……なんかハル、私のイメージとは違うぞ」

「そのくろい羽は？」
「これはコウモリの翼だ。コウモリは、鳥類の広大な繁栄範囲のスキマ埋めるようにして、繁殖していった鳥でな、それが人々の心のスキマを……」
「超音波びびびって出せるの？」
「……むぅ」
「ふふ。それで、その悪魔さんはぼくのことどのぐらい知っているの？」
「……ハルの置かれている立場なら」
「そりゃね。だってユーレイだもの。何かに後悔してるからこんな状態になってるんでしょ？」
「そうだ。けど、残念ながら、ハルが何に後悔して浮遊霊になったのかは、分からない」
「あれ？　そうなの？」
「神通力があるわけじゃない。ただ、この姿になることと、ハルみたいな反転世界に属してる人間を見て、触れることが出来るだけだ」
「ハンテンセカイ？」
「……私は説明がヘタでな。もっと説明が上手い奴がいる。ハルをそいつのところに連れていくために、こうして接触したんだ」
「なんかイヤだな」
「なぜ？」
「だって口が達者なんでしょ？　いやだよ。そんなやつ」
「……私もそうだ。けれど、助けるためには奴の力が必要なんだ」
「じゃあそいつのところに行く代わりに何か一つ面白いことしてよ」
「……悪魔殺しだな。……頼むから私の言うことを聞いてくれ」
「えー。じゃあそれ以外だったらいいよ。なにかある？」
「ハルの口から話を聞きたい」
「ぼくが父さんを殺したこと？」
それを聞いて、クリフはぽかんとした、馬鹿みたいな表情を浮かべた。

「そ、そそ、そうなのか……。まさか、ハルがそんなことをなあ……」
やけに挙動不審になっている様子を見て、ハルも鳩が豆鉄砲くらったように体を固める。
「……え？　知らなかったの？　悪魔なんでしょ？」
「ほ、本当にさっき言ったことしか出来ないんだ。う、うう嘘じゃない」
「じゃぁ、何しに現れたの？」
ハルは首を傾げた。
――たしかに、ぜんぜん悪魔っぽくないぞこいつは。
クリフはあわてて咳払いし、弁解し始める。
「いいか、浮遊霊っていうのは針が振り切れた人間がなるものだ。本当はそんな非常識な存在が居てはならないんだ」
「やっぱりクリフはぼくを連れていくために現れたの？」
「そうだ。私はお前の存在を消すために現れた」
「じゃぁぼくは地獄に行くんだ。悪魔のお出迎えーって。ちょっとは想像してたけど」
「悪魔も天使も関係ない。……さっきお前が天使なんか見てはいないと言っていたが、そもそも天使なんか存在しない。善の存在なんか、人の心の中にしか存在しちゃいないんだ。私は、その人の良心に沿った姿になることができる。そして、その姿で霊の執着を解消して安心させる。それが仕事だ」
そういって、クリフは黒い翼をばさばさとはためかせた。
「……良心？」
「人が自分の生涯を罰するに最も相応しい存在……人によっては、天使に見えるし、悪魔に見える。たいていは、この世のものではない神聖な容姿に見えることが多いな。ごく少数だが、違うものを見たりする人もいる。私のことをブタのぶーちゃんと呼んだ霊もいた」
「ぷっ……あはははは、なにそれ」
――腹を抱えて笑ってしまう。この軍人のような目見形の大女が、

ブタって、そんなのない。その人はブタに何をしでかしたのだろうか。もしかしたら、ブタを崇拝していた宗教に入信している教徒なのかもしれない。それを想像すると、わらけてしょうがない。
ハルがけらけら大笑いしていると、クリフは珍妙な面持ちで、
「……実のところ、お前の目に私の姿がどう映っているか、私は知らない」
といった。
「え？　だ、だって山羊の角と、こ……コウモリの翼が……って」
「悪魔といったら山羊の頭とコウモリの翼。そう思って答えただけだ」
「変身するような呪文とか、素振りとか見せたじゃんか」
「あれはただのフリだ。急に見えたら驚くだろうし、安っぽく見えるから、しただけのことだ。本当はなろうとすれば、一瞬でなれる」
「それじゃぁ……」
「ふぅ。だから私は嫌いなんだ。この姿になるのが」
ハルは笑いを止め、クリフの出で立ちをもう一度ゆっくりと見直した。
――それはどこからどう見たって、悪魔以外のなにものでもない。けれど、霊によっては天使に見えるときもある。黄色い輪っかをつけて、鳩の羽を背中から生やす。そして、そのことを本人は知らない。その状況を想像してみた。
――ある人は喜ぶだろう。救いを差し伸べてくれる天使が現れたのならば。けれど、ほとんどの人はそのような天使は見えないのではないか。だいたい考えてみれば、天使が見えるような人は浮遊霊何かにならないのではないか。
――悪魔に見える人ならごまんといそうだ。例えば、お金をだまし取ってしまった人とか、友人を裏切ってしまった人。そして、人を傷つけ殺してしまった人。どれもこの世界に溢れている。その後悔している霊たちには、クリフが恐るべき悪魔に見える。クリフはそれに気づかない。クリフを見て、罵り攻撃してくる人もいただろ

う。あるいは、叫び声をあげて逃げ走る人だっていたかもしれない。逆に土下座して謝り続ける人だって。

――それはとてつもなく可哀想な光景だ。

「フビンだね」

「やめてくれ、少し悲しい」

「話は分かったよ。けど、執着を解消するのに、その人を知らなきゃダメなんじゃないの？」

まさにいいことといった！　といいたそうな晴れやかな表情で、クリフは頷く。

「そうだ。そのとおりだ。本当ならそれ専門のヤツがいるんだ」

「あー連れていこうとしたその人のこと？」

「そうだ。変わり者の小説家でな、すごく忙しい。だから連れていくしかないんだ」

――やっとこさ話がつながった。目の前の悪魔は浮遊霊であるハルを消すことが仕事。仕事をこなすためには、霊のことを知らなければならない。けれど、そんな能力はこの悪魔にはない。だから、霊の話を聞かなきゃいけない。もしくは人の過去や悩みを知ることのできる能力を持っている人のところに連れていく。

全てまとめ終わってから、また数分の沈黙が流れた。

今まで頭を垂れていハルは、ぴょんと頭を上げ、隣に座っているクリフを見上げた。パーカーフードが楽しそうに揺れる。

「ほっんとクリフって」

「なんだ？」

「説明へたっぴだね」

「……」

項垂れて落ち込むクリフをみて、気にしていたのかな、とハルは思ったらしく、「いや」「その」と弁明に必死になる。

本当はもっと言いたいことがあったのだろうけど、その言葉たちは胸にしまい、代わりに何か慰めの一つでもいってあげようと声を掛ける。

「説明はへたっぴだけど、」
「もう、よしてくれ。分かってはいたんだ。この仕事にむいてないんじゃないかってな」
「ちょ、ちょっと話とちゅう！　いいヤツだって言いたかったんだよ」
　落ち込んだクリフの肩がぴくっと上下する。
「コーヒーだって、ぼくが飲めやしないのわかってて、それでも持って来てくれたんでしょう？　ねぎらいの気持ちってコーヒーって相場が決まってるしね！」
「あれは実は自分の……」
「小石だって、気を利かせて上に戻してくれた。ここにくる人なんてほとんどいないけど、ジョギングしてるじーさんが、下に積まれている石の数を数えてたらびっくりしちゃうもんね！」
「いや、それは……その……」
　聞こえないふりして両手で両耳をぺたんと折り、次句を言い放つ。
「もっともーっというと、転びそうになったぼくを助けてくれたじゃんか」
「……よせよ。照れる」
　ハルはガッツポーズする。クリフは頭を下げているので、それに気づかない。どうやら悪魔のガラスのハートを守りきったみたいだ。
「ふぅ……ぼくも面倒な人間だけど、クリフも大概だよ」
「そ、そうか」
「褒めてないってば。顔を赤らめないでよ。……だいたい、クリフの望みがぼくを消すことで、そのためにある人物のところに連れていくのが近道なら、さっと姿を表して、手紙でもなんでも置いとけばいーんだよ。『ここにお前の望むものがある。住所は～』ってさ。そんならどんな浮遊霊だって一目散だよ。いや、笑い事じゃなくね。めちゃくちゃ暇なんだよ？　浮遊霊ってさ。んで、時間があるから変なことばっか考えちゃう。……話逸れちゃったけど、やっぱどこをどー理屈つけたって、ぜんぜんぼくと話する意味ないじゃん」

「……だが、そうとも限らなかったぞ。悪魔を見れば、ほとんどの霊がぺらぺら過去を語りだす。だいたい恨みつらみがあるヤツが死んだ後、霊になるんだしな」
ハルはため息を大きくついて、肩を落とした。
「はぁ……。だーかーらー。そうじゃない霊だっているじゃん」
クリフはぽかんと口を開けて馬鹿みたいな表情をしている。
「ぼくは絶対話さないし、その人のところなんて行きやしないよ！」
クリフはその言葉を受けてさらに驚いた様子だった。
「なぜ？　どうしてだ？　その気になったら私がハルの望みを……」
「それじゃあ意味がないんだってば」
「後悔を解消してやるのにか？」
「解消してやるなんて思っている人に解消して欲しくなんかないに決まってるじゃんか！！」
「……しんじられない」
「ぼくだって信じられないよ。クリフが今まで霊を消してきたことが」
「そ、そうか？」
「褒めてないってば」
「……よく、木偶の坊だとか、役たたずとか言われるのだが、やっぱりそうなのか？」
「疑問形で聞かないでちょーだいよ……。とっても答えづらいから」
「それってどういう意味だ？」
不思議そうに自分を見つめるクリフを見て、ハルは頭を掻く。
「あー！　もう！！　この悪魔どうにかしてよぅ……」
「どうにかって言われてもな……。取り敢えず、お茶でもどうだ？　それでゆっくり話を……」
「お茶！　飲めないの！　ぼくは！　……もしやコーヒー飲めると思って持ってきたの！？」
「……ふふ」
「笑ってごまかすなっつーの！！」

クリフはそれを聞いて、泣きそうな表情に様変わりする。そこで、ハルは口元に手をあてた。悪魔の心はガラスハートだったということを思い出したのだろう。
「あっ……ごめんごめん。ごめんね？　そこまで言うつもりじゃなかったんだけど……」
「ぐすっ」
「めっ……めんどくさっ」
ハルはため息をつく。
「あーもー分かったよ。その人のところに連れてって」
「ほ、ほんとか！？」
「……きっとその人、上司か何かでしょ？　なんだか無性に会って話たくなってきた。きっと心が通じ合うと思うしさ」
「ハルならそう言ってくれると信じてた」
泣き顔から、一気にきりっとした表情に早変わり。ハルはその様子を細目でみていると、思いついたように言う。
「おもしろ百面相！！」
クリフにぴったりのいいあだ名を思いついたらしい。
「何なんだそれは」
ハルは、パーカーフードを深くかぶり直し、頭を振る。きっと、自分のネーミングセンスを疑ったのだろう。
「……じゃぁその人のところに行くよ、クー」
「クー？」
「あだな。クリフっていうより可愛いでしょ？　それともブーちゃんのほうが良かった？」
「……クーか。わ、悪くないな。そしたら私は……ふふ」
「何考えてんのか分かんないけど、ハルでいいよハルで。っていうか、どう考えたって、クリフにあだ名のセンスがあるとは思えない」
「ふ、ふふ。そうか？」
「……」
――やれやれ。

……私はハルの代わりに深くため息をついた。
――本当に、しっかりハルちゃんを消すことができるのだろうか。

6

軍人のような容姿をした悪魔は、鳥居の傍までいきハルになにやら告げると、また公園に戻ってきた。もちろん私と話すためだ。
もともと、クリフという偽名を使用している悪魔は、私を消すためにやってきた。私はもちろん霊である。浮遊霊ではなくて、地縛霊だけど。
地縛霊と言えば、その土地に佇み続けるのが有名だろう。例えば、人が良く死ぬ高速道路とか、人が良く死ぬ峠道とか……思いつくものはたくさんある。
私の場合は神社だった。前例とちょっと違うところは「人がよく死ぬ」ではなく「人が良く死んだ」神社であるという点。前者は現在進行形だが、後者は過去形。そのため、今はどうといったことは無い神社であるはずなんだけど……都市伝説って怖い。
この「首なし神社」は、本来は「公家なし神社」という愛称が訛ったものであり、首なしなぞ全然関係はない。そりゃぁ一体二体はそういう死体があったかもしれないけど……少なくとも現代の時代で、そういった事件が頻繁に起こったわけでもない。そもそも首の無い死体なんていうサスペンスめいた死体はそうそうない。
そんな怖いどろこか逆に高貴な響きに聞こえてきさえする「公家なし神社」は、いつの頃からか「首なし神社」として巷で有名になり、あられもない噂が四方八方に飛び交っていく。その事例は……お察しの通りだ。
余談だけど、この神社が「公家なし神社」と呼ばれている所以というのは、この北海の地にゆかりがある。もともと熊を崇拝していた土着民が、南から進行し支配しようとする幕府の人間と喧嘩をしていたという歴史背景が関係してくる。

幕府の藩士はどうしてもこの土着民を和人にし、支配したかった。なぜなら、体だけは頑丈で何よりも純朴な気質である土着民の仕事ぶりが、土地を開拓するという単純作業にぴったりだったからだ。だからこそ、民族を統一し、領土を広げようと自国の神を信仰させるために、適当な場所を選んで、神社をむりやり建立した。対する土着民は、自ら信仰する神（熊だけどね）を否定され怒り心頭阿鼻叫喚。なぜならその場所は土着民にとってなによりも神聖な場所であったのだ。

あわてふためいた藩士たちは、これも何かの好機だろうと、あの手この手を使って土着民を言いくるめようとする。何をいったかしれないけれど、決して謝りはしなかったのは確かだ。その不義な姿を見てとうとう怒りが爆発し、土着民は決起した。

幾度となく殺し合いをし、大変な争いが始まってしまった。……けれど、始まった諍い事というのは例に漏れず蝋燭の明かりのように、いつしか鎮静するものである。

その当時、もっと別の遠い場所で激しい戦いが本州との間で繰り広げられていて、そっちの戦いに多く戦力を裂いていた幕府は、結局土着民のこだわる神社を放置した。

そうして出来上がったのがこの「公家なし神社」……お上の目が行き届かない神社の意味でそう呼ばれていた、といういきさつ。すごくどうでもいいかもしれないけれど、念のため。

もちろん私だって、あの時まではどうでもいいと思っていた。けれど、そんな私が土着民の天罰をうけ、首なし死体になるなんてさ。私は吐けもしないため息を吐く。

……ある事情で大事な子供を殺してしまった私は、失意のうちに自殺することを決意した。

出来るだけひと目につかない場所を探し、見つけた死ぬにはうってつけの神社で太縄をカエデの木にくくりつけ、首を吊った。とっても痛かったけれど、しだいに頭がぼーっとしてきて気がついたら、こめかみに鈍い感覚。何かが私の頭をカジカジ噛んでいた。

……もうわかるとは思うが、それは野生の熊だった。
私は、薄れゆく意識のなかで、首がもげてしまうのを想像した。そして、現在進行形で霊となった私は、首のない死体が木からぶらさがっているのを発見する。
そうして首のないまま霊となってしまった私は、何故か神社と公園の間しか動けないことを知る。きっと熊に頭を食われなければ、地縛霊ではなく浮遊霊になれたのだろう。それに……ハルちゃんとお話出来ただろう。話すつもりは毛頭ないけど。
そうして、かなり長いあいだ神社と公園の間をうろついていた。そこで姿を見せたのは、頼りない悪魔さんだった。
その悪魔は、キリンの滑り台に身を潜めて様子を伺っていた私の目の前に着くと、こういった。
「話の途中ですいません。お待たせしました」
――いいえ。
声が出ないことに気がついて、私は彼女の大きな肩に手をかける。彼女は気づいて、私の置いた手を握った。
――ずうっと見てたのよ？　ほんとにハルちゃんを助けてくれるのかって。
私はそういうと、鳥居の裾でつまんなそうにポケットをまさぐっている少年のほうをちらと見た。
クリフは申し訳なさそうに苦笑いを浮かべる。
「私は口下手で……そのせいで思ったほど時間がかかってしまいました」
――もう、しっかりしなさいな。あなた、格好いい大人になりたいんでしょう？
私は大げさにため息をつく。いや、実際にはついているわけじゃない。つくほど、この少女みたいな悪魔にあきれているのだ。
――あれじゃあ、全然格好よくないじゃない。ハルちゃんがリードしちゃっているでしょうに。
「……はは」

面目ないと、情けない表情を浮かべるクリフを見て、私は安心した。だって、彼女なら……この悪魔なら、私が子供に出来なかったこと全て、してあげられる気がするんだもの。

自分で自分に言い訳して、背伸びしてクリフの頭を撫でてやる。私だって、撫でる腕はきちんと持っているのだ。

――無理するんじゃないの。大丈夫。あなたならきっと、誰よりもあの子を見てあげれるから。

「……」

――……。

神妙な面持ちなクリフを見て、この悪魔のいわんとしていることを悟る。

――会いたくないって本当よ。だって私には会う資格なんてないもの。そうでしょう？　子供を殺して自分も死んだ大馬鹿な人間が、人様の前に姿を表せれるわけないじゃない。

「どうして……どうしても自分の子供を殺さなければいけなかったんですか？」

――どうしてもに決まってるじゃないの。あきれた。

だって、毎夜酒を飲み、男たちを癒す仕事をしている自分には産むだけの生活力なんかなかったのだから。学校も小学校しかでておらず、暴力をふるう親たちに耐え、雇ってくれる場所なぞ男の相手をする仕事しかなかった。本当は子供が大好きで、保育士を目指していた時期もあったが、資格を手に入れるだけのお金は全て、病院で寝たきりの両親の手術費に消えた。

……どれだけ憎くても、自分をこの世に生んでくれた親だもの。そりゃぁ……ね。

だから子供をおろした。この世界には食い扶持というセーフゾーンがたしかに存在するのだ。そして、その食い扶持を確保したうえで、計画的に子供を産み、大学まで面倒を見てあげなければいけない。それが出来ない人間は、親になることすら許されない。そう、自分を重ねみて、私は思った。そうしないと、私みたいな人生を送

ることになる。だから負の連鎖を断ち切った。断ち切らねばならなかったのだ。
出会った相手も馬鹿な男だった。くたびれた飲み屋で出会ってしまい医者という真っ黒（服装的には真っ白だけど、この場合は悪徳といった意味で真っ黒ね）な立場をちらつかせ、それを信じて一夜を共にし、子宝を授かった。そんな三文芝居によくある筋書きだけど、私にとっては人生を変えるチャンスのように感じられた。
そのあとは、いいように言いくるめられ、札束を握らされ、その男の手で堕胎手術を受けて……という話。子供の墓を立てるとあっという間に札束はかすみのごとく消えてゆき、気づけばなんにも残っちゃいなかった。そんな人生に価値なんてあったのかしら。
いつも思うのは生まれるはずだった子供のこと。男の子か、女の子か、名前は何にしようかと叶うはずのない夢を膨らませる毎日。
――ねえ、私の子供ってきっと生まれていたら、いまごろハルちゃんぐらいの年だったと思うの。
「……」
――そう思うたびに、ごめんなさいね、許してちょうだいって気持ちになるの。ねぇ、もし私がハルちゃんの前に姿を表したら、どうなっていたと思う？
「……わかりません」
クリフは頭を振った。
――そう、それでいいのよ。だって、あなたは人を救うんだもの。そんな悪い女のいやしい気持ちなんて分からなくていいの。ただあなたは、真っ直ぐに、前を見て頑張っていくのよ。
私は無い目を閉じる。すごく不思議な言い方だが、五感がこの体にはちゃんと備わっているのだ。そして、この反転世界の姿は、死んだ時……いや、死体と同じ姿になる。私には首がなく、こうして悪魔に触れないと話すことが出来ないのもそのためだった。
――ハルちゃんはとってもつらい人生を歩んだ子よ？　私の望み通り、ちゃんと消してあげることが出来るかしら。

「……大丈夫だと思います。多少くじけるかもしれないけど……それでも私は消さなければなりません。……それが私の仕事だから」
そう、と私は心の中で言うと、ハルが三日月を見上げていたちょっとの隙に掠め取っていたものをクリームカラー色したロングコートのポケットから取り出し、彼女に手渡す。
それは、ただの平たい小石だった。
――この小石、私が見つけたのよ、いいでしょう。
「ええ。とっても。これ、なんですか？」
――ハルちゃんのお気に入りの石よ。お百度参りの回数を数える度に、私が何度も石を戻してあげていたけど、これがその石の山の一番上に必ずあったの。必ず決まって百個目にこの石を選んでいた。不思議でしょう？
「それ、本当ですか？」
――もちろん。伊達に……いや、言うべきじゃないわね。忘れて。だから、これをあなたに渡すわ。もっててちょうだい。これで私は安心して消えることが出来るから。
クリフは何も言わずそれをつかんで、ジャージのポケットに滑り込ませた。
――ふふ、私、最後はこの石を絶対選ぶと思ってたの。けど、違ったのね。少し残念。
「……これで望みは叶いましたね」
私は、下ろしているほうの手をきつく握った。もう十分。もう十分だ、と自分に言い聞かせる。
――……消えたら、どうなってしまうの？
「消えたら……ですか」
そう、私はある程度の説明をこの悪魔に聞いていた。もちろん、これからハルが向かうであろう人にも会って詳しい説明は受けている。その人の話では、こんな世界に私たちは住んでるみたい。
普通の人々は、神の怒りを受け、地上に堕とされた（なんか神さまって人間ぽいのね）天上に棲む人たちの願いを宿して生まれてく

る。その天使たちのせいで、悩んだり悔やんだり……人を殺したりする。そんな感情的に物事を考えてしまう子供っぽい神は、天使に試練を与える。天上に棲むお前がどうして、何をして堕とされたのか、それを考えて見つけ出し、解消できる人間に願いを託してこい、なんて。

つまり、現実世界は天使たちを助けるための世界ってやつらしい。

だけど、秩序ある世界からはみ出してしまった霊たちは、悪魔に消されるまでこの死ぬことのない世界で『天使たちの願い』を完遂することが出来る。そんな知らぬ罪を贖ってしまえば、すなわち生を完成させることが出来る。

……ほんとうにこんな話を聞かされた。そりゃもう私だってびっくり。こんな首なし地縛霊じゃなきゃ信じなかったと思う。

ま、言い回しはむつかしいけど、要は人間は生まれながらにして天使が隠してしまったパズルのピースを見つける宿命みたいなものがあって、その欠けたピースを探し、埋めるために人生を生き続けるってわけ。もし、その人生のゴール地点手前で力尽きてしまえば、もう一度トライ。生まれ変わってハイスタート。それが普通の人なんだけど、私たちは勝手が違う。力尽きることなく、欠けたピースをずっと探し続けることができるのだ。そうしないと消えることができないから。

霊は欠けたピースを見つけ、この生ぬるくてぐずぐずした世界からやっと去ることができる。そうして、生を完結した私たちは、何も残らず消えてゆく。

私はその話を聞いたとき、不公平じゃない！？　と思った。そんな話ってない。覚えている悪いことなら、ごめんなさいできるけど、身に覚えのない、しかも見たこともない天使の犯した過ちを謝るのってなんか納得いかないじゃない。

……でも、悪くないと思った。だって誰かのために頑張ることができるのだ。そう、ハルちゃんのように。

こほん。どうやら話が逸れてしまったみたい。

ここで私が聞いているのは、その後だ。生を完遂したら、私という存在はどうなってしまうのか、それが知りたかったのだ。
「そうですね、消えたら……望みを託した天使たちに会って話をすることができる、と……その話は聞いたでしょう？」
――ふふ。そうね、安心したわ。
「すいません。では……」
そういって、悪魔は私の肩に置いてあった手をぎゅっと強く握り、何処からか取り出した大きな鎌を振り上げ、私の脳天（といっても頭なんてないのだけれど。ふふ）目掛けて振り下ろした。あっという間のことだったから、大鎌で体が切り裂かれたことに気づくまで少し時間がかかってしまった。
体を二つに引き裂かれながら、私は意識がぼんやりしていくのを感じた。薄れゆく意識のなかで、地縛霊になってから見てきたことを思い出す。その思い出は、ハルばっかりだった。
一人言をよくいうハル。
寂しそうに公園のベンチでうずくまるハル。
――絶対ハルちゃんなら大丈夫。けいちゃんを助けることができるはずだから。
きっと、熊に頭を持っていかれなかったなら、話すことだって出来たでしょうに。
私は、鳥居に立つハルの姿を目に焼き付けた。ハルはしゃがんで、寒そうに震えていた。
それが私という存在の最後だった。
……
……
クリフは消えてゆく霊を見送って、握った石をじぃっと見つめる。
石は平たくて、ハルにとって特別でありそうな特徴はなかった。何が決めてでこの石を選んでいたのかクリフには少しもわからなかった。

キリンの滑り台にぼうっと立っていたクリフは、鳥居のほうを向く。そこにはハルはいなかった。
「おーそーいー。寒いんだから早くいこうよ」
どうやらハルは、滑り台でぐずぐずしているクリフに業を煮やし、近寄ってきたみたいだった。
「ああ、すまん」
ハルはそれでも、納得のいかないように腕を振り回して抗議する。そのうちに、クリフの見ていた石に気づいたのか、素っ頓狂な声をあげた。
「そ、それ、どうしたの？」
「ん？」
「その石、どこで拾ったの？」
クリフは口をもごもごと動かす。どう言おうか考えてなかったせいで、少し間が空いてしまう。
「……これは、賽銭箱の近くに落ちてた石だ。これだけ遠くに飛ばされていてな。それがどうかしたか？」
ハルは、疑いの目でクリフを見つめる。
「ふーん」
「なんだ？」
「嘘つき」
「え？」
「……それ、ちゃんと賽銭箱の傍にあったはずだよ？」
クリフの体が一瞬固まる。
「え……そ、うなのか」
それを聞いたハルは頷く。けれど、目は疑いの眼差しのままだ。
「そうそう。今日はぼく、その石をちゃんと賽銭箱の傍にわかるように置いておいたんだ。だって、その石は特別なんだもん」
「……というと？」
「あのね、ぼくがこの神社に来て始めての日の話だけど……その小石が少し動いたの」

「そんなこと、あるはずない」
「そう思うよね。ぼくもそう思った。もともとその小石は、本殿から離れた木の下に落ちてたものなんだ」
「へえ」
「その小石のね、動いた音が聞えたから、誰か人間が蹴飛ばしたのかと思ったの。もしかしたら、ぼくと同じ霊なのかもっって嬉しくなったりもしたんだけど、その小石が動いただけで、いくら話しかけても反応はなかった」
「ハルの勘違いだったんじゃないのか？」
「ぼくもそう思った。だから、その石まで近寄って触ってみた。……す、る、と？」
ゴクっとクリフは喉を鳴らす。
ハルは気を良くしたのか、口をすぼませて微かな音量でいった。
「温かかったの。小石が」
「んな……馬鹿な……」
「そうそう。ありえないよね。ふふ。けど、本当に温かかったんだよ。と、いうことはどういうことだと思う？」
クリフは、さっきまでハルと話ていた時のことを思い出し、どうリアクションすべきか考えた。こんなときはそう、目をパチクリさせればいい。
「……どういうことなんだ？」
「ほんっとクーは馬鹿だなぁ。ぼくみたいな霊が握ってたか、それとも人がいたかに決まってんじゃん。……もしくは、あ、く、まがいたか」
「私がその石を握ってたと？」
「当然……といいたいところなんだけど、クーの様子を見て、やっぱり違うなって思った」
クリフは、頭の中でハルの気持ちを推理してみる。
ハルは、温もりの残っていた石を特別扱いしていた。そしていつもお百度参りの数かぞえに使っていた。

けれど最終日はその石を選ばなかった。
「……さっぱりわからない」
小首をかしげてしまう。
「クー、何がわからないの？」
そう言われて、クリフはハルに疑問をぶつけることにした。
「ハルがこの石を特別に扱っている理由はわかった。お百度参りの初日に突然動き出し、さらには温もりさえ残っていた小石だったから、でいいな？」
「うん。そんで、その特別な石をお百度参りの数かぞえの最後に使ってたんだよ」
「それは……なんでだ？」
「もちろん、もうぼくはここには居ませんよって合図に決まってるじゃん」
「……は？」
「いい？　ぼくだってずーっとこの神社にいたわけじゃない。日中は山を降りて、ふらふら移動してた。通ってた学校とかに様子見に出かけたりとか、デパートにウィンドーショッピングしたりとか……もちろん誰も声をかけちゃくれないし、ぼくからだって何もコンタクトをとろうとはしない。そんな、一人ぼっちの世界。寂しさのあまり泣きそう……そんで、ふいに霊か、霊のようなものが現れたような気がしてごらん？　絶対お話したくなっちゃうでしょ？」
「そう、だな」
「だから、この小石が目印になるようにしたの。お百度参りが終わったよ。だから神社にはもう居ないよっていう合図。今日は閉店しましたよってね」
「なるほど」
「……もしかしたらだけど、この石が自ら動いた可能性も考えついた。そう考えると小石が特別なものに見えてきて、何度も持って歩こうと思っちゃった。けど、やっぱり石は石だもんね」
確かに、そう思っても仕方がないかもしれない。霊のほとんどは、

自分が何故霊になってしまったのか分からず、自分で自己分析をするしか方法がないからだ。
……だから、地縛霊だった彼女のように奴の出鱈目にまんまと騙されてしまう。
「じゃぁ、最終日、なぜその石を最後の石に選ばなかったんだ？」
「もちろん選ぼうとはしたさ。けど、止めた。クーが現れる直前まで、霊だって確信してたから。だから、この小石は賽銭箱に置いておくことにしたんだ。ほら、これ」
といって、ハルはポケットから角張った小石を取り出した。
「それは？」
「お百度参りしたよーっていう証みたいなもんだよ。ぼく決めてたんだ。最後の石は持っていこーって」
「その小石はお百度参り最後の小石か」
「うん」
「……なぜ霊と確信したんだ？」
「んーなんとなく、かな。ずっと誰かが神社の中に居るってことだけは分かってたんだ。雰囲気ってやつ？　落ち葉がパキって音を鳴らすし、階段の横に生えてる木の近くで石が動くし。そんで、初日からずーっと声をかけ続けたりしたんだけど、なんにも返事がないから諦めちゃった。でも、絶対いたと思うんだよね。クーはその人と話をしたんでしょ？」
「……いや」
「ほんとーかな？　知ってるんだぞーほらほら、話してみぃ」
「……ハルの望みを話してくれたら、全部話す」
「くそー卑怯だぞ！！　鬼！！　悪魔！！」
「……だから悪魔なんだって」
そうして変わり者の二人は落ち葉を踏みながら公園を抜けた。
二人の頭上を覆う夜の空から、ぽつり、ぽつりと白い粉のようなものが降り落ちる。
白い粉は二人に触れたとたん雪に変わり、二人に冷たさを感じさ

せた。
溶けて熱を奪っていく雪は降る勢いを増し、雪雲はいつの間にか満月をすっぽり隠してしまった。
雪が降り始めたのだ。

少女Hと少年K

週刊○○　１２月３０日
速報　○○新聞警察担当の記者Ａ、裂目町少年Ｋ事件を語る

１２月２８日の午後１２時半ごろ、裂目町の閑静な住宅街のある住宅で殺人事件が発生したとの通報があった。
通報したのは現場の住宅に住む被害者の妻、遠藤美鈴さん（４６）。
美鈴さんは「夫が殺された。息子が殺した」と通報。現場に駆けつけた警察の話では、遠藤隆さん（４８）と思われる縊死遺体をリビングで発見。また、同住宅の二階の一室で首を吊って自殺未遂を図っていた少年を発見、確保したとのこと。少年は確保された後、意識不明の重体で総合病院に搬送された。
後の調べで自殺未遂をしていた少年は隆さんと美鈴さんの長男の少年Ｋ（１７）であることが判明。
警捜一課は、遺体の首に縄の痕があり、少年が首を吊るのに凶器と思しき縄を使用していたことから、この事件を「少年Ｋが父親を絞殺し、凶器を使用して首吊りを図ったもの」とみて捜査を進める方針だ。

この事件、いくつか不思議な点が挙げられ噂になっている。
例えば、隆さんの遺体には顔面が破壊された痕があったらしいこと、事件当日見知らぬ大柄な男が現場近辺を徘徊していたらしいこと、などなど。
今回は、このミステリアスな事件について、○○新聞の警察担当記者Ａさんと噂を交えながら対談した。

――今日はよろしくお願いします。

A：よろしくお願いします。
――警察担当記者であるAさんは警察の事件調査に動向していたみたいですが、やはり捜査の進展は望めなさそうですか？
A：そうですね。事件当日の様子を知る人は亡くなったか錯乱、意識不明ですからね。

顔面破壊された遺体

――遺体の状況が伏せられていますが、実際どういった様子で発見されたのでしょう。
A：え？　ああ、そういえば新聞や記者会見では規制かけてましたね。いいのかな。
――お願いします。
A：（頭をかく）……一階のリビングでうつぶせになって発見されました。それで、ごろんと転がしてみると顔面が破壊され、首に縄の痕。それで絞殺と。
――顔面が破壊されていたんですか？
A：誰かわからないほど殴打されていましたね。皮がべろんと捲れて、血で滅茶苦茶でした。検死の話では、殺害された後に人の手で殴られた傷だと。けど、私には何か鈍器のようなもので殴ったのではないかと思っています。だって、どれほど凄い力で殴っても普通ああはなりませんよ。
――鈍器は見つかりましたか？
A：残念ながら、鈍器は見つかってません。この鈍器が少年の手にでも握られればあっという間に解決するのでしょうが。まあ、検死官が顔面の傷は人の手によるものと断定しているので、あくまでも鈍器云々は私個人の見解です。
――少年の拳には殴った時に出来る傷などはあったのでしょうか。
A：（苦笑いを浮かべながら）ただ首を吊ってただけ。だから不思議なんですよ。一体誰が殴ったんでしょうね。

現場近隣をうろついていた大柄な男とは？

――そのとき現場には第一発見者で被害者の妻であるＭと少年Ｋしか居なかったんですよね。事件当日の午後１１時ごろ、現場の裏手の小道で大柄な男を見たと目撃情報があったらしいですが……その人物がやったのでは？

Ａ：大柄な男ですか？

――ええ。女子供では鈍器を使わなければ顔面を破壊出来ないと思いますが、大柄な男が事件現場に居て、殴打したのであれば……。

Ａ：事件現場にいた形跡があれば話は早いんですけどね。現場には被害者家族の指紋や毛髪しか検出されなかったみたいですし、証拠隠滅したような不自然な拭き取りなどもなかったみたいですよ。

――では完全に現場には居なかったことになりますね。

Ａ：さらに、大柄な男の目撃者は、翌日には大柄な男なんて見ていないと証言を引っくり返してしまいましたし、男の容姿も不明確でしたから。だって、ジャージを着ている１８０～１９０ぐらいの男っていう容姿だけですし。せめてジャージの色やメーカーなどが分かっているといいんですけど。

――何故目撃者は証言を訂正したのでしょうか。

Ａ：さあ……。ただ、訂正するときにちょっと様子がおかしかったみたいですね。警察は目撃情報を今でも信じて捜査しているみたいですが、目撃者がその人ひとりだけだったので、大柄な男探しは難航しているみたいですよ。

遺体の隠された外傷、その意図は？

――遺体は顔面を殴打されただけではないと聞いたのですが、何か他に外傷があったのでは？

（しばらく無言）

A：発見当初、ただの絞殺死体だと思ったんですが、その……ズボンを脱がしてみたら、男性器が根元から切り取られていたんですよ。断ち切りハサミを使ったような切り口でした。でも、これも顔面の外傷と同じく亡くなった後に切り取られたらしいですよ。

――被害者の性器や断ち切りバサミは見つかったのでしょうか。

A：……いえ、どちらも見つかってないですね。これも少年Kが握っていれば話は早かったんですけど。住宅内はもちろん、埋められた可能性もあるので敷地を隈なく探していますが、今のところは見つかってないですね。トイレに流したかもしれないので下水道も探していますが、これも今のところは。

――何故切り取ったのでしょう。

A：昔あったじゃないですか。そういう事件。あれを一度したかったのかも……。でも分かりませんね。被害者は女遊びしていた訳でもないみたいですし。性関係のもつれや怨恨って線は今のところないみたいです。

被害者が死亡した後、通報までの空白の30分。MとK母子は何をしていた？

――死亡推定時刻は午後12時だったと聞きましたが、通報するまでの30分Mと少年Kは事件現場の自宅で何をしていたのでしょうか。

A：そんなとこまで知ってるんですか。私が話する必要ないのでは？（笑）

――いえいえ（笑）で、30分間何をしていたのでしょうか。

A：通報者のMさんの話によると悪魔と話していたらしいです。

――悪魔？

A：ええ。デーモンやデビルの悪魔ってやつですね。山羊の角を頭から生やし、コウモリの翼をばさばさと（笑）……といっても、精神錯乱している状態での証言ですから何処まで信じていいか。ま、

参考程度であまり有力な情報ではないですね。
――まさに眉唾といった証言ですね。ＭとＫの二人が共謀して行なった事件なのでは？
Ａ：無いです。Ｍの錯乱振りは相当酷いと聞きましたから。ものをまともに言えない状況らしいですし、第一動機が見当たらない。Ｍは被害者に従順だったようで気の弱い質と聞いてますから、顔面を粉々になるまで殴るのは考え難いと思いますよ。
――ですが、何か積年の恨みがあったのかもしれませんよ。
Ａ：あったはあったでしょうが、息子が夫を絞殺するのをただ眺めてるでしょうかね。もし恨みが二三あったとしても、犯罪に及ぶほどであればすぐ調べはつきますよ。発作的な犯行だとしたら有り得なくはないですが……それなら町じゅうの家のリビングに夫の死体が沢山転がってるんじゃないですか（笑）
――Ｍが悪魔と話をしている間、Ｋは何をしていたのでしょう。
Ａ：さあ……。でも首を吊ったのはＭが通報したすぐ後でしょうから、考えられるのは性器と断ち切りバサミを捨てに外に出たとか。すぐに思いつくのは裂目川でしょうね。ビニールにくるんで川にポチャリと。けど、警察も現場から１５分で行ける範囲は大方調べているでしょうし。時間が経てば真相は明らかになるんじゃないでしょうか。

依然意識を戻さない少年Ｋ。正体は夢想家、存在しない少女Ｈ

――少年Ｋの意識は今だ戻らず、そのせいで捜査が難航しているみたいですが、Ｋはもともとどういった少年だったのでしょう。
Ａ：学校では割と目立っていたみたいですね。あとは、正義感のある少年とも聞いてます。これは最新の情報なんですが、どうやらここ一年のあいだ夢想話を友人に対して頻繁にするようになったらしくて、それが元で事件の一ヶ月前から学校を休校していたみたいです。

――夢想といいますと……。
A：夢想と一口で言っていいのか分からないんですが、記憶障害に妄想癖が合体したような症状と話を聞きました。現実のものではないことを現実だと思い込むアレです。なんでも、知らない少女の名前を叫び出したり……その少女を仮にHとしておきますが、Hは父を殺して自殺した可哀想な子で、自分はHのたった一人の親友だとか……そういった架空のHの身辺を唐突に語りだしたり……まあ虚言を繰り返していたみたいです。
――少年Kはどうしてそのような精神状態になったのでしょう。
A：分かりませんね。彼の持ち物から、手掛かりが見つかるといいんですが。
――父を殺し、自殺未遂した少年K。同じような境遇の架空のH。関連性がありそうですね。
A：ですが……今の段階の調べでは全くの無関係とされています。Kの犯行の動機には関係してそうですから、調査は進めていくでしょうね。

やはり鍵を握るのは少年K

――今のところ、警察の手にある捜査の証拠物件はなんでしょう。
A：事件現場で使用された縄……ぐらいのものだと言ってました。それも、被害者の唾液が付着していただけで……首を締めたときに付着したのか断言は出来ないですからね。
――本当にそれしかないんですか？
A：私も全て把握しているわけじゃないんでね。全て把握しているとしたらやっぱり少年Kじゃないですか？

――今日はありがとうございました。
A：まだ何か裏があると思いますが……残念ながら首を突っ込んでもいい形でおしまいとは到底なりそうもないと思います。

対談の最後に記者のAは深いため息をついていた。今回の対談では話終わったときにAが浮かべた陰鬱な表情が印象的であった。事件の全容を知るのは少年K一人である。何故Kは父親を殺害したのか、余計に謎が深まってしまった対談であった。（記事：T）

壁伝いSOS2　繋がらない

4

窓の外は、相も変わらず雪模様だった。それどころかさっきよりも雪の勢いが増してる気がする。

雪はとめどなく地面に向かって降り続いている。ベッドに座りカーテンの隙間から見える雪を眺めているうちに、だんだんと陰鬱な気持ちになってきた。

――けーちゃんは私のおとうとでなんしょう？

確かに僕は三春姉ちゃんの四歳離れた弟だ。彼女は今年二十一歳になる大学三年生で、面倒見のいい、ただのありふれた、それでも僕にとってただ一人の優しい姉である。容姿だって、そこらへんの大学生とさして変わらない。今だって、目を閉じればありありと三春姉ちゃんの姿を思い浮かべることだってできるのだ。そう、こんなふうに。

三春姉ちゃんは、少し茶色がかった黒髪だ。彼女はその黒い髪を腰まで伸ばしており、伸びた後ろ髪を緑色のヘアゴムを使って――そうだ、姉ちゃんは緑色のヘアゴムが好きだった――後ろで一つにまとめ、右肩へ流している。そして前髪を綺麗に切りそろえている。切りそろえられた前髪が目を隠しているせいで全体的に地味に見えてしまうが、微笑むときだけ出来る頬のえくぼが魅力的だった。

背丈は僕よりも頭一つ分低い。三春姉ちゃんは、そのことを若干悔しく思っていた気がする。なぜなら、身長が僕より頭一つ分低いせいで背伸びしないと僕の頭頂部に手が届かず、手軽に僕の頭を撫でることが出来ないからだ。三春姉ちゃんは子供のころ、よく僕の頭を撫でていた。僕が怪我して泣きたくなったときも、友達と喧嘩して苛立っているときだって……何も言わずにただせっせと僕の頭を撫でていた。

僕はいつも頭を撫でられることによって平穏な心を取り戻していた。いつだって攻撃的な僕から人に優しくできる僕へと戻っていったように感じられた。

ある日、怖い夢を見て眠れなくなったとき、例に漏れず優しく頭を撫でてくれた。そのとき三春姉ちゃんに聞いたことがある。どうして頭を撫でてくれるの？

三春姉ちゃんは笑ってこう答えた。

「私はそれしかけーちゃんを慰める方法を知らないの。それに、手を頭に当てることで、私の元気の素をけーちゃんに渡せるような気がして」

……どうやら、長いこと深く考え込んでいたらしい。三春姉ちゃんは諦めたのか、壁をたたく音は鳴りを潜めていた。とりあえず危機は去ったみたいだ。いま聞こえるのはパソコンの薄っぺらな作動音と、備え付けのガスストーブが時折たてるチカチカ音だけだった。

僕はとても気分を変えたかった。そして、考えることを放り投げてしまいたかった。そういうとき、普通だったらベッドに潜り込んで眠りにつく。けれど、眠ることがどうしても出来そうになかった。頭が冴えてしまっているのだ。

（そうだ、小説の続きを書こう）

ついさっき手が止まったばかりだったけれど、もしかしたらこういう時こそ小説が進むのかもしれない。

ベッドから立ち上がり、パソコンのモニターの電源を付けて、回転椅子に腰を下ろした。

僕は小説を書く事が好きだった。昔から頭のなかでアレコレ考えることが好きだったし、物を作ることが好きだったから、いつの間にか気が付けば自分で小説を書くようになっていた。もともとバットエンドが大嫌いということもあったのだと思う。子供の頃から多くの物語を読んだり見てきて、いつもバッドエンドをハッピーエンドに変える魔法の力があればいいのにと思ってきた。

そう、僕はバッドエンドは決して書かないのだ。

モニターは、徐々に明るさを増して情報を鮮明に映すように努力している。

４０４　ＮＯＴ　ＦＯＵＮＤ　ＥＲＲＯＲ

モニターには、そう映っていた。

三春お姉ちゃんが関わったらしい事件についてのウェブページを開いたら、こう表示された。何らかの問題が生じて、繋がらなかったのだろう。

ふと思いついて、違うウェブページを開いてみることにした。いつも見て回るページをお気に入りの項目から選び出し、クリックしてみる。

４０４　ＮＯＴ　ＦＯＵＮＤ　ＥＲＲＯＲ

そのあと数回違うページを試してみたが、どれも結果は同じだった。

このパソコンはもうどこにも繋がっていない。それがどうしたっていうんだ。

そのウィンドウを最小化にして、小説を保存していたフォルダをダブルクリックした。そのフォルダには、４つほどのテキストファイルがあった。一番左は『父』、二番目は『母』、三番目は『姉』。

僕は一番右にある『浮遊霊』と題されているテキストファイルを迷わず開いた。ファイルが開き、文字が表示される。

１２月の月が綺麗な夜一時。ひとけのない山奥の忘れ去られた神社。

山奥では本当にいろんな音がする。古ぼけた神社であっては言うまでもない。

僕は何度も検分して、文章の破綻がしてないか確認した。やはり、物語は出だしが大事であると僕は考える。
最初に雰囲気を文章に持たせ、物語の終盤まで読者を引っ張っていくのだ。読者を引っ張ることが出来たのなら、作者の主張が顕著に現れる結末まで読ませることが出来るし、読者が物語を読み終わることが作者にとって一番の望むところだからである。
この『浮遊霊』の主人公は浮遊霊で、自分の境遇が悲惨なのにも関わらず神社で親友のためにお百度参りをする。そして物語の中盤、親友を助けることの出来る存在を知る。最後は、地縛霊の視点に切り替わる。実はこの地縛霊は主人公を陰から見守っていたのだ。
僕は、そんな主人公の願いを叶えるのにふさわしいイメージを探した。適任を見つけるのに苦労はしなかった。僕はその存在を知っている。
（やはり、三春姉ちゃんしか適任はいないだろう）
それ以外の適任は僕の頭の中で見つけることが出来なかった。もし、彼女以外に適任の存在がいるとしたら、それはどんな人物だろう。
（過去に僕を癒してくれた人物はいたのだろうか？）
急にこめかみがピリリと痛み出す。頭の中で何かが脳を圧迫しているような痛みだった。僕はとっさにこめかみを抑えてうずくまった。何が僕の頭の中で騒いでいるんだ？
だんだんとその何かはあらゆる方向へ移動し、駆け巡って頭のあちこちをつっつき始める。額へと、頬へと、頭頂部へと、何かが分裂し蠢いているのが痛みで分かる。
僕は叫んだ。痛みよりも、恐怖から逃れるためにいつの間にか僕は叫んでいた。やめてくれ、やめてくれ、やめてくれ！　僕が何をしたっていうんだ！
何か突き刺すものを探した。なんでもいい、鉛筆でもハサミでも、突き刺せるものであればなんでも良い。尖ったものをこめかみに、

額に、頭頂部に、顎に、頭じゅうのあらゆるところに突き立てほじくりかえすのだ。
そのとき、壁が乾いた音をたてた。
――こんこんこんこんこんこんこんこん。
僕は音をたてた壁のほうに振り返った。三春姉ちゃんが呼んでいる。こんこんという乾いた音は、さっきよりも強く鳴っていた。きっと、僕がドアを開けなかったせいだろう。もしかしたら怒っているのかもしれない。
ゆっくりとベッドに乗り出し、壁を三回叩いた。
――こんこん。
数秒の沈黙のあと、壁の向こう側から声が聞えた。
――けーちゃん、大丈夫？
僕の叫び声を聞いて、心配したみたいだ。それと、さっきの挙動で、僕が怒っていると感じたのもあるに違いない。
「大丈夫だよ。それよりこっちこそごめん。急にドアを閉めたの、驚いただろう？　ちょっとヘンになってたんだ」
そう、気が狂いそうなほどヘンになってたんだ。
僕がそう言い終わると、もう頭の痛みを感じてはいないことに気づいた。頭が痛くない。それどころか、頭がすぅっとすっきりしたみたいだ。
「三春姉ちゃんの声を聞いて、安心したみたい。なんでもないよ」
――ほんと！？　嬉しい！　てっきりけーちゃんが私のこと嫌いになったのかと……思っちゃった。えへへ。
「そんなことないよ。落ち着いた。そういえば急にヘンな声あげちゃったね。それも、驚かしてごめん。突然頭が痛み出して……」
――ううん。そんなことない。私こそ、けーちゃんと顔を合わせてお話したいっていう気持ちを強要しちゃったみたいで。反省してます、はい。
壁で隔てられた会話だけれども、三春姉ちゃんが落ち込んでいるのが手に取るように分かった。ごめん、三春姉ちゃん。

――けーちゃんは、考えすぎることがあるから、きっとそのせいだね。頭をからっぽにするといいんじゃないかな？　ほら、それで出来ればおねーちゃんの事を考えてくれると嬉しいな、なんて。

三春姉ちゃんの言葉が胸に染みた。どうしてこんな優しい姉を拒否したんだろう。こんなに僕のことを考えてくれるじゃないか。

僕は、姉に対して申し訳なく思った。ごめん……と口をついて出そうになったが、それを遮るように、三春姉ちゃんは言葉を続けた。

――ごめんって思ってるんでしょ。おねえちゃん分かってるよ。でも、ごめんは禁止。だって、私たち姉弟でしょ？　かたっぽが辛くなったら、もうかたっぽが慰めることって、おねえちゃんは当たり前だと思うのです。

壁の向うにちょこんと座っているパジャマ姿の三春姉ちゃんを想像して、微笑ましくなった。きっと壁の向うでも枕を抱いて笑っているのだろう。ごめんの代わりにありがとうと言うことにした。

「ありがとう。……そういえば気になってたんだけど、ドアで話したとき、ピンク色のヘアゴムをつけてたよね。三春姉ちゃんっていつも緑色のヘアゴムじゃなかったっけ」

そうだ、なぜ今までそれに気がつかなかったのだろう。ちゃんと目で確認したはずなのに。

ドアで話していたとき、間違いなくピンク色のヘアゴムを付けていた。僕のイメージでは緑色のヘアゴムを付けている三春姉ちゃんの印象が強かった。だから、多少違和感があったのだ。そうだ、そのちょっとの違和感が大きな違和感に膨れ上がり、僕を不安にさせたんだ。

部屋に数秒間の沈黙が漂った。その沈黙は僕を不思議に思わせた。なにか不味いことでも聞いてしまったのだろうか。

――よく気がついたね。ヘアゴムについては答えにくいんだけど……やっぱり答えなきゃダメ……かな？

「答えにくいんだったら、無理しないでいいよ。……って言いたいところだけど、今回ばかしは答えて欲しいかな。僕、三春姉ちゃん

のこともっと知りたいからさ」
嘘は言っていない。父さんから三春姉ちゃんは実は死んでいると聞かされて、ずっと三春姉ちゃんのことが気になって仕方がなかったのだ。だから、ここで全部答えてもらって安心したい。
――じゃぁ、私の全てを教えてあげる代わりに、一つおねえちゃんからのお願いを聞いて欲しいの。
「いいよ。僕に出来ることならなんでも聞くつもり。アイスでもなんでも買ってくるよ？」
――ううん。そういうおつかいとかじゃなくて、私を部屋に入れて欲しいの。やっぱりダメかな。
僕は、想像以上に三春姉ちゃんが傷ついていることに気づいた。ドアをああやって閉めてしまったせいで、三春姉ちゃんは悲しんでいる。
「……わかった。部屋で待っているね」
三春姉ちゃんは、僕の頭痛を癒してくれた。そんな大事な存在を、どうしてまた拒否することが出来るだろう。
……それにしても、なぜ僕の頭は急に痛み出したんだ？
ここ一年間の自分すら分からないんだ。三春姉ちゃんのことが分かるはずなんてない。だから、知ろうと行動を起こすことが必要だ。
三春姉ちゃんの、そして僕自身のことを知ることが必要だと思った。

5

三春姉ちゃんはすぐに僕の部屋にやってきた。
いつもと変わらない緑色のパジャマを着て、緑色のヘアゴムで髪をまとめていた。彼女は部屋に入ってくるなり僕に抱きついて背伸びした。僕は彼女の意図を読み取って膝を折ってやる。彼女は僕の頭を撫でて「ふふ」と声を漏らした。顔は見えないが、きっと彼女の顔にはあの可愛らしいえくぼが出来ているに違いないと思った。

その一連の動作はとても自然なことで僕の心を安心させる。三春姉ちゃんは、頭じゅうを這っている何かを撃退することが出来る不思議な力を持っている……のかもしれない。
数分ぐらいそうやっていただろうか。三春姉ちゃんは手をとめて、パジャマの上着のポケットから何かを取り出し、手のひらにそれを乗せた。
それは白い紙で作られた折り鶴だった。
「どうしたの、それ」
「なんとなく作ったんだ。まだ一つしか作ってないけど、これあげるね」
僕は折り鶴を掴みあげてありがとうと言った。
「細かいところにちゃんと気づいてくれて、嬉しかったな。その折り鶴は私からのささやかなお礼。私だと思って大事に飾ってね」
その折り鶴を机の上に置く。そして、聞きたかったことを尋ねる。
「そう、ヘアゴム。また緑色に戻っているけど、どうしてピンク色に変えたの？」
「そんなにヘンだったかな？」
「そんなことない。とっても女の子らしくて可愛かったよ。三春姉ちゃんだったら、どんな色だって似合うに決まってる。でも、普通だと思っていたことが違っていたら、いろいろなことが普通と違って見えてくるから聞いてみたんだ。そう、何が普通で何が普通じゃないのかが分からなくなってたんだ」
「ふうん」
三春姉ちゃんは顎に手を当てて、頭をかしげた。
「ねぇ、ベッドに入っていいかな？」
「もちろん。でも、寝るときは部屋にちゃんと戻ってね」
僕の言葉には返事せず、ベッドに座りこむ。その仕草は、僕の知っている三春姉ちゃんそのものだった。どう見たって、僕の三春姉ちゃんだ。
彼女はそのまま枕に倒れ込む。前髪がベッドのシーツにたらりと

垂れる。僕はその前髪から覗く大きな目を見つめた。やがて彼女は瞼を閉じた。
「けーちゃんのにおいだ」
「当たり前だろう？　僕以外の人のにおいが付いてたら気持ち悪いよ。それに人のにおいを嗅ぐなんてあんまりいい趣味じゃないよ」
その言葉にも三春姉ちゃんは反応しなかった。どうやら僕の部屋に入ってこれたことで、随分満足しているみたいだ。このまま彼女が寝てしまうのではないかと思ったから、僕は彼女の隣に座ることにした。
「ほら、寝ちゃだめだってば」
脇腹をつかんで優しく揺らすと、三春姉ちゃんは僕のほうを向いて唇を動かした。僕の耳には彼女の声は届かなかったらしい。何を言ったか聞き取れなかった。
「どうしたの？　何か言った？」
「えへへ。大好きだよって言ったのです」
「ヘンな姉ちゃん」
そうだ、二人ともヘンだ。でも、どうして今更になってヘンだと感じ始めたのだろう。
ここまで劇的に状況の感じ方が変化したのだ。絶対になにか『きっかけ』のようなものがあるに違いない。
いつの間にか僕は、ことの始まりから今までに至る全てを三春姉ちゃんは知っているのではないか、と自然に思うようになっていた。そう、僕は半ば確信に近い感覚でそう思うようになっていた。本能で感じ取ったといってもいい。
「そろそろ教えてくれないかな」
「……知りたい？」
「僕はどうしても知る必要があると思うんだ。知ろうとするとどうしてだかとっても辛い。けれど、それでも僕は三春姉ちゃんに対して、このままずっと違和感を抱き続けて生きるわけにはいかない」
「……」

「姉ちゃんがもし一年前に死んだとしたなら、家族である僕がこの一年間ずっと知らないのは絶対におかしい。僕たちは家族でしょう？　家族という大切な繋がりを僕は決して疑いたくないんだ。それに、どうやら僕の頭は上手にここ一年間を思い出せないらしい。『空白の一年間』がどんどん僕の頭を圧迫しているみたいだ」

三春姉ちゃんはすこし間を置いて言った。

「……約束だったものね」

「三春姉ちゃんは知っているんだね。ここ一年間の過去を」

そう、何らかの理由で誤魔化し続けていた僕の過去。

姉ちゃんが死んでからの、――

――突然、喉に何かがつまったような違和感を感じ、呼吸が困難になった。

声を出そうとするが、口がパクパク開いたり閉じたりするだけで、その口から出てくるのは空気が喉を通り抜けるぴゅうという間抜けな音だけだ。

三春姉ちゃんは慌てて起き上がり、隣にいる僕に抱きついた。体はそんな僕たちの意思に関係なく悪化に向かって進行していく。

「考えちゃだめ！」

まず動悸が激しくなり、息苦しく感じた。僕は口に手をあてる。夕飯に食べたものが口へ向かってせり上がり胃液と吐瀉物の独特な嫌な臭いが口の中に広がった。次に僕はその吐瀉物（ニンジンやブロッコリーなどのまだ消化しきっていない残骸）をゆっくりと噛み砕き、飲み込む。そして飲み下し終わってから肩をつかって深呼吸した。具合がとんでもなく悪い。頭が割れるように痛い。

「落ち着いて、ねぇ。大丈夫、大丈夫だよ！　だから何も考えないで。私の手のひらのことだけを考えて……ほら、ね？」

聞くともなく彼女の声を耳に入れていると、またあの頭のなかの何かが蠢き始めた。

ドクドク、ザワザワ、チクチクチク。

いつの間にか、三春姉ちゃんは僕の頭を撫でていた。そう、一生

懸命に、必死に。けれどその手つきは無造作なものではなく、ゆっくりと、優しく、いたわるようなものだった。
頭はだんだんと癒されていく。まるで本当に力の素を僕に与えているみたいだ。三春姉ちゃんの不思議な力は、あの時と同じように僕の頭の痛みを鎮めた。
それから、三春姉ちゃんは頭に手のひらを置いたまま、注意深く僕の体をベッドに倒して僕の右頬に唇を当てる。僕は落ち着きを取り戻すまでなされるがままだった。でも、どうやら状態は着実にいい方向へ向かっているみたいだ。
「……やっぱり知らないほうがいいのよ」
彼女はそう言った。だけど、残念ながら僕の頭はまだ完全と呼ぶには程遠く濁りきっていたから、今の僕には、この言葉を吐いた彼女の正体は三春姉ちゃんで正しいのか、それとも三春姉ちゃんの皮を被った何かなのか、それを判断する能力は持ち合わせていなかった。
ただ、次に僕の耳まで届いた言葉をぽつりと呟いたのは、僕の知っている「三春姉ちゃん」だったと確信を持って答えることが出来る。だって、とても悲しそうな表情を浮かべた彼女の顔が僕の目にしっかりと映ったから。
「辛い思いさせちゃって、ごめんね」
やはり僕は三春姉ちゃんのこと以上に、僕自身のことを知る必要があるみたいだった。
例えば、この世界に置ける僕の立ち位置とか。
もし、三春姉ちゃんが一年前に死んでいるのなら、僕と彼女が一緒に過ごしてきた空白の一年間は何だっだろう。その空白を全て埋めて、僕の物語を完成させなければならない。
……そして僕はやはり受け止める必要がある。
日常が崩れ始めたきっかけを突き止めて、疑問の数々を僕の頭で判断するために。
ドクドク、ザワザワともう一度僕の頭の中で何かが蠢いた。

ドクドク、ザワザワ、チクチクチク。

×××

○○新聞　１２月３０日

遠藤家の闇――遠藤家の長女遠藤三春さんが一年前に飛び降り自殺

裂目町少年Ｋ事件に驚くべき情報が新たに追加された。

この事件の一年前の同日、同時刻（１０年１２月２８日）に遠藤家の長女である遠藤三春（２０）がビルの屋上から飛び降りて死亡したことが判明。

三春さんは亡くなる数ヶ月前から精神に異常をきたしており、診察の結果入院が必要と診断され病院に入院した。だが、入院初日の昼ごろ、昼食を持ってきた看護師の僅かな隙をついて脱走し、病院近辺のビルの屋上から飛び降りたとのこと。

事件があった１２月２８日は、三春さんの一周忌を終えた三日後で、その一周忌で父親と息子の間に何らかのトラブルがあったのではないかとみて、両方の事件の関連性を調べる方針で警察は調査を進めている。

ハルの冒険２　妖精の舞いにご注意を！

１

俺はとある出版社に勤めているエリート編集者だ。ちなみに、三十二歳独身である。

水玉模様のネクタイをしっかり締め、クリーニングに出し終えてばっかりの卸したてのスーツを来て、今日もせっせと作家にプレッシャーを掛ける。ださんとどーなるか分かってんのか！？　と凄みと睨みを聞かせ、作家に提出させた原稿を俺の慧眼と編集力でいいものに作り替えてやる。それが俺の仕事だ。

人は俺のことをこういう。「凄腕の魔術師」と。

俺の魔術のおかげで売上が伸びた作品は数知れず。大御所作家には「君がついてくれるから私は作品を書き続けているのだ」なんて言われる毎日。美人声優の〇〇とはワイドショーでネタにされるほどのアツアツ振りで、彼女が妊娠したことで来年の春には結婚する。だから、独身貴族という身分も、来年の春にはオサラバする。ここまで頑張ってきたのも、まさにこの結婚のため、そして生まれてくるであろう子供のためといっても過言ではない。

……そんな魔術師である俺の耳に、ある情報が入ってきた。

それは今日の夕方の話だ。

いつものように、大御所作家との打ち合わせを終えて事務所へ帰ってきた俺は、俺のデスクの近くでうろついているお茶汲みのＯＬを捕まえて、コーヒーを入れて貰い、一休み。心と体を癒すためにちょびっとマグカップに口を付けたとたん……俺はコーヒーを吹き出した。

そのコーヒーがかなり濃く、とんでもなく不味かったのだ。

いつも俺は〇〇社のアメリカンブレンドを愛飲しているのだが、どうやらお茶汲みのＯＬが新人だったらしく、勝手が分からなかっ

たようなのだ。
一言でも文句を言うべきである。新人教育のなってない会社は潰れる運命なのだ。その会社を支えてやってる俺に濃いめのコーヒーを飲ませるなんて信じられない。
心を落ち着かせようとするが、うまくいかなかった。というのも、以前俺が付き合ってやっていた女が同じようなコーヒーを作るとんでもない奴だったのだ。
思い出したくもないが思い出してしまう。
（くそっ）
その女は一恵といって大学時代の同級生だった。文芸部に所属していたことで知り合って、後輩に面倒みがいいところや手先が器用なところに惚れ込んで大学サークルの合同イベントでマイムマイムを踊り、キャンプファイヤーの下で告白したのが悪夢の始まりだった。
もちろん、大学生活はそれなりに楽しいものだったが……一恵の作る飯の不味さったら信じられないものだった。それも、誰でもそれなりに入れれるようなコーヒーですら、不味いのだ。悪意を感じるほどに。
俺は必死に我慢していたが、一恵が日に日にしつこく世話を焼いて、頼んでもいないコーヒーを入れて寄越す、そして飲まないと泣きそうな顔をして訴えるので、俺は一恵を捨てることを決意した。ま、今になって思えば酷い捨て方ではあったが（どう捨てたかは朧気にしか覚えてない。早く忘れたかったからな）、俺は本当に解放された気がした。
当然、捨てた後の一恵がどうしたかなんて興味も湧かない。本当に嫌な思い出ばかりなんだ。
……迷わず立ち上がった俺は、ＯＬのところへ向かうことにした。もちろん新人作家にいつも向ける睨み顔を作って、ＯＬを探す。
なんと、ＯＬはどこへ行ってしまったのか、事務所のどこにもいなかった。

（きっと何処かで暇つぶしでもしてるんだろう）
だいたいお茶汲みなんぞは、給湯室で噂話をするのが生きがいのところがある。それほど娯楽がないのだ。だから、こんな不味いコーヒーを入れて持ってきやがるのだ。どうせ頭では全く別の、例えば誰々が誰それとホテルに行くのを見たとか、そういった噂のことばかり考えていたのだろう。まったく、信じられない。
俺は事務所のフロアをくまなく探すことにした。一番怪しいのはさっき言ったとおり給湯室だ。俺は給湯室を覗いてみる。……誰もいない。
次は女子トイレだ。女子トイレはＯＬたちの聖域ということを俺は知っている。なぜなら、小うるさい男性が決して入って来れない場所だからだ。ふふ、もちろん俺はそんなこと関係なくトイレに入り込み、探す。もちろん声をかけてだ。「おい、コーヒーをついさっき持ってきた社員がいれば、返事をしてくれ」と。声が返ってくるはずはなく、俺は「声をかけたからな」と一人ごちて（当然確認のためだ）ずかずかと入り込む。……誰もいない。
給湯室、トイレに誰もいないとなると、違うフロアに逃げたかもしくは必要でもない文房具でも買いに外に出ていったのだろう。
（やられた）
気分を悪くした俺は、ＯＬがエレベーターを待っているのを最後の望みとして、エレベーターのところに駆け寄った。
そこに一人のロングコートを着た女性が立っていた。
ＯＬではなく、新人編集者で名前は水野といった。
小ぶりなお尻がチャーミングで、俺は結構気に入っていた。水野のおどおどとした態度は男の本能を揺さぶるものであったし、それにとんでもなく顔が可愛い。特に、小動物を思わせる素振りと、豊満なバストには目に見張るものがある。
俺は舌なめずりすると、水野に歩み寄る。出来るだけ爽やかな笑顔を作ってだ。
「やあ」

水野は後ろからかけられた俺のハリのある声に気づいたのか、振り返り答えた。
「あ、あ……山辺さんですか。お疲れ様です」
顔を曇らせ、きょろきょろと周りを見て俺に笑いかける。それが堪らない。
「いやあ、北野先生には参ったよ。もう上がりかい？」
「いや……これから、伊井筋（いいすじ）先生のところに原稿を貰いに伺おうと」
伊井筋……俺はその名前を聞いて、記憶からその名前を探す。
水野の担当している作家は、新人ばかりで実績のある作家は一人もいなかった。だが、最近その伊井筋桐真（きりま）という作家の小説の売上げが順調らしく、水野の笑顔はその伊井筋の実績で保たれているようであった。
「それは、気合を入れていかなきゃだね」
元気づけられたと思ったのか、水野はぱあっと顔を晴らして、にこやかな笑顔になる。
「はいっ」
（かわいいぞ。これは）
……実はこのとき、美人声優であり将来の妻でもある〇〇には飽きかけていた。確かに付き合った当初は、俺の企画したライトノベルのアニメ化で主役に抜擢してやったのもあって、涙を流し感謝して「山辺さんのためならなんでもします」とまでいう可愛いやつだったのだが、最近は欲が出てきたのか、俺に文句を言うようになった。信じられない。誰のおかげで今五本のアニメの主役を任せられているのか。全て俺の担当していたノベルのアニメばかりじゃないか。
と云々の事情もあり、水野に恩を着せて……というのもいいかもしれないと俺は思案した。
できるだけ優しく声をかけてやることにしよう。もちろん恩を売るためだ。
「……でも、何か悩み事があるんだろう？」

「えっ……」
「最近伊井筋先生の原稿が遅れているみたいじゃないか。聞いたよ、滝沢から」
滝沢というのは俺の同僚で、口ばっかりの熱血馬鹿。売れない作家に同情ばかりしては、逃げられ裏切られている呆れたヤツだ。
当然滝沢は水野のことに夢中で、水野の心配ごとばかり俺に話てきやがる。
水野は悲しそうに顔を伏せると、頭をふって答えた。
「滝沢さんが……はい、そうなんです。新作の構想がとても売れるような代物じゃなくて……」
チャンスだ、と俺は拳を握り締めた。滝沢には悪いが、ここで俺が助けてやって、水野をいただく。もう一度俺は舌なめずりする。
「それはいけない。小説は売れてナンボだからね。どう？　俺が一言いってきてやろうか？」
「そ、そんなっ……」
「いいって。新人教育も編集者の勤め。大丈夫、俺はなんて言われてる？」
「も、もちろん山辺さんの力なら百人力です。けれど、私が山辺さんのお力を借りたと職場で噂になったりでもしたら……」
（そうくるか）
俺は胸をはって答えた。
「大丈夫。問題ないよ。このことは二人の秘密だ。それで大丈夫だろう？」
「え、ええ……いいですけど、それだと山辺さんはタダ働きになってしまうんじゃ……」
「何を言ってるんだ。同僚を助けてあげるだけだ。俺は水野さんの笑顔が見れればそれでいいんだ」
そして、ホワイトニングした白い歯をちらりと見せる。これで俺の勝利は決まったも同然。
水野は俺の手を握ってぶんぶん振って、嬉しそうに答えた。

「ありがとうございます！！　そういってくださるなら……伊井筋先生に連絡して置きますね」
「ああ。すぐにむかうと伝えてくれるかい」
「はいっ」
水野は「キャー」と小躍りして、嬉しそうにその場でくるくる回った。ほんっとーに可愛いやつだ。
（そうそう、それで本題を伝えねば）
「どう？　その後に、食事でも。美味しいオススメの料理店知ってるんだ」
「はいっ！！」
水野は楽しそうにくすくすと笑った。
ふふ、俺との素敵な食事を想像しているのだろう。

2

俺は水野から聞いた住所に到着し、車から降りた。空からはちろちろと雪が降っている。
目的地は寂れた商店街の裏路地にある貸しビル。その三階だった。山の麓にある閑散とした商店街の裏路地というのは、夜の暗さも手伝ってか、どれもこれもいっそう不気味な雰囲気を醸し出している。
なぜこのような人通りの少ない場所に商店街を作ろうとしたのか、俺には理解できなかった。
（人に物売るっていう気持ちが見えないな）
そう思いながら、貸ビルを眺める。
貸しビルには、看板一つありはしなかった。
三階の大窓には、テープで「伊井筋　事務所」と書かれている。看板の代替えなのだろう。水野がしっかり連絡をしていたおかげか、大窓から明かりがもれていた。
俺は、右脇の昇降口の狭い階段を無言でのぼり、ドアの右横に申

し訳程度についているちゃっちいインターフォンを鳴らす。
ドアには小さなスリガラスの小窓がこしらえていて、その下に「伊井筋　事務所」というプレートが貼られていた。よし、あっている。
少しばかり待つと、ドアが内側に開いた。
「〇〇の山辺ですけど、新作の打ち合わせにきました。伊井筋先生はいらっしゃいますか」
俺は事務所の内部を見渡す。誰もいない。
ドアが勝手に開いたのだろうかと不思議に思っていると、足元から声がした。
「伊井筋は私です。どうぞ、中に入ってください」
声がしたほうを見下ろすと、そこには黒い着物を着た銀髪の少女がいた。
「あ、あなたが伊井筋先生ですか？」
「はい。いかにも」
驚いた。伊井筋桐真の書いた小説はあいにく読んだことがないが、寸評だけは読んだことがある。確か、幻想小説家で荒唐無稽な（端的にいってしまえば馬鹿げている）小説ばかり書いているらしい。粗筋といった粗筋もなく、緻密に作り上げられたそれまでの世界観を全て否定する超展開の連続で、読むものを混乱させることから批評家たちには受けが悪いが、ネットのレビューではすこぶる評判がいいらしい。
そんな捻くれた小説を書いているという話を聞いて、俺の中での人物像はムサイおっさんというイメージだった。夢想家で女の味を知らない、臭くて気持ち悪いおっさんだ。
（だが、なんとも、まあ）
俺は伊井筋桐真の容姿を舐めまわすように眺めた。
銀色の長い髪を真下に下ろし、真っ直ぐに切りそろえられた前髪から覗くぱっちりとした青い目。俗に言う、碧眼というやつだ。
服装はというと、黒を基調とした着物を召し、着物に隠れる小さ

な足には木造の下駄を履いている。着物の裾模様は黄色のすすきだ。
その少女の西洋人形のような容姿と、日本の伝統品である着物の組み合わせはアンバランスさを作り上げている。……どちらかというと、黒色は黒色でも、漆黒と呼ぶにふさわしい色の生地に、袖やスカート、さらには襟元まで薄ピンク色のフリルがたくさんついてある西洋ドレスのほうが似合いそうだ。
そして、何よりも非現実なほど顔立ちが整っている。
そんな人形の容姿をした少女は、俺を見上げて微笑む。
正直、ぞっとした。
唖然となっている俺にその少女は問いかける。
「どうしましたか？　外は寒いですよ。どうぞ、お入りください」
「あ、どうも……」
そうやって案内され、事務所の中に入ると、さらに驚いた。
事務所のレイアウト自体はいたって普通だ。
入口の左側には大窓があり、その傍に木目調の素材を用いた長机が置いてある。入口の向かい側には執務室と書かれたプレートを下げているドアがあり、右側には給湯室へ続くドアと本棚がある。真ん中には四脚の柔らかそうな椅子が置かれており、その間にはガラステーブル。
……普通なのだが、半端ないほどのぬいぐるみと置物が真ん中のガラステーブルの上に所狭しと並べられている。
熊のぬいぐるみ……熊が鮭を加えている置物、鷹の剥製とクラゲのぬいぐるみ。羽を背中から生やしている妖精のぬいぐるみ。美少女フィギュアと悪魔のフィギュア。コキブリの瓶詰め（きっと中のゴキブリはビニール製のおもちゃだろう）……などなど。
この異様な光景の説明を求めようと、少女に目配せする。
少女は照れながら、頭に小さな手を当てて答えた。
「いやぁ……資料です。今、人形に恋をする人間が、親友に自らの体を剥製にするよう頼む……といった構想を練っていまして。新作なんですが、なかなか資料が集まらなくて、四苦八苦していたとこ

ろです。さあさあ、座ってください。水野さんからは連絡を受けていますから」
なんだか釈然としない。だが、水野の尻のためだと思い、口に溜まる唾を飲み込んで頷く。まあ、小説家にはよくある話だ。資料集めに必死な新人作家が、訳もわからないものを買い込み、眺める。ごくごく普通の光景だよ。うん。
俺は入口を背にして置いてある一脚の椅子に腰掛け、黒革の鞄から水野から受け取った参考資料を取り出す。
伊井筋は手をぽんと叩き、俺に尋ねる。
「ああ、お茶をいれますね。何がいいですか？」
（わかってるじゃないか）
俺は資料を取り出し、ななめ読みしながら答える。
「アメリカンコーヒーがいいですね」
伊井筋は頷いて、給湯室に向かった。
今からお湯を沸かすのだろう。とんでもなく不味いコーヒーが出るとたまらないが、我慢するしかない。さっさと新作の打ち合わせを済ませて水野を迎えに行こう、と俺はくつくつと笑う。
ななめ読みした資料にあった新作のプロットははさっき思い出した寸評と変わらないものだった。
（ふん。くだらない）
大体、幻想小説が売れると思っているのだろうか。運良くデビュー作『倉庫娘』は売れたみたいだが、そんなのが継続して売れるはずがない。市場はそれを望んでいないのだ。
まず、「伊井筋桐真」という作家に幻想小説家というレッテルが貼られる。そうなると、読者は次の新刊もそういう類のものを望むようになる。そして新刊がでる。読者はもっと大きなものを望むようになる。……その繰り返し。
エンターテイメントとしての側面を持つ小説家か、もしくはよっぽど文章に個性がない小説家でなければ、売れ続けるのは難しい。そりゃぁ売りかたっていうものもあるけど、最近の作家は自意識だ

けは過剰で自分の作品にプライドがある。編集者である俺たちが口を出すのを異常に嫌がるきらいがある。水野の話でも、そんなヤツなんだろ。
俺たちは市場を俯瞰して見る力があるのだ。そんな編集者の意見を聞かない作家なんて滅びるのが当然であるはずだ。求められない作品を書き続けていることほど、滑稽なものはないのだから。
そんな思いを張り巡らせていると、給湯室から伊井筋が湯のみとマグカップを乗せたお盆を持って出てきた。
「お待たせしました。……すいません。コーヒー粉を大目に入れてしまいまして、かなり濃くなってしまったかもしれません」
俺はうんざりした。ここでも濃いコーヒーか。
置物やフィギュアやぬいぐるみをどかし、置き場を作ってから置かれたマグカップをみやる。
（そんなもの飲めるかよ）
いかん、と頭をふって、向かいの椅子に座った伊井筋に本題を切り出すことにする。俺には時間がないのだ。早く、職場で待っている水野を迎えに行ってやらないと。
「えーっとですね、伊井筋先生の提出していただいたプロットですが、これはどうも……無駄が多過ぎるのでは？」
伊井筋は俺の言葉が心外だったようで目をぱちくりさせる。
「どこが無駄なんでしょうか」
俺はため息をわざと聞こえるようにつき、できるだけ親切に答えることにする。
「伊井筋さん。これは売れないですよ。微塵も売れる要素がない。書き上げても時間の無駄です。いいですか？　悪魔の大女が地縛霊を説得し、昇天させる。それはよくある話でよろしいですが、その後がいけない。地縛霊を必死に説得していた悪魔の変貌の仕方はなんなんですか」
「……といいますと？」
「悪魔が動きもしないただの美少女フィギュアから夜な夜な命令を

聞いてそれを実行する。その悪魔は実は悪魔でもなんでもなく、ただのイカレタ人間だった。……ま、それはいいでしょう。その次ですよ」
少女は若干楽しそうに含み笑いを漏らす。
「その後が何か？」
「悪魔は、ある館で開かれるダンスパーティーに潜り込み――それは人形の指示だとのことですが――剥製を作らせたら名人の腕前を持つ……す、スナイパーを探す。そして、その人物が実は悪魔の十年来の親友であった。これはなんなんです？」
「さあ、なんなんでしょう」
「とぼけないでくださいよ。伏線もなにも貼りようがないこんなのが通ると思ってるんですか？」
「いや、私は楽しそうだなと思ったのですが」
（こいつ……）
「しかも！！　そのダンスパーティーで寺のお坊さんに何度も頭を殴られ意識を失った悪魔は、時計ばかり置いてある部屋で目をさまし、その時計が鳴らす音を聞いて、一人でダンスを踊る。……オチもクソもありゃしないじゃないですか！！」
「……でも、楽しそうじゃないですか？　そういう話」
「あんたは一回病院で脳を診てもらったほうがいいですな。いい病院を知っています、今すぐ診てもらいましょう」
そういって凄みを利かせる。
「もっとマシなプロットを練ってから提出してください。地縛霊を必死に説得するという設定は良かったですから……」
少女は、後ろ髪をいじって、気のない返事をしただけだった。それを聞いて俺は血管の切れる音を聞いたような気がした。
「なにか、ご不満があるようですね」
「ええ……ですが、言わないでおきましょう」
「は？」
イライラが頂点に達しそうだ。俺が大人で無ければ、思いっきり

目の前の人形みたいなツラしたやつをぶん殴ってたところだ。
（ここまで言われては仕方がない、最後まで聞いてやるのが人情だろう）
と思った俺は、伊井筋の次なる言葉を待ってやることにする。
伊井筋はなかなか切り出さない。
仕方なく俺は、くそ不味いであろうコーヒーを口に付けることにした。
（ま、まずっ）
どれだけ濃くしたらこんなに不味くなるのだろうか。まるで泥で濾したような味だ。こんなコーヒーを入れることができるヤツは人間ですらない、と俺は悪態を心の中でついた。
伊井筋はその俺の苦い顔に気づいたのか、「どうしたのですか？」と聞いてきやがった。
どうしたもこうしたもあるか。
……だが、俺も大人だ。大人なんだ。
嫌な思いを俺がしているのにも関わらず、目の前に座っている少女は、悪気はないのかもしれないが、ニヤついた笑いで俺を眺めている。
俺は、口調を強めて責め立てた。
「お前な、曲がりなりにも作家だろうが！！　なんでこんなクズプロットたてて寄越すの。え　！？　頭にウジでも沸いてんじゃないの？　もっとな、本出したいんだったら、もっとマシなプロット立てろよ、あ！？」
少女は答えず、じぃっと俺の方を見つめているだけだ。反省の意すら伺えない。
「だいたいな、こんな糞みたいなコーヒーを入れる神経がどうかしてるんだよ。腐った飲み物出すやつにマシなもん書けるわけねーじゃねーか！！」
一息で言ってやった。言い終わってから、肩で息を整えている俺にむかって、伊井筋はやっと口を開いた。

「……そんなに不味かったですか？」
「さっきからそういってるじゃねーか。耳も遠いのか？　あ？」
「それは申し訳ないことしましたね。すいません。私が飲まずにおだししたばっかりに……山辺さんの言いたいことはわかりましたが、残念ながら先日お渡ししたそのプロットは私が書いたものじゃないんです」
（は？）
「序盤の悪魔と地縛霊の話は私が書いたものなのですが、そのダンスパーティーなどの話は私のある知人から伺った話でして」
「なにいって……」
「マイムマイムって知ってます？　フォークダンスですよ。あのイスラエルの民謡の……それを踊ったって言ってたんですよ。場所はたしか……」
「へ、は？」
「ああ、そのコーヒーを入れたのもその知人でして、名を、」
俺はどうにか少女の言葉を遮ろうと笑い声を必死に上げる。
「はっはっはっは。面白い冗談ですな。ふふ、はは。その妄想力がクソ小説を作るエネルギーになっていると。ふふ、はははははは。こりゃ傑作だ。ヒヒヒ」
「いや、実は……」
「まだ何か？　何もないのだったらこれで御暇します。クソ不味いコーヒーを飲まされて、プロットも変更しようとしない。あまつさえプロットも人の知恵を借りたものだときた。貧困な想像力をお持ちの大先生とは話したくありません。では……」
「いや、実は最初のプロットは本当の話でして、悪魔と霊はいるんですよ」
「なにを馬鹿な」
「すでに霊はこの部屋に立ってます。もうそろそろ悪魔もこの場所にくる頃でしょう」
そう言って、少女は指をパチンと鳴らす。

俺は、鞄を掴んで立ち上がる。冗談じゃない。こんな気がふれてるヤツと話していられるか。空想は大概にしろ。
そのとき、ガラステーブルに置かれていた妖精のぬいぐるみがガタガタと動きだした。
「……な、なんの冗談です？　何か仕掛けでも……」
少女は笑って答えない。
妖精はひとりでに動き出す。ぎこちない動作で両腕を広げ、足を交差させはじめる。
その動きは、まさにマイムマイ……
「可愛いでしょう？」
目を見開いて体を固めている俺に少女は楽しそうに言った。
「その人形も、知人が作ったものでして。よく出来てるでしょう？
手先が器用なんですよ」
「俺は霊なんか信じない。そんなのがあってたまるか！！」
「じゃあ後ろ向いてみてくださいよ」
反射的に後ろを振り向いてしまう。
……だが、後ろには誰もいやしなかった。入口と通じているドアがあるだけだ。
俺は素っ頓狂な声で叫んだ。
「ははは。そんなことあるはずがないじゃないか。いいか？　一恵はいい思いをしたんだ。そりゃあ魔がさして山に置き去りにしたさ。あいつの作った弁当を放り投げて言いたいこともいってな。だが、あそこは山奥ってほど山奥でもなかったじゃないか。歩いて帰って来れる場所だったはずだっ！！」
そうだ。あいつがその後どうなったか知らんが、歩いて帰って今も不味い飯を作ってるはずなんだ。
入口のドアがきぃと音をたて、ゆっくり開く。
「か、一恵はきっとあのことなんて忘れてるはずさっ！！　だいたいなぁあいつが元はといえば……」
ドアの奥から、毛むくじゃらの大きな手のひらが現れる。

「あ、悪魔なんているわけないだろうが！！　ど、どどどど……」
右肩に何かが乗った。
俺はゆっくりと首を右に向ける。
そこには妖精のぬいぐるみが……俺の目を見つめてケタケタ笑っていた。
今度は頬にふさふさした何がが触れる。それは毛むくじゃらの手だった。
手の持ち主を見上げると、大女が楽しそうにくつくつ笑っていた。
耳元で声がする。それは、少女の声だった。
……いや、少女の声なのか？
「ごめんなさい……わたし、料理が下手で……」
俺は意識を失った。

3

妖精のぬいぐるみをガラステーブルにぽんと置いたハルは、ひとしきり大笑いをし終えて、ため息をついた。
（いきなしお願いがあるって言われたから、その通りにしたけど……）
笑った後にやってきた罪悪感をひしひしと感じながら、ゆったりと椅子に座りお茶をすすっている少女をむいて、きっと睨む。
「あのねー！！　事務所につくなり手を合わせてお願いし始めたから、言ったとおりにやったけど、どういうことなのか説明してよね！！」
少女は目をつむって、美味しそうにお茶をすすり続ける。
「クーの上司っていうから、もっとマシな人かと思ったけど……これじゃぁどっちもどっちだよ」
はあ、とため息とついて、項垂れる。
当の連れてきた本人であるクリフは、失神した山辺を抱えて部屋を出たっきり戻ってこない。抱えるときに山辺のうちポケットをま

さぐっていたから、事務所の下にある車に乗せるつもりらしい。
それはいいとして、この一連の騒ぎはなんだったのか、ハルはイマイチ上手くつかめなかった。
やっとお茶を飲み終わったのか、少女はテーブルに湯のみを置いて、首をかしげながらハルのほうを向いた。
「あれ？　ノリノリでやっていたと思ったんですが……違ったんですか？」
「あ……当たり前でしょー！！　ドッキリ大成功っていう看板も見当たらないし、そもそも驚かした人の素性すら知らないんだからっ！！」
「ああ……そうでしたか。私、教えてなかったですよね」
銀色の髪をぽりぽりと掻いて、舌を見せる。
「もーなんなのこの人……」
「私は伊井筋桐真と申します」
「知ってるってば。大窓にシールででかでかと書いてあるし」
「それで神をやってます」
「知ってるってば……え？」
「嘘ですけど。ふふ」
調子が狂いっぱなしのハルは、目の前の少女が何ものか推測することすら止めた。面倒すぎると感じたハルは諦めて、さっきまで山辺が座っていた椅子に腰を落ち着かせた。
「じゃあ自己紹介なんかいーや。どうせ伊井筋さんとクーがやってることなんて一口では説明できないんでしょ？」
「桐真でいいです」
「んじゃあキリマ。今回の騒動の真相は嘘偽りなく教えてよ。ぼく自信が驚かせちゃったんだ。加担した事件のあらましを知らないままハイ終了は胸くそ悪いよ」
少女は空になった湯のみの縁を指先でなぞって答えた。
「人に頼まれて、今回のドッキリを企画しました」
「そーだよね。やっぱドッキリだよね。山辺さんの言ってた一恵さ

んだったっけ？　それらしい霊も見当たらなかったし、ぬいぐるみを動かしたのはぼく。ドアを開けて出てきたのはクーだもん。で、どうしてドッキリなんか仕掛けたの？」
「山辺という男は、本当にセンスのある敏腕の編集者らしいのですが、どうも女遊びがすぎるみたいでしてね。結婚を控えている今、気持ちを入れ替えてもらうためにと、お願いされたのです」
「ほほー女の敵ってやつだ」
「はい」
「んで、誰から頼まれたの？　その結婚相手？」
「……４人居ます」
「ひょえ……」
あ、呆れた。４人からドッキリを仕掛けて欲しいと頼まれるって……よほど酷かったのだろう。伊井筋は、前髪をいじりながら答え始めた。
「一人は懇意にしていただいてる女性編集者の水野さん。彼女には少し手伝ってもらいました。社内で女絡みの悪い噂が流れていると知って、彼を助けたかったみたいです。二人目は滝沢という山辺の同僚。今、クリフが彼がくるのを待っています」
「そうなんだ。山辺さんを回収しに？　健気だね」
「依頼されたときに、何度も山辺のことをかばってましたよ。悪いやつじゃないんだと」
「じゃあなんで依頼なんて」
「三人目の……いや実質一人目ですが、山辺との婚約を控えている女性が声優をやってまして、関わりのあった滝沢に相談したらしいです。それで、仕方なく……と言ってましたよ」
「水野さん、滝沢さん、結婚相手……それじゃあもう一人は？」
「もちろん一恵さんです。といっても、無理やり協力してもらったのですが」
ハルはそれを聞いて、手をぽんと叩いた。
「あーだからあんなに怖がってたんだ。ただ人形が動いて、クマの

手袋を付けたクーが出てきただけなのに、尋常じゃない怖がりようだったもんね」
「そういうことです。まあ、最後のほうでは一恵さんもノリノリだったのですが」
「ってことはこの妖精って……ほんとうに」
「そうですよ。一恵さんの手作りの人形です」
「ひょえー……」
女の恨みは恐ろしい。ハルはパーカーのフードを深くかぶり直し、首をふった。
伊井筋はそれを見て、微笑んだ。
「霊なんて、めったに居ませんし、居ても悪さなんてほとんどしません。あなたの名前は？」
「ハルだよ」
「そう、ハルちゃんはこの街で一体でも霊を見かけましたか？」
「……ううん。見なかった。世界で一人ぼっちになった気分だった」
伊井筋は立ち上がり、ハルの頭をぽんと叩いた。
「でも、一人ぼっちじゃない。一人にしないために私たちが居ます。ね？」
「うん……」
「私たちは霊が見えます。触れることも出来るし、話すこともできる。だから、霊を癒すこともできる。何か、悩みがあるんでしょう？」
「ぼ、ぼく……」
そのとき、クリフはドアを開けて事務所に入ってきた。
恥ずかしくなったハルは、立ち上がりわーわーわめいて誤魔化すことにする。伊井筋はちっと舌打ちをして、クリフをみやった。
「オーナー。滝沢さんが着いたので、受け渡しした。ん？　どうしたんだ、その顔」
「役たたずもここまでくると、困りものですね」
「やっ……くたたず……」

「霊を消すしか能のない木偶の坊なんですから、空気ぐらいよんでください」
「く、くうき？」
「はあ……もうちょっとでハルちゃんの望みを聞くことが出来たのに」
「そ！　それは本当かハル！！」
ハルはごにょごにょと言葉を濁して一人ごちる。
「……クー、助かったよ」
「ん？」
ぽかんと口を開けたままつっ立っているクリフにむけて、心の中でありがとうと重ねてつぶやく。ハルは、間抜けな顔をしているクリフを尻目に、伊井筋に文句を言うことにした。
「危うく騙されるとこだった！！　言っちゃうとこだったよホント！！」
「なぜ望みを言うのが嫌なんですか？　あ、クリフお茶」
クリフは釈然としなかったようで首をかしげたが、お盆を持ち、給湯室に消えていった。
「望みを叶えるといっているのに、なぜそうもハルちゃんは私たちの好意を無駄にするんです」
「なっ……」
「普通は、嬉しがって飛びついてくるものだと思うのですが……」
「そ、そりゃあ助けてもらえるなら助けて欲しいよ。　けどね、信用ならない人には話したくないの。いきなり現れて、叶えてやるっていったって、誰が信じるかっつーの」
「……自分が浮遊霊ってこと分かってて言ってるんですか？」
「うっ……」
「難しいことを一から十まで説明しても、ハルちゃんには理解不能だと思うのですが」
「それ、ひょっとしてぼくのこと馬鹿にしてるーっ！？」
伊井筋は、違うという意味をこめ首を横に振った。

「そういう意味ではなくて、本当に理解不能だと思うのです。それに、霊にとっては酷い話ですから」
「ど、どんな話でも信じてやろうじゃん。あのねー、知っているのに言わないことが一番酷いんだよ。どんな酷い真実でも、知らないままで生きているほうが辛いじゃんか」
「……それ本気で言ってるんですか？」
「ぎくっ……」
「はあ。口でぎくっていう人、始めて見ましたよ」
「始めてで悪かったなー。とにかく教えて欲しいの。どうしてぼくが浮遊霊になったのか。キリマたちは何者なのか。全部ぜーんぶひっくるめて教えてよ！！」
「いいですよ。その代わり、ハルちゃんのことを教えてくださいね」
「わ、わかったよ……」
さっきとはうって変わってちょうどいいタイミングで給湯室からクリフが出てくる。伊井筋はそれを横目で確認し、ハルの目の前で小指を立てる。
「約束しましょう。絶対に私は嘘を付きません。その代わり……」
ハルは伊井筋のアクアマリンいろした碧眼を見つめ、喉を鳴らした。張り詰めた空気が空間に漂っている。
「う、うん。誓ってもいい。こっちだって絶対嘘つかないもん」
そういって伊井筋の立てた小指に自分の小指を絡ませる。
「なんの話だ？　はい、お茶」
やっぱり空気の読めない悪魔は、一人眉をひそめていた。

4　ハルが聞かされる霊というもの

「まず、霊というものの説明からしましょうか」
湯気の立ち上る湯のみをコトリとお盆に戻し、ふうと息をつく。
「普通の人は死ねば――人によりけりですが――消えてなくなります。それを怖がった人々が、死後の世界を妄想し、作り上げたのが

『霊』という存在です。ここまではいいですか？」
ハルはうんうんと頷く。聞いたことがある。
死んで無に帰すことを極端に恐れた昔の人々は、死んでも自我を持ち続けることを望み、霊という存在を作り出した。ただそれだけの存在だったのだけど、その霊という概念はとても使い勝手がよかった。常識で判断出来ない物事に霊を当てはめることで、超常現象を簡単に説明することが可能になったのだ。
だが、そのスーパーナチュラルな現象も今では科学的に否定することが出来る世の中になった。超常現象は科学によって否定されてしまった。
「その話なら聞いたことあるよ。だからぼくも生きてたときは霊なんか居ないって思ってたし」
だが、霊なんかいない世界のはずなのに、ハルは確かにこの世界に存在する。
「……でもぼくは浮遊霊になった。ということは霊は存在する」
「そうですね。本来ならば居るはずのない存在が、人々がいたらいいという妄想が織り成すことによって誕生したのが霊という存在です」
「ふむふむ」
「例えば……これは実際にいた地縛霊の話ですが……彼女は、生前身に宿した子供を堕胎してしまい、失意のうちに神社で首をくくります。そして地縛霊となったわけですが、彼女はどうして霊となってしまったのか、ハルちゃんはわかりますか？」
「ぜんぜんわかんない」
「少しは考えてくださいよ」
「うーん……誰かがそんな存在が居たらいいと願ったから？」
「ハルちゃん頭いいですね。その通りです。存在し苦悩し続けて欲しいという願いを、誰かから受けたからです。この女性の場合は、産まれなかった子供ですね。……つまり、他人の持つ強力な邪念によって、霊は誕生する。ここまではいいですか？」

「うん。ってことはぼくも同じ、誰かの強い邪念でこの世界に誕生したってこと？」
「そうです。ですが誕生したといっても、生きている人々に死亡したと認識されれば現実世界では生きていけません。もちろん生命活動だって停止し、動いていたはずの体は火に焼かれたり、土に埋められたり、鳥に食べられてしまい形がなくなってしまいます。ですから、その現実世界とは別の世界が用意されました。それが反転世界です」
「あ、それクーが言ってたやつだ」
クリフは、ハルの隣で缶コーヒーをすすっていた。外にハネた毛先をいじりながら、そんな話をしたっけ、なんてとぼけている。
「クリフに聞いたんですか。この図体だけは大きい役たたずの説明では、ちっともわからなかったでしょう」
「な……」
「うん。クーって口下手だから」
「よく知ってますね」
「お前らな……」
伊井筋は楽しそうに笑って、顰め面しているクリフのほうを向く。
「実は、このクリフも霊みたいなものなんです」
「え？　だって普通の人には見えてたじゃん。ほ、ほら山辺さんだってクーのクマの手を見てから、クーの顔を見上げてたし……」
「はい。ですから、霊みたいなもの、といいました」
「それってどういうこと？」
「その説明の前に、反転世界のことから説明しましょう。なに、追い追い分かってきます」
ハルはこくりと頷いた。

5　ハルが聞かされる反転世界

「反転世界というのは、人が考えた妄想と現実の中間にある曖昧な

世界です。ハルちゃんはきっと出来ることと出来ないことを試したとは思うのですが……」
「そうだよ。物を持つことは出来るけど、食べることや飲むことは出来ない。痛みなんかの五感はちゃんとある。けど空を飛んだり壁をすり抜けることは出来ない。……一番きつかったのは、人間にはぼくの姿は見れないし、人間からはぼくを触れることができない」
「……出来ることは普通の現実と変わりなく、出来ないことは主に人と繋がること。違いませんか？」
「まるで繋がらないパソコンのようって思ったかな」
「全部あなたを苦しめるためのルールです」
「え！？」
「誰かが『お前は一生苦しめばいいんだ』と望んでできたのが反転世界です。まあ、そう簡単には反転世界で霊として誕生はしませんし、ただの邪念では人間の形を保ち続けることも困難ですから、あっという間に消えてしまいますけど……」
「でもぼくはこうしてちゃんと人間の格好をしているよ？」
「……それは」
伊井筋は少し言葉に詰まった。ハルは目の前の少女の様子をみて、身構える。何か良くないことを言おうとしているに違いない、と思ったのだ。
「ハルちゃんが一番、自分自身が苦しむのを望んでいたからです」
そう言い終えてから、伊井筋は目を伏せる。
「心あたりがあるでしょう？　その自分自身を責め立てる邪念が、霊を霊たらしめているものなのです。……反転世界の掟は『他人と自分』の悪意で出来てます。人という存在が苦しむ全ての要素を詰め込み、苦しませ続けます」
「……」
ハルはパーカーフードの前端をつまんでを深く深くかぶり直す。
「霊には酷な話だと言ったでしょう。だからどの霊にも真実は話さなかったんですが……」

クリフはハルの膝下に手を伸ばし、ハルの手を握った。
「大丈夫。私たちがいる。心配するな。頭を空っぽにしていればいいんだ」
それでもやっぱり人間の悪意は体にこたえる。ハルはクリフの手をぎゅっと握り返す。
「……続きを話していいですか？」
「うん……」
「ふう」
伊井筋はため息をついて、銀色の後ろ髪を掻いた。そして長いあいだ、ガラステーブルに乗っている美少女フィギュアを眺めていた。

6　天国と地獄――神の正体

少女がおもむろに口を開いて語りはじめるまで、まるで人が死んだような沈黙がこの空間を支配していた。
「死後の世界なんていうものは、実は存在しないんです」
やっと語りだした伊井筋を、ハルは顔をあげて見つめる。
「天国とか、地獄とかってやつ？」
「そうそう。いうなればあなたの存在する反転世界が地獄というものですね。悪意だけで作り上げられ、苦しみ続ける世界。その逆に、天国は全く存在しない」
「なんで天国とか天使はいないの？」
「……人間の善の気持ちというのは、束になっても世界を作るような強大なエネルギーにならないんですよ。……ときにハルちゃん。人は、してあげたことならいくらでも覚えています。けれど、されたことはさっぱり忘れてしまいがちです。それは何故だかわかりますか？」
「……わかんない」
「何かから救われるために人は他人に尽くしているからです。宗教なんかもそうです。自分のために、自分の悪意を否定するために生

き続けている」
　ハルはその言葉を聞いて立ち上がる。
「そんなことない！！　そりゃ優しくされたいな……とは思うけど、ぼくだって皆に優しくしたい！！　人を助けたいし、守りってあげたい！！　なんでそんなこと言うのさ……」
　伊井筋は目を細め、ハルを見た。ハルは俯いてしまう。
「ハルちゃんっていい子なんですね」
「そんなことないよ。優しくするたびに余計なお世話って言われて……それで……」
　ハルはクリフのほうを見た。
「怖かった。人間は心の奥底で何を考えているか分からないんだって。だから、信用なんかしないほうがいいんだって何度も思ったよ。けど！！」
　ハルの目元から涙が溢れてくる。
「……そんなのって悲しすぎるよ」
　そんなハルを見て、伊井筋は微笑む。
「いいんですよ。それが、良心というものです。どうすればあの人が嬉しいと思うのだろう……と考えることが出来る。そんな人には神がついてます」
「……」
「その良心こそが神の正体です」
「……それってどういういみ？」
「ハルちゃんには神がちゃんと居る。だから、大丈夫。何も怖がることなんかないという意味です。いいですか？　霊というものは人々が作り出したもの。反転世界もそう。だったら、神だって人が作り出したもので当然でしょう。ね？」
「そうなの？」
　ハルは鼻水をすすって、少し考えてみた。けれど、やっぱり目の前の少女の言っていることがあまり上手く理解出来なかった。
　伊井筋が念を押して「理解できないだろう」と言っていたことが

悔しかったので、ハルは取り敢えず分かっているフリをすることにした。
伊井筋は微笑んだまま、言葉を繋ぐ。
「……そんな頑張り屋だけど、上手く消えることができずに、人に責められ自分を責めて、反転世界に誕生した霊を消滅させるのが、クリフと私の仕事です」
「キリマたちは何者なの……？」
ハルはごくりと喉を鳴らす。一体、そんな摩訶不思議な世界に干渉出来る存在である銀髪碧眼の少女と軍人のような出で立ちの大女のもつ目的とは、なんなのだろうか。
少女はすっと立ち上がり握りこぶしを振り上げた。青い瞳が輝き、銀髪をふぁさっと揺らす。口元をきっと結んだと思えば、ぴったりと閉じた唇を大きく開いて、叫び出した。
「私たちのことを……人呼んでこう言います……冥土神官少女ハーデス・プリーストと！！」

7

時計がチクタクと鳴る。ハルはぽかんと口を開くしかなかった。
「あれ？」
伊井筋はハルの反応の薄さに戸惑いを隠せない様子で、おろおろとその場を取り繕おうとする。
「ハルちゃん！！　聞いてましたか？　冥土神官少女ハーデス・プリーストですよ！！」
「え、何？　もう一回」
「冥土神官少女ハーデス・プリーストですよ！！」
「え？」
「冥土神官少女ハーデス・プリーストですよ！！　ほら、ハルちゃん、もう一度言いますから絶対に覚えて――」
ハルは急かされて仕方なく、言うのも恥ずかしいなんか凄い名前

を口に出す。
「冥土神官少女ハーデス・プリーストでしょ！！　覚えたよ！！　覚えちゃったよチクショー！！」
　伊井筋は胸をはって、そうです、と答える。
「いやあ、結構悩んだんです。幽霊救助隊第６小隊とか、ファラオに仕えしものとか、深淵に佇む残酷な魔女とか……それでたまたま深夜に放映されていた魔法少女のアニメをみて、これだと思いました。どうです？　かなりいいセンいってると思うのですが……」
　クリフは額に手を当てて、恥ずかしさのあまり俯いている。
「ねえ、キリマ……クーが」
　ハルの声は伊井筋の耳には届かない。
「ハルちゃんも好きでしょう？　ほら、アニメとか。小学生とか中学生とかには受けると思うんですよ。プリーストっていう言葉も、今やネットのＲＰＧゲームでは主流の職業のようですし……なんだかこう、癒すって感じじゃないですか。ああ、クリフには相談してなかったんですよね。驚かせようと思って。ねえどうです？　クリフがよければ、看板を作って、入口のほうにでも置こうと思ってるのですが……」
「えっ、クーにも言ってなかったの？　そしたら誰がキリマたちのことをハーデスなんちゃらって呼んでるの？」
「で、ですね？　イメージキャラクターも描いてみたんですよ。やっぱり烏帽子と笏は欠かせないですよね。服装は着物……としたいところですが、今のご時世露出度の低めな服は受けが良くないみたいなので、泣く泣く脇を見せるような服にしてですね……そ！！　それでここが一番格好いいところなんです。なんと笏が変形して、魔物を呼び出す召喚杖になるんですよ。そして……」
　（やっぱり着物はキリマの趣味なのね。着物、キリマにすっごく似合ってないと思ってたんだよね……。っていうか冥土神官少女で着物っていう選択肢は有り得なくね？　メイド服とか、僧侶の格好ならまだしも……）

……言いたいことは少なからずあったが、こっちが話に乗ってしまうと朝まで語り続けそうなので、ハルは大声を上げて止めることにする。このままではクリフがあんまりだ。
「わーかった！！　わかったよ。もう」
「ハルちゃんもやはり女の子ですね。ふふ、羨ましいでしょう」
「ちーがーうって」
「えっ」
「いや、いやいやいや、うん。それはとっても羨ましいなって。ホント。ホントだよ？　ちょ……目を涙で滲ませないでー！！　ぼくが悪かったって」
「くすん」
「あーほんとにめんどくさっ……。分かった。わかりました。二人の目的を聞いたぼくが馬鹿だったよ。もっと真剣に話をしてくれると思ったんだけど……」
「私は真剣に話をしているのですが……」
ハルは伊井筋の微笑む姿をみて、やれやれと頭をふった。

8

「じゃあさ、二人はぼくを助けてくれるっていったよね？」
「はい。もちろんです」
「どうして？　何のメリットがあってそんな慈善事業みたいなことしてるの？　きっと、霊なんか消したってキリマたちには何もならないんでしょ？　霊達が消えて無くなっても現実世界にはなんら関係ないじゃんか」
「……物をつかむことが出来ると、ハルちゃんは言ってましたよね」
「うん。そうだけど」
「霊たちには分からないかもしれませんが……霊の手のひらや霊の付けている服などで物を包むと、反転世界に消えてなくなってしまいます。たとえば……ハルちゃん、何か小さくて手で掴めるもの、

持ってますか？」
　ハルはそう言われてポケットの中の小石を思い出す。ポケットから小石を取り出して、ガラステーブルにコトリと置く。
「これ」
　置かれた小石をつまみあげて、伊井筋はぎゅっと握る。
「もし、この小石を霊がこう握ったら……現実世界には存在しないものになります。ですが……」
　握った手を開いて見せる。
「こうすれば、現実世界に現れます。このルールを悪用する霊が登場しはじめました。こんなふうに現実世界に影響が出てしまう霊の存在を消すことがクリフの仕事です」
「悪用……」
「神かくし……なんていう子供の誘拐事件の数件程度は、反転世界に存在する霊が起こしたことです。子供が多いのは、服などに包むことができる小さなものでなければいけないからですね」
　ハルはクリフに言われた言葉を思い出していた。
（……霊は存在しちゃいけない）
「……先ほど、神も霊も反転世界も人が作り出したものだと言いましたよね？」
「うん。人のそうすればよかったという願いによって作られたんでしょ？」
「そうです。ですから、『悪魔』というのも、人によって作られた存在です。もともと、反転世界に溜まり続ける霊を周期的に排除するプログラムのような存在がいたのです。その役割を受け継いだのがクリフです」
　ハルはクリフのほうを見た。クリフはただ真っ直ぐを見つめて、空になった缶を手の中で弄んでいるだけだ。
　何も言おうとしないクリフをちらとみて、伊井筋はハルに言う。
「ですからクリフは悪魔のような人間なんです。だから、霊のようなもの、と言ったのです。プログラムを受け継いだ人間。これがク

リフの正体です」
伊井筋の簡素な説明に面くらう。
「えーそれだけ？　なんでそんな力があるのかとか、もっと聞きたいことあるのに」
一生懸命に抗議するハルをみて、伊井筋はため息をつく。
「クリフはもともとただの女軍人でした。そしてせっせと霊を消している前任の悪魔と出会い、力と仕事を引き継ぎます。そんな感じの話です。はいおしまい」
「うぇー！？　もっと、ほら、クーのいってた息子とかは？　その出会った悪魔っていうのは？」
「聞きたいことが山ほどなのはいいですが、これ以上は本人に聞いてください」
ぴしゃりと話を締めてしまった。
「なにそれ……そしたらキリマはどうなのさ。キリマの正体は？　クーは信じられるけど、キリマの素性を知らないと納得できないなあ」
伊井筋は呆れ顔でハルを見る。だが、どれだけ呆れたとしてもハルは少しも引かないであろうと悟ったのか、仕方なさげに話を続けた。
「はあ……私はもともと山奥の小さな集落で双子の妹と巫女をしてました。そしてクリフと出会い、ここでこうして霊たちを消すクリフの仕事を手伝っています。はい、以上です。ドラマチックな要素は一つもないので、語るほどのものでもない話です」
「ふーん。なるほど。キリマも大変なんだね」
「ハルちゃんが望みを言ってくれさえすれば、もっと楽なんですけど」
ぼそりと言った伊井筋の言葉に聞こえなかったふりをして、ハルは質問を重ねる。
「で、クーとキリマのできることってどんなこと？」
伊井筋は頭をふって、面倒臭そうに答えた。

「ハルちゃんが知っていてもあまり意味がないですよ？」
「それでも聞きたい！！　ぼくを消すのがクーの仕事。でしょ？」
「はい」
「そのクーに助けてもらって仕事を手伝っているのがキリマ。だから、ぼくの目の前に現れて、ぼくを消そうとしているのはわかったよ。ここまでオーケー？」
「おっけぃですよ」
「でもぼくは、だからといってそうやすやすと消えたくない。ぼくから望みを言わないと消すことができないんでしょ？　なら望みを話すっていう条件の代わりに、もっともーっとキリマたちのこと聞きたいじゃん。面白いことだって出来るんでしょ？」
「面白いことかどうかはわかりませんが……クリフはご存知の通り、唯一霊を消すことが出来ます」
「でも、それだけじゃ……」
伊井筋はハルの目をじぃっと見つめて、唐突に瞼を閉じると、ハルの隣に座っていたクリフに視線を移す。
ハルは伊井筋の視線の移動から、クリフに頭を向けたが、クリフはただぼんやりと空の一点を見つめるだけだった。
伊井筋はクリフのアクションが何も無いことを知ると、淡白にこう告げた。
「……実は、霊の望みなんて聞かなくたって無理やり消すことが出来ます」
その言葉はハルの頭をごんと鳴らすには十分だった。
「……う、そ」
「嘘は言わないと約束したじゃないですか。……ですから、反転世界の話ですとか、私たちの目的や能力のことを知らなくても、もっと言いますと、ハルちゃんの望みなんて叶えなくともなんら彼女の仕事に支障はないんです」
ハルはクリフのほうを見る。クリフは今も、空間のどこか一点だけを見つめて動かない。

「望みを聞く必要ないんなら……なんでぼくを今すぐ消さないの？
ねえ、クー」
クリフは聞こえていないふりをして、空き缶をテーブルに置くと、おもむろに立ち上がる。
「なんとかいってよ」
ハルの言葉に一切返答せず、ドアに歩み寄ってドアノブに手をかけてしまう。
「どこ行くの？」
そのままクリフは部屋を出てしまった。
クリフを見送ると、彼女の無言の反発を代弁するように伊井筋がハルに言葉をかける。
「……ハルちゃんと同じです。彼女もまた、お人好しでお節介焼きなんですよ」
伊井筋の言葉が虚しく空間に溶けて、消えていった。

9

クリフが消えた部屋は心なしかとても広く感じられた。
ハルはやっと、クリフの心の断片をつかんだような気持ちだった。きっと、クリフは霊をただ消してしまうことはしたくなかった。だから、聞かなくてもいいお願いを必死になって聞き出して、それを叶えさせることで少しでも霊が満足して消えることを望んでいたのだろう。
「ぼくってやっぱり、バカだなあ」
ぽつりとハルは呟く。その呟きは伊井筋の耳にちゃんと届いていた。
「気に病むことはないですよ。私たち二人が勝手にやってることですから」
「うん……」
なんてお人好しなのだろう。

（霊に優しくできる存在なんて、そうそういないのに、ぼくはそのクーの心を……）
伊井筋は、立ち上がり、向かい側に座っているハルの頭をぽんと叩く。
「クリフを追いかけなくてよかったのですか？」
それを聞いて、ハルは頭をふる。
「出来るわけないじゃん。……ねえ、キリマ？」
「なんでしょう」
「ぼくっていっつもそうなんだ。聞かれたくないことをズケズケと聞いたりしてさ、人の心を傷付けてばっか」
「……」
「人の気持ちを、ぼくは考えることができないんだ。知りたいって思うと、とことん最後まで知りたくなっちゃう」
「良くあることです。それは、別に悪いことではないですよ。でも、人には言いたくないことを沢山持っています。わかりますね？」
ハルは拳を握り締めた。
「お願いを今言っていい？」
「はい。どうぞ」
ハルは顔を上げて、伊井筋の瞳を覗く。その瞳は、綺麗な青で彩られていた。
「ぼくさ、いますぐクーに消して欲しいな」
その碧眼が瞼で遮られる。
「今考えた願いですか？」
目をしばたたかせ、呆れ返る伊井筋を見て、ハルは「本気だよ」と念を押す。
「……悪い？　ぼく、もういいよ。これ以上クーに付き纏うのは、もういや。でも、ぼくがどれだけ逃げたって、クーは仕事だから、ぼくを消しに何時までも、何処までも探すんでしょ。ぼくはもうクーを困らせたくない」
「……」

「ねえ、クーはどうやって霊を消すのかな」
「はあ……。クリフに聞いてください。いま、携帯で連絡しますから」
伊井筋は大窓の前に置かれている木目調の長机に向かい、引き出しを開ける。
日本人形のような格好の少女が、携帯電話を耳に当てている姿を想像して、そのちぐはぐな光景にハルはくつくつと笑う。それから冷静になった後、自分を消えた後のことを考えた。
机に転がる小石を見て、口元をきっと強く結ぶ。
（大丈夫。お百度参りだってしたんだし、けーちゃんだって、きっとすぐ正気を取り戻す。嫌なこと全て忘れて、もとの優しいけーちゃんに戻っているよ）
涙が目の前を霞ませる。霊が涙を流すってほんとうにおかしな話だ。けれど、ここはそういう世界なのだ。霊を悲しませるためだけの世界。そして、何も生まず、誰とも繋がれない一人ぼっちの世界。
でも、クリフという優しい悪魔がいる。それだけで、少しだけハルは救われた気持ちになるのを感じた。
伊井筋は、引き出しから黒一色の携帯電話を取り出し開く。二つ折りの携帯電話だったんだ、とハルは思った。
少女は開いた携帯電話を親指で操作する。彼女はこれからクリフに連絡をして、ここにやって来る。そしてクリフはハルを消す。
ごくりと喉が唾を飲む音がした。もちろんハルの喉が鳴った音だ。どうして、唾を飲み込んでしまうのだろうとハルは考える。
その途中、ハルは思わず声を出してしまっていた。
「ちょ……と待って」
伊井筋に向かって、ハルは待ったをかける。
（何を言うために？）
待ってと言われて、伊井筋は微笑んで応答する。
「はい。なんでしょう？」
その優しい声色を聞いて、ハルはやっぱりこのままでは消えれな

いと思ってしまった。それがいけないことだと分かっていても、この世界に誕生させられた自分は大切な使命を持って生まれたのではないだろうか、と思ってしまったのだ。
「そ、そう。連絡する前に、その前に一つだけ、お願いがあるの」
あくまでも冷静沈着に伊井筋は対応する。
「消して欲しいという願いの他にですか？」
その姿は、ハルは別に消えてもいい存在だ、と言わんばかりの冷徹さだった。
ハルは怯えながらも、後には引けない思いで、引き止めた理由を告げようと必死になる。
「う、うん……はは、やっぱりダメだよね。うん。そうだ。ははは」
（消えてしまう前に、ダメ元でけーちゃんのことをお願いしてみたらどうかな）
そんな、ついでのような気持ちがハルの中でぷくりと芽生え始めつつあった。
ハルにとっての一番大事なお願いは、お百度参りをするだけの意味を持つけーちゃんのことに他ならなかった。けれど、ハルは自身の手で救ってあげられたら、という気持ちが大きかったために、ここまで二人に聞かれても答える気にならなかったのだ。
伊井筋は開いた携帯をぱたんと閉じて、机の上にそっと置く。
「なんでも言ってください。きっと、私たちに出来ないことはほとんどありませんから」
そういって、にっこりと笑う。
「ほんと！？」
「ええ。反転世界のルールを破らなければ、なんだって出来ます。そのための私ですから」
片手でブイの字を作る伊井筋を見て、ハルは一瞬、本当に大丈夫だろうか、と疑ってしまった。だがダメで元々なのだと思い直し、思い切ってすべてのあらましを説明することにした。
いや、けーちゃんを助けるのであれば、すべてのあらましを知ら

なければきっと伊井筋は願いを叶えることができないだろう。
「今から話すこと、クーには内緒だよ」
「どうしてですか？」
「だって、クーには同情の目で見られたくないんだもん」
「……」
「ぼくは父さんを殺して、自殺した。それって世間的には不幸だし、とんでもないよね？　優しいクーが聞いたら、きっとぼくを可哀想な子だなって思っちゃう。そんなふうに、クーにだけは思って欲しくない。だから、絶対言わないって約束して。無理でも、誤魔化してよ」
（そう。ぼくは父親を殺し自殺した。瞼を閉じたとしたならその裏に……くっきりと殺害した光景が浮かび上がる。ぼくの体の隅々にその後遺傷は焼き付いている）
伊井筋はこくりと頷いて、長机の椅子を引き腰を下ろす。
「約束します。何があったって真相は彼女には話しません。ですが……」
言い淀んだ先に少女が言いたかった本心を、ハルはそれとなく受け取る。
「うん。クーに手伝って貰うことだってあるよね」
「申し訳ないですが、私のすることにクリフは欠かせない存在ですので……」
ハルは何度も頷き、伊井筋に微笑みかける。
「大丈夫。もちろん望みの内容はクーに話してもいい。クーに知られたくないのは、ぼくのことなんだ。ぼくが生きてたであろう世界はとても辛くて望み無い世界だった。それをもし優しい心をもつクーが知ったりしたら……ぼくまで辛くなっちゃう」
「……わかりました」
「大丈夫。大丈夫だよ。ぼくはたくさんクーに元気を貰った。ハンテンセカイとか、むつかしいことはぼくにはこれっぽっちもわからないけど、たった一つだけ言えるんだ」

「……」
「ぼくがこの世界に生まれたたった一つの理由。ぼくは、悩むために生まれてきたんだ。そして、そんなぼくのグチャグチャな悩みを解決するためにキリマたちは現れた」
伊井筋のブルーの瞳に吸い込まれないように、ハルは精一杯目を逸らしなけなしの抵抗する。
「ここまでキリマの話を聞いて、全部分かった。キリマは嘘なんか付いちゃいない。全て正解だよ。全部嘘であっても、少なくともぼくにとっては」
ハルは、テーブルに置いてある小石をじっと見つめる。
「ぼくは小石だ。そして、キリマは小石を握る人。違う？」
伊井筋はハルの次句を待たず、ハルに問いかける。
「……さあ、願いはなんでしょうか」
ハルは手を胸に当てて、ゆっくりと吐き出すようにいった。
「遠藤圭という人を助けて欲しいの。彼……ううん、ぼくのたった一人の親友がもう少しで取り返しのつかないことをしそうなんだ」

壁伝いＳＯＳ３　夢想と空想の曖昧な境目

6

僕の体が楽になるにつれ、三春姉ちゃんは笑顔を取り戻した。
僕はまた彼女を心配させてしまったようだ。けれど、これはもはや止めることのできない一種の病気だった。きっと、思い出したくない過去を思い出そうとするたび、体を守る抗体か何かが、頭を捻って痛めつけるのだろう。この疼痛は無防備な心を守る防壁のようなものだと、僕はうっすらと理解し始めていた。
悪性腫瘍である頭の中の虫と戦っているあいだ、僕は弱りきった思考力を必死に絞り、三春姉ちゃんに聞きたいことのあれこれを頭の中で整理していた。
三春姉ちゃんはきっと死んでいる。
そして彼女は二人いる。
一人は緑色のヘアゴムで髪を縛る僕のよく知る三春姉ちゃんで、もう一人はピンク色のヘアゴムで髪を縛る誰か。
また、この部屋は何処にも繋がっていない。入口も出口もない箱のような空間だ。
そして、その箱を作り上げたのはきっと僕である。
向き合いたくない事実に負けてしまい、現実から逃げてしまった僕が作り上げた理想世界。
では僕は何を彼女に質問すべきなのだろう。
もちろん、この箱から抜け出す方法だ。誰が望んだか知れない玩具箱の中から飛び出す魔法を僕は知りたくて止まないのだ。
ベッドから体を起こして、傍で僕の顔色を伺っている三春姉ちゃんを見る。彼女は、僕の視線に気づいて、口元をきつく結ぶと、机に置いてあった白い折り鶴を僕の手のひらに座らせた。
三春姉ちゃんは、目元を指先で拭い、痛々しい笑顔を作る。

「これでずいぶん楽になると思うから、絶対無理しないでね？」
僕は手渡された折り鶴をしばらく見つめる。
「これは僕を助けてくれるものなのかな」
「もぅ……当たり前じゃない。私のためにけーちゃんが折ってくれた鶴だよ？　この折り鶴で、私とけーちゃんは繋がってる。だから、けーちゃんを守ってくれるの。ふふ」
そうだ。僕は思い出した。病室の三階の光景を。
窓際の真っ白いシーツに覆われたベッドで横たわっていた彼女に、僕は折り鶴を届けた。彼女は手に取り、僕に向かって寂しそうな顔で言った。
……なんといった？
「……僕はどうすれば、この世界から抜け出すことが出来るのかな」
三春姉ちゃんは、戸惑って宙に視線をさ迷わせた。僕は彼女の手をそっと握ってやる。
「大丈夫。この折り鶴のおかげで、強くなれそうだから。まるで、欠けてしまった記憶の断片を、この折り鶴が埋めてくれているみたいだ」
「そう。よかったね、ケイちゃん」
「すべて三春姉ちゃんのおかげだ。なぜこのタイミングで僕の世界の捉え方が変わってしまったのかは分からない。もしかしたらそれは、この世界の出来事がきっかけではないのかもしれない。ただ、それとは関係なしに、僕はこの世界から抜け出したいんだ。そして、過去を取り戻したい」
「私が死んだ世界に戻りたいの？」
「三春姉ちゃんが死んだ世界に戻りたいわけじゃない。三春姉ちゃんのすべてを知っている世界に戻りたいんだ。僕と交わした約束を守ってくれるね？」
このままだと、ガスストーブがどれだけ部屋を温めても体中を侵食する恐怖に取り憑かれ凍死んでしまう。それが堪らなく嫌で寒々しい、と僕は思っているのだ。それも、大事に思っている彼女を疑

うことで、背筋を凍らせてしまうのならなおさら。
三春姉ちゃんは、しばらく項垂れていた。僕と目を合わせることが苦しくなってしまったのだろう。それでもいい。どれだけ苦しんでもいい。覚悟は出来ている。
「……守る。私の知っていること、すべて教える。だから、嫌わないで」
「なんで僕が嫌うの？」
彼女は、含み笑いをかくしかくし――少なくとも僕の目にはそう映った――こう答えた。
「ケイチャンをこの世界に永遠に閉じ込めたいから。逃したくないもん」
「そっか」
僕は立ち上がって、彼女の髪を力任せに引っ張った。引っ張られ横転した彼女は、鳥類が嘶いたときに聞こえる耳障りな奇声を上げた。手の中に残ったヘアゴムを見て、色を確認する。ヘアゴムの色はピンク色だった。
それでいい。
なるべく淡々と一連の暴行をこなしたつもりだったが、少し頭が痛んだのを感じて、手からこぼれ落ちた折り鶴を拾った。
「いったい、お前は誰なんだ。僕をどうしたいんだ」
彼女は体を起こそうともせず、寝転がったまま体を震わせて笑った。何が可笑しいのか理解に苦しんだ僕は、右足で何度も彼女を踏みつけた。加えてつま先で腹を蹴り飛ばし、踵を使って脇腹に体重を載せる。
「なぜ僕なんだ。僕が何をしたっていうんだ」
彼女はそれでも笑うのを止めず、それどころかもっと蹴ってくれと懇願し始めた。
「もっと、もっと、踏んで、ケイちゃん、もっと、もっと、気持ちいい、その調子、つま先で、あぁ、かかとで、イイ、イイぃいぃ……」

自分のしていることに現実味が持てなかった。それでも蹴ることを止める訳にはいかない。この女は、蹴られることを喜んでいるのだ。
「そう、ヌレちゃうっ！！　ふっ……ん、そう、やって、蹴っていたじゃない、『ぼく』を、毎日、倉庫の隅で」
ふいに、頭に光景が浮かび上がる。
真夜中、港の外れにある倉庫に忍び込み、ある人を痛めつけている光景。
二人で倉庫に忍び込みシャッターを下ろすと、そいつは裸足で逃げ出した。
本当に逃げ出したいと思っているわけではないと理解していた僕は、出来るだけ時間をとってそいつが倉庫のコンテナに隠れるのを舌を舐めずりながら待ってやる。
だいたい隅に逃げ込むのだ、とそんなあいつの趣向を知っている僕は、ゆっくりと探すふりをして、声をかける。
「どこに逃げ込んだ？」「逃げられないぞ」できるだけ大声がいい。そのほうがそいつは喜ぶのだ。もっというと、僕がコンテナを蹴って怒っている素振りを見せかけるような演出もあるとなおいい。
ある種の前戯を思う存分楽しんでから、目当ての倉庫の隅に歩み寄る。体を震わせて怖がるふりをするそいつは、痛めつけられることを雌犬のように喜んでいた。口からヨダレを垂らし、そのヨダレは倉庫の高窓から差し込む光の筋を反射してテカリ、その唇のあいだから嬌声を上げ、体をくゆらせ、もっと蹴ってくれと懇願していた。
僕たち二人のあいだには、道具は必要なかった。足や、拳で、そいつの体に傷をつける。それが儀式の大切な規律でもあった。
「そう……マゾでケイちゃんの親友の、『ぼく』を、んっ」
僕の回想に浮かぶ光景の中で、そいつの顔がふっと倉庫から漏れる光に照らされる。そいつは、そうだ、親友の――
「――ハル……だ。そうだ、ハルだ。どうして、ぼくはハルを……

あんな真似……なぜ？」
「愛しているから殴るんだよね？　ぼくを愛しているならもっと殴って」
「違う……こんな愛があってたまるか！！」
右足を持ち上げて、悪夢の根源である女の喉元に狙いを定める。そのとき、蹴られるのを待ち詫びている女の着ている服装ががらりと変わっていることに気がついた。パジャマがセーラー服に代わり……いや、服装だけではない。体つきも華奢なものに変化している。
セーラー服の少女は、持ち上げた僕の足をつかんで、前髪に隠れている顔をさらけ出した。
「ぼくたちは、傷で繋がっているんだよ？　覚えていないの？」
少女の顔は醜く歪む。口元が下に垂れ、眉間に皺を寄せ、目尻から涙を流している。顔を作り出す全てのパーツが憎悪と寂寥感を含んだ曖昧で不気味な表情を作り出していた。涙のせいで揺らぐ瞳は僕を睨みつけているように見える。
紛れも無くハルの顔だった。
咎めるような視線。でも物欲しそうな瞳。それに耐えられなくなった僕は、窓側に目を逸らす。目を逸らした先には、今まで会話していた三春姉ちゃんの顔をした何かがいた。
「知りたいんじゃなかったの？　いくらけーちゃんでも、嘘を付くのは関心しないなぁ。お姉ちゃんがっくりです」
声の主に両の頬を力強くつかまれる。いつの間に窓際に移動していたのか。
足元からハルの声がする。
「ねぇ、もっと踏んでよ。もっとぼくの体に傷をつけてよ。それがぼくたちだけの絆でしょ？」
目の前から声がする。
「これが紛れもない現実だよ。現実逃避するのは、やめたほうがいいなーってお姉ちゃんは思うのです」
「はっ……はっ」

呼吸がまた苦しくなった。気管支に小さな塊が詰まったような、そう、小石が詰まったようなそんな途切れない痛みだ。どうやら頭の虫が起き出してしまったみたいだ。

チクチク。チクチク。

「はっ……はっ……はっ……」

「傷つけてよ……お願い。もう、待ちきれないの。ぼく――」

「私も、けーちゃんだったらいいよ？　好きなんでしょう？　人を蹴ったり殴ったりするの」

「ち、ちがっ」

――ごんごんごん。

突然に入口扉から、音が鳴り響く。今度は誰だ？　誰なんだ？

――けいちゃん。

かん高い声がする。母さんの声だった。いつも通りの耳障りで気分を悪くさせる声色だったが、このときばかりはその声色に感謝した。僕は助かった。助かったのだ。

「助けっ……て……」

この状況を少しでもいい方に変えてくれるならなんでもいい。とにかく、この二人をなんとか目の前から消してしまわないことには、いつか息の根を止められてしまう。

それに気がついたのか、三春姉ちゃんはじりじりと僕の頬から首筋へと、顎の曲線をなぞるように両手を下ろし始めた。ハルは足元からじんわり這い上がって、僕のズボンのベルトに手をかける。何をするつもりなんだ？　そんなのは決まっているんじゃぁないのか？

僕は知っている。僕はこの先を知っているのだ。

「苦しいって、実は気持ちいいんだよぅ？　首、締めてみよっか」

「けーちゃんの股間、触ってもいい？　まだ柔らかいのかなぁ」

「か、あ……さん」

――けいちゃん。

頼むからドアを今すぐ開いてここに来てくれ、とこの時ばかりは願わずにはいられなかった。頼むから、お願いだから……。

僕の願いを打ち消すように、悲しそうな声でドアの向うにいるであろう人はこういった。
――けいちゃんは、死ぬべきだって、お父さん怒っていましたよ。
……は？
かん高い声とは別の、野太い威圧的な声が聞こえてくる。
――圭。残念ながらお前は死ぬべきだ。
「そう……かも。お姉ちゃんは悲しい、けど、私も死ぬべきだと思うのです」
「三春姉ちゃんの言うとおりだよ？　死のう。ねぇ、死ぬべきだよ」
――お父さんが言うのなら、そのとおりですよ。死ぬべきだわ。
――圭は死ぬべきだ。
「死ぬべきだよぅ」
「死ぬべきだよね」
僕は死ぬべきなのだろうか。
死んで誰かに詫びるべきなのだろうか。
……誰に？
「いいや違う。僕はこのまま死ぬべきではない。それは確信しているんだ」
……何故なら、僕は生きるために生まれたからだ。
「もしかしたら僕は、自分では知らないうちに、この世界の隅で償いきれない罪を犯してしまったのかもしれない」
そう、例えば倉庫でハルを踏みつけた日々。
例えば、病室で三春姉ちゃんに言い放ってしまった言葉。
どれもこれもぼんやりとでしか思い浮かべることが出来ないけれど、現実にあったことだろう。そして、そのことで僕は責められている。
「そもそも僕は、どういった人生を歩んで誰と人生を共有していたのだろうか、なぜか記憶がほとんどない」
……そう、僕は過去を取り戻さなければならない。
「この状況に置かれて全員から後ろ指を指されたとしても、僕とい

う存在は大多数の青年たちの一人だと信じている」
過去に起きた出来事や生い立ちがなんであろうとも、今ここでこうして立っている僕はそんな過去になんら関係もない日々を送っている。学校に通学し、家に帰り夕食を食べ、与えられた部屋で眠る。父がいて母がいて姉がいる、そんな普通の家族たちに囲まれた高校生の一人なのだ。
……そう、そうだ。学校に通い、友人と談笑して、いつしか大人になる。そんな誰もが経験したであろう時を過ごしていく普通の高校生なんだ。
「薄れ揺らぐ記憶の中でも、映っているのは三春姉ちゃんばかり。まるで彼女に捕らえられ縛られた毎日を過ごしている」
もしかしたら僕は、知らない誰かを傷付けて生きてきたのかもしれない。
例えば学校に通う誰か、もしくは自分の（・・・）世界に住む全員。僕は生きることによって人を傷付けて来たのかもしれない。
目の前の三春姉ちゃんが言う。
「それが元で、誰かに記憶を消されてしまった」
足元のハルが言う。
「その一連の流れは納得の行く理由だと思う。誰かの手によって、僕は物一つ……いや、三春姉ちゃんのことしか知り得ない世界に迷い込んでしまった」
三春姉ちゃんかもしくはハルが、まるで僕の心の言葉を代弁するかのように言う。
「そうなると、僕が犯したかもしれない犯罪の数々は存在しないも当然になってしまう。果たしてそれは許されることなのだろうか」
誰かが言う。
「いや、許されるべきだ。何故なら犯した罪を知らないからだ」
「そしてまた、そんな有りもしない罪を許す存在などいないのだから」
「だってそうだろう？」

僕は一言も発していないのに、誰かが言葉を引継ぎ話は続く。
「現実に殺人犯が処刑されず生かされ独房で人生を終える姿を見て君たちは、それでも彼らは許されていると言えるだろうか」
「僕は、どんな罪を持っていても許す存在はいないと信じている」
「……いいや、そもそも罪なんてものは存在しないのだ。だから彼らが許される必要はない」
僕はこの不毛な議論を終わらせようと必死に叫び続ける。
――何を言ってるんだ。そんなことを言ったって意味はない。誰かを傷つければ誰かは悲しむ。そんなのただの詭弁だ！！　罪を認めずとも罰せられる。世界はそれで順調に動き続けているんだ。もう……頼むから止めてくれ。
叫びは遠くこだまして、まるで壁に阻まれて反射してしまったように耳に戻ってくる。僕の口にしか行き場のないような散り散りの叫びのつぶたちは、そのまま僕自身の心を攻撃する。
そんな一方通行の叫びに関係なく話は続く。
「僕は断言する。君たちが自認する罪を許す方法があるとしたら、罪を犯したものの反省の意しか他はない」
「つまり、存在しない罪を罪と認識する人を許すことが出来るのはまた自身の心なのである。罪を犯した人が反省の意を持って償う気持ちがあるならば……」
「自分自身の手でスプーンで眼球を掬っても、喉笛を伸びきった長爪で掻きむしっても、まったく正しいことなのであり、」
「他者はその犯罪者の自虐的行為を止める権利はない」
「そのことを裏付ける理由はもちろんある」
――やめ……
どれだけ懇願しても届かない。悪意にまみれた言葉たちは止まらない。
「人は死ぬべき理由は沢山持っているけども、」
「生きていい理由は一つももっていない」
「それこそが唯一であり最たる理由だ。思い浮かべて欲しい」

「君は、生きるべき理由を一つで思い浮かべることができるだろうか」
――もう、もうやめてくれ、やめてくれ……頼む。頼むから……。
「もしかしたら、死ぬべき理由ばかり思い浮かんでしまうのではなかろうか」
「……そんな可哀想な人を救う存在があるとしたら……」
「それは自分をこの世に産み落とした両親である」
――お願いだ。やめてくれ。頼む。お願いだ……。
「そう。両親こそが子供に生きていい理由を持たせてくれる」
「だけど、そうではない人を僕は知っている」
――はっ……はっ……
「親から虐待を受けていた子供たちである」
――もう、止めてくれ。止めてくれえええええ！！
「そんな生きる意味をもたない子供たちは何を持って生きていくのだろうか。まさか自分で生きる意味を探せとも言うのだろうか」
「馬鹿げてる。弱いものを傷付けて生きることしか自分を規定する術がない存在は、平穏な現実を確定づけるために抹消すべきなのだ」
「……そうだ、僕はそんな抹消すべき人にも最高のハッピーエンドを持たせるためにこうやって小説を書いてきたのだった」
「どれだけ醜悪でも、光のような道筋を描いて導くことで、彼らを明るい未来に登場させることができるのなら……」
「支離滅裂で矛盾だらけな世界でも、」
「全てに理由を付けて自己満足に浸る『仮面の世界』よりは、僅かでもマシだと信じて、小説を書き続けてきた」
「報われない恋でも、報われない理由の壁を粉々に破壊して、二人の手と手を繋げてやる」
「娘に思いが届かない父親も、ちょっとの優しさを伝えさせるエピソードを加えるだけで仲良くさせてあげる」
「そう、どれだけ辛い思いをしたってハッピーエンドで世界を締めることができる」

「そんな世界を変える力があるのは、主人公なんかじゃない、神様に他ならないんだ」
「だけど神は存在しない」
「そう、神は存在しない」
「だから、全てを他人のせいにしろ」
「他人のせいにしろ。努力するな」
「他人のせいにしろ。愛情を憎め」
「他人のせいにしろ。友情は存在しないのだから」
「自分を生んだ両親を殺せ」
「さもなくば自分が死ね」
「誰にも縋るな」
「自分の心に縋れ」
「他人から規定される世界」
「それこそが現実のあるべき姿だ」
「これが現実だ」
「考えろ」
「苦しめ」
「想像を枯らすな」
「創造を枯らすな」
——首がぎゅっと締められ、意識が鈍った。
僕は誰を信用すればいいのだろう。
いや、誰も信用してはならないだろう。
なぜなら、僕は——
ぱくぱく食道が開閉するのを楽しそうにみやっていた三春姉ちゃんが言った。
「ヒロイックに浸ってんじゃねーよばーか。お前は英雄にでもなったつもりか？」
足元から鋭い声が僕の耳に突き刺さる。
「けーちゃんはほんと馬鹿だな」
——どうして僕を虐めるんだ……僕は一体……。

首がきゅっという音をたて、幾重にも連なりあっていた耳鳴りが止んだ。
僕はとうとう意識を失った。

×××

○○新聞　１２月３１日
裂目町少年Ｋ事件に第二波――被害者の妻遠藤美鈴さんが自宅の二階で首を吊って自殺

１２月３０日午前８時ごろ、裂目町二条四丁目の住宅の二階の一室で首を吊っている遺体が発見された。遺体は遠藤美鈴（４６）さんで、自殺であると判明。
発見者は美鈴さんの近所に住む女性。美鈴さんを心配し様子を見に住宅に訪れたところ、何も応答がなかったため、中に立ち入り発見したとのことだ。
次々と起こる遠藤家絡みの事件に警察は頭を悩ましており少年Ｋも意識が戻らないため、捜査の進展はこれ以上望めないとの声も警察内部で上がっている。

ハルの冒険3　初めての友達！

1

グラウンドから、賑やかな声が聞こえる。
学校の屋上の天井は、絵の具が足りなくなるほどの青色を空一面に広げていた。
そして、その空から降り注ぐぽかぽかした陽の光が私を暖める。
眩しい日差しに目を細めながら手元に視線を移すと、そこには大きめの弁当箱がある。
その弁当箱の中には、色とりどりの野菜とふりかけ付きのご飯が敷き詰められていた。
食材達がかしこまりながら、弁当箱にちょこんと行儀良く座っているのを見て、お母さんに感謝しないといけないな、と私はいつも思う。
そして、お母さんがこの弁当箱にブロッコリーやら、ピーマンやら、ニンジンやらを詰め込んでいるのを想像するのだ。
きっとお母さんは、私がお弁当を楽しく食べている姿を想像しながら作っているのだろう。
そう考えると、いつも胸がはち切れそうだった。
私は楽しくおしゃべりをするような友達がいない。
それどころか、私に声をかけてくれるような人すらいない。
普段は一人でお昼休みを過ごしているから、そんなこと悲しくなんかないって思っていた。
でも、お母さんを悲しませたくない。
だから、友達とおしゃべりをしながらお弁当を食べたいな。とほんのちょこっとだけ思っていたのである。
だけど、そんなほんの少しだけ望んでいたことが本当になってしまった！！

二日前の昼休みのこと。そんな私の悲しみを一気に吹き飛ばす大事件が起きた。
屋上で携帯電話を拾ったのだ。
その携帯電話はボロボロで、誰かが捨てたんだろう。なんて思っていた。
私は、それを拾い上げて、少しいじってみることにする。
初めて手にするものだったから、滅茶苦茶にボタンを押したが、当然うんともすんとも言うはずはなかった。
その次の日の昼休み、そんなボロボロな携帯が突然、ぶるぶる振るえだした。
食べかけのお弁当を落としそうになりながらも、ゆっくりと「受話器のマークが張り付いているボタン」を押して、耳元に当てる。
――やぁ。拾ってくれた優しい人。少しお話でもドウ？

2

それから毎日お昼休みには電話をした。
もちろん始めは戸惑った。けれど電話越しの声は、「昼休みの暇つぶしだし、気持ち悪いと思うのなら電話を切ってくれればそれでいい」なんていうものだから電話を切ろうにも切れなかった。
私も暇だったし、このまま静かにご飯を食べるぐらいなら……そんな気持ちで、電話をすることに決めたのだ。
多分、キミの声が私には優しく聞こえたから、電話をすることに決めたのかもしれない。
そんな優しい声の持ち主を、私はキミと呼んだ。
電話越しの声は、決して自分のことを話そうとはしなかったし、名前ももちろん知らなかった。だから、言いやすいキミと呼ぶことにしたのである。
顔も分からない人を勝手にキミって偉そうに呼んじゃったりして、馴れ馴れしく接しすぎてないかしら……なんて不安に思いながらも、

それでも、携帯電話から聞こえる声と話しをすることを楽しみにした。
私を底の深い悲しみのおナベからすくったのは、突然に姿を現して語りかけてくるキミの声だったのだ。
この日も私は、いつものように携帯電話が震えだすのを待つ。いつ震えだしてもいいようにぎゅっと握って。
それがぶるぶると震えだしたのは、お弁当を半分食べ終えたときだった。
私は、やっときた！　とはしゃぐようにボタンを押し、携帯を耳に近づける。
――こんにちわ。拾ってくれた優しい人。お話でも……
キミがしゃべり終えないうちに、私は必死にせきとめていた言葉をぶつけた。
「遅いよ！　どうしたの？」
キミは申し訳無さそうにゴメンと呟いて、もう一度私の耳に向かって謝った。
――遅くなってゴメン。これでもお弁当も食べる時間も惜しんで電話したんだよ。今お弁当食べている最中かな？
お弁当のことを聞いてきたので、できるだけ丁寧にお弁当の中身を説明してあげる。
キミは大げさに「うぬぬ。まだ食べてないのに！　なんでそんなおいしそうなコメントをするのだ！」と、怒るふりをする。
それを聞いて、私は舌をペロっと出して、悪戯っ子のように笑った。もちろんわざとだ。
――聞けば聞くほどおいしそうなお弁当だなぁ。羨ましいよ
キミは私のお弁当を熱心に褒める。栄養バランスがどうだとか、匂いまで漂ってきそうだ、とか。それを聞いて、まるでお母さんも一緒に褒められているみたいで嬉しかった。
「ふふん。まぁねー。私の大事なご飯なのです。あげないよ」
――そんな……。あれ、ピーマンが嫌いだって聞いたけど、それ

食べるの？
「そんなこと言ってないって。そんな話誰にきいたの？」
――ピーマンに。
「――このピーマン！　お前なんて食べてやるぞ」
間髪をいれずに言葉を挟むと、キミは楽しそうに言い返す。
――と、ピーマンがおっしゃったと横のニンジンが申しております。
私はキミの声を聞いて、言ってやる。
「ならニンジンも食べてやろう」
キミは嬉しそうにからから笑った。それを聞いて私も嬉しくなる。
「ふふふ。やっぱりキミは優しいんだね。ちょっと元気がでたよ」
――深く考えないほうがいい。みんな悩みがあって、それを抱えながら生きているんだよ。でもそれを、必死に頑張って乗り越えよう！　なぁんて思っちゃいけない。マイペースが一番だよ。
私は、キミが一生懸命私を励ましているってことを知っている。でも、いつもキミの励ましは、私を傷つけないように言葉を選んでくれているように感じてしまう。
これだけ私の話を聞いてくれて、私を励ましてくれて、私の望む言葉をかけてくれるキミのことを、知ってもっと仲良くなりたい。そう思っていた。
でも何故か、その想いは喉につっかえて、いつも出てこれずに昼休みが終わる。
そんな私の心の内に気づいたのか、突然、キミは呟く。
――ぼくのことを知りたいって思っているのはわかっているよ。十分に伝わってくる。わざとわからないふりをしてゴメン。でもね、話せない理由はもちろんあるんだよ。
私は、その言葉を聞いて、つっかえ続けていた言葉をやっとのことでぽつぽつ吐き出す。
「……キミはいつも私の話を聞くばっかりで、自分のことを話したがらなかったもんね。でも、ずっとずっと知りたかったの。キミが

どこの誰で、どうして電話を置いたのか。何の理由で私と電話をするのかを」
もしこの質問をしたなら、きっとキミは私との電話を止めてしまう。そう思っていたから聞かないようにしてた。
まさかキミからそんな話題をしてくるなんて思わなかった。
いつの間にか箸を膝に置いてしまっている。私はお弁当をつっつく気なんてなくなってしまったから、お弁当箱をおもむろに閉まって、そぅっと立ち上がる。
「キミは私をどこかで見ているんでしょ？　そして、私になんらかの理由で接近したの。どうして？　キミは私をからかっているの？」
私はぐるっと体を回して、周りを見渡す。
私の周りは、いつもと変わらない学校の屋上だった。けれど、どこかに隠れるスペースはあるはずだ。もしかしたら、どこかで望遠鏡や双眼鏡で私を見ながら電話しているのかもしれない。
「もし私をからかう気持ちなんてないのなら、出てきて……。そして、顔を見せてよ」
自分でも、私の声はかすれてみっともないのが分かる。でも、それが私の精一杯だった。
キミは少し悲しそうに、それでも優しくあやすように、
――ぼくのことを嫌いになってもいいよ。でも理由は話せない。わかって欲しいな。
と、答えただけだった。
私は望みを絶たれたような気持ちで、力なくうなだれる。
ここまで言っても、駄目だったのだ。じゃぁどうやってキミのことを知ればいいんだろう。
キミは、少し間を置いて今度は私に質問を投げかけてくる。
――ぼくはどこの誰で、どうして電話をしたんだと思う？
私は、キミの意図がわからずに、それでも、私の言った答が正解だったら、教えてくれるかもしれない、という思いで必死に返答する。

「少なくとも……この学校の屋上に携帯電話が置いてあったということから、キミは今学校にいると思う。それと、もちろんこの携帯電話の持ち主だと思う。知り合いだったら、私が電話に出て絶対驚くはずだもん。持ち主と知り合いが共謀していれば、あり得ない話でもないけど……そんなことをする必要がないものね」

私は話しながら、自分の考えを整理することに努める。

電話越しにいるキミは、何度も相槌を打って、私が話しやすいようにしてくれた。

おかげで、キミを追い詰めているっていう雰囲気ではなく、むしろクイズの答を導き出す感覚で話すことができる。

私は話しながらだんだん楽しくなってくるのを感じていた。

キミは私の話を聞くと、それを簡単にまとめる。

――ということは、ぼくは今現在学校にいて君に電話をしているわけだね。そして、その携帯を置いたのも、持ち主もぼくだと。だから君は、ぼくが学校のどこかから君を見ていると言ったわけだ。

私は「その通り」と頷きながら答えた。

私はわざと一呼吸置いて、キミの言葉を待つ。どうだろう。ここまで当たっているだろうか。

――なるほど。でも、肝心のぼくが誰で、何の目的で携帯を置いたのかの答は出てないよ？

でも、キミは私の推測を合っているとも間違っているとも言わず、ただ先を促すだけだ。

私は、それでも落ち着いて、話の続きを言う。

「話す時間も私のほうが遥かに多かったと思う。それでも、キミは親身になって話を聞いてくれた。赤の他人だったら、そこまでしないと思うな。だから、キミは私のことを知っている……はず。そして多分、私もキミのことを知っているはず」

そうだ。それだったら目的はあれしかない。

……私を励ますため。私と仲良くなりたいから、に違いない。

でもそれは私の望みだ。そうだったらいいなとずっと思っていた

ことだ。
「『からかっているの？』という私の質問に、キミはそれでも優しく『わかってほしい』って言ったの覚えているよね？　本当にからかっているなら、ここら辺でタネ明かしして、笑ってくれてもいいのに。でもキミはそれをしなかったでしょう？　つまり……」
もうすぐ昼休みが終わってしまう。それまでに、キミから答を聞きたい。そう思いながら必死に「どうやったらキミの正体を突き止めることができるか」を模索する。
――つまり、ぼくは君のことを知っている人物で、君になんらかの興味があって、そんなことをしたと。そしてその目的は、君と仲良くなりたいから。そう言っているんだね？
「うん」
私が相槌を打つと、突然チャイムが鳴り響く。
昼休みの終わるチャイムだ。
そのけたたましい音を途中まで聞いて、私は急いで、携帯電話にくっつけていないほうの耳を手で押さえる。
――チャイムが鳴ってしまったようだね。
（キミの後では絶対チャイムの音が響いているはず）
そう思って、電話越しの雑音を受け止めようとする。
……だけど、チャイムどころか雑音すらも聞こえなかった。
音楽室だって、チャイムはかすかに聞こえるはずなのに。それどころか、聞こえなかったということは、学校の周辺にすらキミはいないことになってしまうではないか。
そんな私にキミは明るく声をかけてくる。
――深く考えないほうがいいよ。君は僕と話をして、楽しんだ。それで十分じゃないか。まぁ……そう思っていないのもわかるよ。じゃぁ、最後に答え合わせ。
「答え合わせ？」
――そう、答え合せ。
私はごくりと唾を飲み込む。

――君の答えはある一つを除いて全部正解だったよ。……やっぱり頭いいなあ。羨ましいや。仲良くなりたかったのはホント。君を知っているのもホント。けどぼくはどこにもいないんだ。
キミは悲しそうに私に語り続ける。
――だからバトンタッチするね。ほら、後ろ向いて。
受話器越しのキミはそういったと同時に、電話を切った。
私はキミにそう言われて後ろを振り向く。
後ろには、同じクラスの峰山さんが立っていた。
私は携帯をことりと落としてしまう。
「み、みみ峰山さん……？　ど、どうしたの？」
峰山さんは私に近づいて、胸に抱えていた本を手渡す。
その本は、料理のレシピ本だった。
「こ、これ……」
峰山さんはどきどきしているみたいで、上擦った声がチャーミングだった。峰山さんってこんな声だすんだ、なんて驚いてしまうほどに。
まるで小鳥が囀るような微かな音量だったけれど、私の胸には十分届いた。
「どうしたの？」
なんだか、私がさっきまでのキミで、峰山さんがさっきまでの私みたい。
気が付けば自然と笑みが溢れていた。
峰山さんは、私の目を真っ直ぐに見つめてなんとか声を出そうとする。
（がんばれ。がんばれ。峰山さん頑張って！！）
私はいつの間にか心のなかで応援していた。そんな心の声が峰山さんにも届いたのか、彼女の小さな口から言葉がそぼろみたいにぽろぽろこぼれ落ちた。
「お弁当……とっても素敵だったから、お料理好きなのかなって……私にも教えて欲しいって」

私はお母さんのお弁当を褒められて嬉しいのと、一生懸命頑張って話しかけてくれて嬉しいのがごちゃまぜになって、言葉じゃ返事が足りないぐらい嬉しいと思った。
だから、何度も頷いて彼女に笑いかけた。
と、いいますか……それが私の出来る精一杯の返事だったのです。恥ずかしながら。

3

ハルは携帯を回収し終えて、いそいそと下降口に姿を隠す。浮遊霊だから姿を見られる心配なんてないのだけど、どうにもこう……ああいう雰囲気にハルは弱いのだ。
ハルはもう一度、下降口の扉の隙間から、楽しく談笑している二人を見てつぶやく。
「よかった……」
ほっと一息ついていると、隣上から声が落ちてくる。
「……もう携帯いいか？」
「うっさい！！　雰囲気ぶち壊さないでちょーだいよっ！！　携帯はちゃんと返すから……」
クリフが目の前で手のひらを差し出す。ハルはオンボロ携帯を目の前に掲げて、少しためらった。
「……やっぱり返さなきゃだめ？」
「ああ。頻繁に使用していいものじゃないからな」
「っていうかこういう便利な物あるんだったら始めから言ってよ。これさえあれば……」
「消えたくなくなるだろう？」
「うん。って心も読めるのか流石悪魔」
「いや……そう顔に書いてある」
ぶーと文句を垂れながら携帯をクリフに受け渡す。
「もう一つの携帯も、ほら」

「ぶぅ」
ハルはポケットに忍び込ませて置いたもう一つの携帯を取り出し、クリフにあずける。それを受け取ったクリフはほっとしたようで、壁に大きな背中を預けた。
「クーってさ」
「ん？」
「やっぱりいろんな力持ってるでしょ」
「どうしてだ？」
「だって、姿を消すことが出来るなんてぼく聞いてないよ」
「あれ？　言ってなかったか」
「クーなんかもう絶対信用しないもんね」
そうなのだ。この携帯を伊井筋から貸してもらい学校の屋上に乗り込むとき、この悪魔はしれっと姿を透過しやがったのだ。
透過すると言っても霊であるハルからはもちろん確認できない。けど、１８０を越す大女がジャージ姿で廊下を堂々と歩いていても、誰一人として彼女に気づくものは居なかった。
……そんな話は聞いてない。
クリフは頬をぽりぽりと掻いて、そっぽを向く。
ハルはそんなクリフを見て、叫び声を上げる。
「んきゃー！！」
「な、なんだ一体……」
「全部話してよ。じゃないとぼく消えたくないよー」
「そうはいってもな……」
おろおろしているクリフの姿に、ハルはくふふと笑いを漏らす。体は大きいクセに、どうも上手く子供をあしらえないでいる。その姿はハルにとって小気味いいものであった。
くすくすと笑い続けているハルの頭にぽんと手を置くと、クリフは真剣な眼差しで問いかける。
「本当はこんなことしちゃダメなんだ。ハルがどうしてもというから、反転世界から現実に電話をかけることのできる携帯を貸してや

ったが、二度目はないぞ」
ハルは顔を伏せて、ぽつりとつぶやいた。
「わかってるって。けど、あの二人を仲良しにさせたかったんだもん」
「ハルに言われてこうして付いて来たが、あの二人は一体なんだったんだ？」
「それはね……」
ハルは浮遊霊になって間もない頃を思い出す。
浮遊霊だと自分のことを認識したのは、この学校で朝のホームルームを受けていたときだった。
いつものように朝早くに起床し自宅で準備をして、遠藤圭と落合い学校に向かう。誰もいない教室に入ると昨日まではあった圭の隣の席……自分の席が無くなっている。仕方なく美術室で余っている机を運び、自分の席を作った。
朝早く起きてしまったというのもあって、親友である圭の隣の席でうたた寝をしていた。その眠りから覚めると、世界が一変したように全員が自分を認識しなくなってしまった。
そのときの戸惑いは省くが、声をかけても返答されず、背中をつついても無反応。親友ですら、自分のことを忘れてしまったみたいに、目を合わせてはくれない。
そこでようやっと自分が昨夜父を殺して自殺したことを思い出した。そう、自分は死んでいたのだと。
自分の作った席が誰かに片付けられる。出席点呼で自分の名前は飛ばされる。自分が居なくとも世界は進んでゆく。……だとしても親友だけは自分のことが見えているはずだ。そう信じて何度も呼びかけたが、結果は同じ無反応だった。
そんな時、クラスで一人だけハルの存在を覚えていた人がいた。それが、屋上でいつもお弁当を食べている彼女だ。
彼女は本が大好きで、遠藤圭とも創作小説を見せ合う仲だった。少なくとも中学校までは。

けれども、圭と彼女が仲良くしている様を周りの友人たちに茶化され、遠縁となってしまった。子供たちには良くある話だ。
同じ高校に入学してからも、彼女は伸ばしきった長い髪のせいで暗い性格と思われてしまい友人が出来ずにいた。そのことを浮遊霊になって思い出したハルは、なんとか彼女と仲良くなれそうな人を探した。
彼女はいつも美味しそうなお弁当を持参している。昼休みは屋上に向かい、お弁当を食べる。放課後は図書館で本を読む。
……ハルはそんな彼女の身辺を調査して、彼女に注意を向ける人が居ないか探し続けた。
そしてようやく見つけたのは、同じ屋上でもフェンスの向かいではなく、下降口の傍でお弁当を食べている峰山さんだった。
ハルはなんとか彼女が峰山さんに気づくことを祈っていたのだけど、鈍感なのか全く気づく素振りすらなくいつも昼休みが終わるのだ。
やっと二人は繋がることができた。
ハルは巡らせた思いを胸にしまって、隣に立っている大女に言う。
「ぼくの友達」
「ふうん」
「……人はね、必ず誰かに見られているもんなんだよ。誰かがちゃんと見ていてくれてる。だから優しくなれる。そうでしょ？」
クリフは首を傾げて、曖昧に頷いた。

4

学校を出たハルたちは、ふらふらと散歩することにした。
三日前のあの夜、ハルの全てを承知した伊井筋は、帰ってきたクリフにハルのお守りを命じた。伊井筋の弁によると遠藤圭を調査するのに三日ほど時間が必要であるらしい。だからそれまでハルが何処かへ行ってしまわないか、クリフに監視を任せることにしたのだ

そうだ。
……クリフはその監視をとても嬉しそうに承諾したのだけれど、ハルはなんか釈然としない。きっと、クリフにとっては監視というよりお守りなのだろう。子犬の面倒を見るようなものぐらいにしか思ってないに違いない、とハルは思った。それと同時に、この悪魔は子供が好きなんだろうとも思った。
そんな経緯があり、しつこくクリフの未知の力を聞きつけたところ、クリフがぼそっと呟いた不思議通信器のことを知ってしまい、屋上の女の子を助けるための道具として貸してもらうことにしたのだった。
紆余曲折があったが、ライフワークであった学校通学やウインドーショッピングにクリフを連れ回すことで、見事当初の目的であった屋上の女の子と峰山さんを友達にすることができたし、ハル自身も楽しいひと時を過ごすことができた。大満足である。
二人は学校の正門に隣接している幅広の国道をどこへいくともなく歩き続けていた。伊井筋が言うには、全ての調査は今晩で終了するらしい。それまで何もすることがないので、クリフと話し合って商店街の裏にあるこの大きな国道をぶらぶらと散歩することにしたのだ。いや、商店街の裏というか、どちらかというと国道の裏にある寂れた商店街といったほうが適切である。
二人が歩いているこの国道は、車の通りが多い。だから、道の両脇に沢山のガソリンスタンドやコンビニエンスストアが連なっている。大型デパートもあるし、家電量販店だってある。その店々の屋根には雪が薄く積もっていた。
地面ももちろん雪で薄くコーティングされ、歩く度にスニーカーの靴あとが残る。
昨日は沢山雪が振った。気温が何度まで下がったのかは知らないが、ここでこうして吐く息が白いのをみると、どうやら零度に近いみたいだ。
ハルは隣で歩いているクリフの手を掴んで、少し疑問に思ったこ

とを尋ねる。
「ねえ、ぼくの靴あととか、吐く白い息とかは、現実の世界ではどう映っているのかな」
クリフはハルの冷たくなった手を握って答えた。
「なんにも映っちゃいない」
「へー。なんか悲しいや」
「……ハル、人間が百年生きたとして、世界中の物事の何%を知ることができると思う？」
その問いに、ハルはうーんと唸る。
「わかんないや。けど、百年もあれば結構知れるんじゃないかな。ほら、パソコンがあるし、こう……分からないことはクリック！！みたいな」
ハルは空いているほうの手を上げて、人差し指をくいくいと動かす。
「こう、ぴぴっとさ」
「ふふ。実は5%にも満たない。世界の隅っこしか知ることができないんだ。それぐらいしか人間は情報を認識することができない」
「むつかしいからもっと簡単な例えでいってよ」
「そうだな。ハル、箪笥の角に足の小指をぶつけたことはあるか？」
「うん。あれ、めっちゃいたいよね。うぅ、思い出したら足の小指が」
「それは頭が箪笥の角を認識していないからだ。だからぶつけてしまう……というふうに考えればいい。ぶつけた瞬間に、箪笥の角を認識するんだ」
「そ、そうなんだ！！」
ハルは驚きと尊敬の眼差しでクリフを見つめる。
クリフはその眼差しを受けて、ばつが悪そうに頬を掻いて舌を出した。
「まあ、これは例え話で、実際は小指が付いていることを頭が忘れているからなんだけどな」

「う……うそつき！！　信じちゃったじゃんか」
「ふふ。ほんとにハルは可愛いな」
「うっ……それ恥ずかしいから禁止ね。言われ慣れてないんだからさ」
そうか、とクリフはハルに笑いかけ、視線を道路の先に戻した。
「ねえ」
「なんだ？　また質問か？　本当にハルは知りたがり屋だな」
「違う、あのボール……」
ハルが指さした先にあったのはサッカーボールだった。道路の真ん中に、サッカーボールが転がっている。どこから転がってきたのだろうとクリフは思う。
周りには公園なんかない。……きっと、学校の校庭からたまたま飛び出してしまったものだろう。
「あのボールが欲しいのか？」
クリフがまの抜けたことを言ったので、ハルはつっこみを入れる。
「違うってば。あれ、危ないんじゃないの？　ほら、バイクがここを通ってボールに乗り上げちゃったりしたら」
「普通は避けるんじゃないのか？　心配いらない。信号が赤になって車が停れば誰かが脇に放り投げるよ」
さあいこう、とクリフが手を引くのがなぜか悔しくて、ハルは立ち止まって訴える。
「見つけた人がなんとかしなきゃだよ。誰かがやるなんていってたら、誰もやらないままだって。ぼく、次の信号が赤になったらあのボール取りに行くよ」
なかなか引こうとしないハルに、クリフは呆れ顔で答える。
「ふう。わかった。私が取りに行くよ。それでいいだろう？」
「べつにー。ぼくが取りに行くったら行くの。他人任せにするクーはそこで見てればいいじゃんか」
クリフの手を振り払ってハルは走り出す。ちょうどハルの立っている位置から、３００メートルぐらい先の道路の車線の真ん中にボ

ールは止まっている。
取り敢えず車はボールを避けて通り過ぎている。だが、車の通り過ぎる風圧でボールは車線の左右をゆらゆらと不安定そうに動き続けている。
ハルはボールの真横まで走って移動すると、道路を横切るタイミングを見計らう。
だが、信号と信号の間隔が広いせいか、なかなか信号が赤になる気配はない。ハルはやきもきしながらボールの動きを目で追うが、いてもたってもいられなくなって、車と車の間隔が開いた隙を狙って取りにいこうと決心する。
いち、に、さん、と左方向から横切る車を目で数えて、車通りが少なくなる四台目と五台目の間がチャンスだと見切りをつける。右方向も同様にいち、に、さん……。
チャンスが到来する。ハルは地面を蹴ってボールに駆け寄る。サッカーボールを抱き上げてそのまま向こう側の歩道まで駆け抜けようとする。
そのとき、車を目で確認した時には存在していなかった見知らぬ車がハルの左側に現れた。
ハルは車の機動音を聞いて左をむき、次に車が赤いセダンであると目で認識して、最後になぜ？　と思った。
なぜ目に映らなかったのだろう、と最後に思ってしまった。
当然、自分がしなければならない危機からの脱出……足をとにかく前に踏み出すという行動が数秒遅れ、体の強ばりから、脱出も不可能となってしまう。
（ぼくの体は車に轢かれる運命だったのかもしれない）
そんな一瞬の出来事も、思いを巡らせることはどうやらできるらしい。ハルは、めまぐるしく動き続ける思考のなかで、浮遊霊である自分はもう一度死ぬことができるのだろうか、という馬鹿馬鹿しい疑問が頭に浮かんでしまう。そして、そもそも自分は浮遊霊なのだろうか、という疑問も浮かび上がった。

……

ぼくは浮遊霊なのか？

そもそも、ぼくは現実に存在したのか？

もしかしたら、浮遊霊という存在は、誰かにそう定義付けされた属性のようなものなのではないだろうか。

ぼくが父親を殺し、自殺したという過去も誰かの手によって捏造されたものなのではないだろうか。

だってだ、ぼくは父親を殺した現場を思い出すことができない。何故なら、まだぼくは誰にも語っていないからだ。

そう、このぼくという存在が一冊の本で登場する人物ならば、読者である君たちにまだぼくは語っていない。だからぼくは語れない。語る場を与えられなかったからだ。

ぼくはキリマに何を話した？　話したつもりになっていただけではないのか？

そう考えるといろいろな事の辻褄が合ってしまう。

こんなおよそ霊らしくない……そう、矛盾している設定の数々。痛みを感じることができる、とか物を掴むことができるという設定に、それを普通の人間は知覚できないという設定。

もしそんな存在が一人でもいたなら、現実に起こり続ける犯罪の全てが立件出来なくなってしまう。そう、ぼくの存在そのものが犯罪するのに丁度いい存在なんだ。

他人に知覚されない。つまり犯人が見えない。

現場に残るであろうものを隠すことができる。つまり証拠隠滅できる。

痛覚というものはそもそも体の無理な運動を制御するための装置にすぎない。生命活動の上に成り立っている感覚ではなかったか？

生命活動すらしていない霊にそんなものは必要あったのだろうか。

キリマはその設定に理由付け――霊を苦しめるための世界――をしていたけれどもそんなまどろっこしいことしなくても、ずっと火

あぶりにされ続けるとか、方法は沢山あったはずだ。けれども、あくまでも現実という舞台に霊を配置した。楽しんだり、笑ったりできる感情を身に付け、霊を誕生させた。その理由は？

決まってる。ぼくが誰かを救うために、決心する心が用意された。

じゃあクーは？

悪魔という存在はどうだろうか。

キリマはクーをプログラムを受け継いだ存在だといっていたが、そんなことがにわかに信じれるはずがない。

そもそも、天国も地獄も存在しないのであれば、悪魔という概念だって存在しないはずで、矛盾しているはずだ。

それをなしにしても、クーやキリマはぼくに干渉する能力を持っている。

つまり、彼女たちもぼくと同じなんじゃないか？

誰かに用意された存在。

設定を作られその土台でしか物を語ることを許されない人形のような存在。

クーとキリマは持っているであろう力をひた隠しにしている。それはつまるところ、力を見せていないからではないのか？　そう、見せて証明しないと語れないのだ。

クーがぼくに出会うことも必然で、キリマに舞台設定を聞かされるのも必然だ。そしてぼくはとりあえず頷き、遠藤圭という親友を助けて欲しいと依頼する。

そもそも遠藤圭という存在は誰だ？

いや、親友だ。小学校のときに虐められていたぼくを助けたただ一人の存在。正義感があって、誰にでも分け隔てなく接することのできる、頼もしい存在だ。

こうやって親友の性格をスラスラと淀みなく語ることができる。けれども、彼の容姿を語ることが出来るか？

どんな髪型だった？　どんな顔だった？　身長は？　服の好みは？

わからない。わからないんだ。

なぜそんな主要人物の容姿が語られていない？
それは、この文章を書いている本人が知らないからじゃないのか？
そうだとしても、同じく仲の良かった三春姉ちゃんの容姿は言える。
そう、茶色がかった髪を緑色のヘアゴムで二つ結びにして、前髪で目が隠れているちょっと地味だけれども、実は可愛い――これらは全てすでに語られた設定ではなかったか？
ぼくは創られた世界に放り出されて自我を持ってしまった存在なのか？

……

気がつくと、ハルはクリフに抱えられていた。お姫様抱っこされている状況だ。
周りを見渡すと、どうやらボールを抱えた後に着くはずだった歩道の脇だった。
クリフがどうやってハルを助けたのかは分からないが、とにかくハルは助けられた。
ハルはクリフの顔を仰ぎ見て、一言尋ねる。
「ねえ、クーの目にぼくはどう映ってるかな」
クリフはハルを立たせてやると、ハルのズボンを払う。
「黒のパーカーを着て、七分のズボンを履いている可愛い女の子」
「じゃあ顔は？　髪型は？」
「……」
言い淀むクリフの様子に、ハルは戸惑いを隠すことができなかった。
だってそれって、まだ本に書かれてないから。
だからクリフはハルに言えない。その可能性があるのだ。
「どうしても言わなければならないか？」
ハルは唾を飲み込む。是が非でも教えて貰わなければならない。
自分という存在の姿かたちを確認するために。

クリフは顔をうつむかせて、もごもごとはっきりしない言葉をつぶやく。
「お願い、教えて欲しいんだ。今まで鏡を見てこなかったし、ぼく自身、顔を思い出せないんだよ。ヘンな話だけど」
ハルはクリフの手をぎゅっと握る。
「大丈夫。ぼく、あることに気づいたんだ。だから、覚悟は出来てる。教えて、クー」
クリフは顔を上げると、ハルに真剣な眼差しをむけ、答えた。
「顔が火傷でただれている」
「……え」
「髪はぽつりとしか生えてなく、束を作るほどの量はない」
「う、そ」
「火傷の痕のせいで溶けて垂れた瞼の皮膚で左目が覆われ隠れている。唇も同様に焦げて存在してない。だから表情が上手く読み取れない」
ハルは左手で指摘された部分を覆って確認する。
「ぼーっとしがちというのもあるのだろうが、片目では距離感覚が上手くつかめなかったろう。だから、神社の階段から転げ落ちそうになったのだろうし、左方向から飛び出す車にも注意がいかなかった。あの車の運転手にはハルが見えないからな。誰のせいでもない。全て仕方がないことだ」
「え……けど、ぼく今まで知らなかった……」
「私が頭を撫でていたろう？　あれは、その、つまり……」
クリフが唇を噛んで言いにくそうにしている。ハルは手をさらに強く握り締めた。効果があったのか決心したのか定かではないが、クリフは言葉を続けた。
「辛い出来事を思い出さないように私の力を使った。ハルの認識の外に追いやったんだ。そうでもしないと、ハルが挫けると思ったから。代わりに、ハルの頭の片隅に残っていた火傷前の顔を意識に刷り込ませた。その、すまん」

「そんなことができるの？」
「……ハルが全てを思い出してしまうから力の説明をしたくなかったんだ。ハルだったら、能力を説明したとたん自分にも力が使われていないか疑うだろう？　そうすると、私は嘘を付くのが下手だから……全て言ってしまう。実際、嘘を付くときには声が震えてしまう癖がある」
ハルは瞳を真ん丸にして、この大女をみやった。
だからあそこまで自分のことを語るのを拒んだのだろう。
「じゃあクーの力っていうのは」
――認識を弄る能力。
「ああ。人の認識を弄る能力。相手の認識を弄るには、一度相手に触れなければならないが、その制約さえクリアすれば、触れるたびに能力を発揮できる。霊を消すという行為も、霊自身の『存在する』という認識を否定させたからだ。体が存在しないから、認識だけで消えることができる。まあそれには大きな力が必要で、あるものを使わないとならないのだがな」
「学校で姿を見られなかったのは？」
「自分という存在を消した。能力使用者自身が消えることはもっと簡単だ。ほら、影の薄いヤツっているだろう？　あんなもんだ。自分の存在を限りなく無に近づけたんだ」
クリフはため息まじりに、全ての事実を告げた。彼女にとっては、絶対に言いたくなかった秘密であったろう。少女に、お前の顔は醜いのだ、と言ってしまうことに繋がるのだから。
ハルは心の声を繰り返す。
ぼくは醜いのだ……と。

5　ハルから見る悪魔の持つ力

苦々そうな顔でクリフはあの夜について弁明を始める。
「あの夜、話の途中で私は席を外したろう？　あれも、私が霊を消

す方法というのに話が及んだから、逃げたんだ。消し方を教えてしまうと自分の力にまで話がいってしまうから」
そうだったんだ、とハルはようやく合点がいった。
この悪魔の話が本当であれば――認識を自由に出し入れすることができるのなら――記憶だって、知られているに違いない。
「そしたら、ぼくの過去は全てお見通しってことだね」
クリフは頭を振る。
「……それは知らない」
「え、うそ！？」
「認識を弄ることができるといっても、万能じゃない。私は『現在認識』は弄ることができるが、『過去認識』は弄ることができないんだ。分かりやすく言うと、現在見ているものや感じていること、考えていることや思っていることは操作出来るが、過去の記憶を見たり操作すること、改変することや消すことはできない」
「でも、認識を自由に出し入れすることができるんじゃないの？」
「力を説明するのは苦手なんだ。ややこしいし、複雑なんだよ。それでも聞きたいか？」
答えは当然決まっているが、ハルは少し間を置くことにする。
……キリマとクリフが口を揃えていう、「能力の説明が難しい」という言葉に、ハルは不満を感じていた。
ハルにとって現在立っている現実という世界が非現実であるのは当然のことなのだ。だって自分は死んだのだから。
そんな非現実に放り投げられたら誰だって、今置かれている現状を把握せずにはいられないだろう。なぜなら、自分の立っている現実が非現実であれなんであれ、自分にとっての現実に他ならないのだから。
だからこそ、非現実の世界で何かを成すために行動してきたのだ。
ハルは籠の中の鳥を想像した。その鳥は自分と良く似ている、とハルは思ったのだ。
全ての自由を奪われ、飼い慣らされる鳥は何を思って生きている

のだろうか。
そもそも自由とはなんであろう。それは自分の立ち位置を知ることに他ならないのではないだろうか。
世界の全てを知ることが出来ずとも、自分の置かれている立場が分からないのはハルにとっては籠に閉じ込められていることと同じだ。
自分の意思で行動するために、籠から飛び出す必要がある。
そう思って何度も二人に尋ねたのだけど……二人ともお茶を濁してばかり。
今度こそ、ちゃんと話してくれるだろうか、と不安を感じながら強く頷く。
「うん。どれだけクーが嫌がったって、最後まで、納得のいくまでぼくは聞くよ。そしてぼく自身の考えで行動するんだ」
クリフは視線を逸らして、口ごもりながら何か言っていたが、決心がついたのか、ハルに視線を合せ、強い口調で言い放った。
「聞きたいか？」
疑問調だけれども、ハルの耳には、止めておけ、というふうに聞き取れた。そうであっても、どうしたって聞く必要があるのだ。
「……大丈夫。クーはぼくのことを思って力を使ったんでしょ？」
「少なくとも私はそう思っている」
「なら大丈夫。分からなくたって……」
「知っているのに言わないことが一番酷い。どんな酷い真実でも、」
「知らないままで生きているほうが辛い……分かってんじゃん。へへ」
「ハルには敵わないな」
クリフはつられて笑い、こほんと咳払いする。
すると、クリフの表情は一変して真剣なものになる。大女はゆっくり人差し指を立てた。
「いいか？　まず、とても大きな本棚を想像してくれ」
そう言って人差し指で四角を描く。

「その本棚は心の中にある。そして、本棚の下の床には、次々に増えてしまった本が山積みになっている、それを本棚に並べるんだが……あいにく全ての本を本棚に並べられそうもないんだ。そんなとき、ハルはどうやって並べる？」
「うーん。普通は作者順にまとめて、左上から並べていきたいけど、それが出来ないんだったら、よく読む本とか、お気に入りの本なんかを本棚に並べるかな」
　えらいなハルは、といってクリフは頷く。感心されたとハルは少し嬉しくなった。
「認識というものは本人が望む情報だけを好んで記憶する性質がある」
「自分の都合のいい情報だけ取り入れようとするってこと？」
「そうだ。認識とは、現在進行形で人が取り入れ続けている無意識と意識の総称だ。……その中でも、私が弄れるのはハルが言ったようなお気に入りの綺麗にラッピングされた本だけなんだ」
　そういってクリフは沢山の本を描くように四角い線を指で縁どっては、その右端をまるで背表紙をつまむように指で摘む。
「本棚に並べられている本だけしか操作できない。人が今、取り出したり取り入れたりできる情報だけだな。それを私は『現在認識』と呼んでいる。私が出来るのは現在認識を弄ったり、現在認識に注意を向けるだけ」
　ハルは頭を捻って理解するよう努める。
「現在意識に注意を向けるって？」
「例えるなら……」
　クリフはうんうん唸って、思いついたように顔を上げると、次は両手で四角い箱を形どり表現した。
「ダンボールだ」
「ダンボールって……あの物をまとめたりするときに使う？」
「ああ。本棚に入れられていない本をダンボールに仕舞って、決して自力では見つけることの出来ない場所に隠しておくことという感

じだ」
「ってことは、クーは本棚を整理する人ってこと？」
「そうだ。いい例えだな。私は本を整理する人。本の中身を読んだり本を消したりすることはできない」
「じゃあ、ぼくが自分の顔や、けいちゃんのこと、屋上の女の子の名前を忘れたりしたのは……」
「多分私の力のせいだ。ごめんな、私は大雑把な性格で不器用だから、精密に力を操作できないんだ」
「ううん。説明してくれてありがと」
　ハルはそう言って、にこやかに笑う。不細工な顔でちゃんと愛嬌のある笑顔を作ることができているだろうか、と不安はあったけれども、気にしないようにしながら、言葉を続けた。
「特殊能力っていえば、こう、もっとちゅどーんで、敵を倒すぜっていう能力を想像してたから、そんなややこしい能力だとは思わなかったよ」
「ハルはそういう事をしたいのか？　人を粉々にしたり、人を一瞬で改心させたり」
「そうじゃないけど……でも、クーやキリマみたいな特殊能力を持つ人が現れるなら、これからそんな能力を持つ人が現れたりするんでしょ？」
　クリフは笑って答える。
「それはアニメだけの話だ。そんな特殊能力なんて存在しない。物理的な現実は単純だ。ああやればこうなるといった世界だな。機関銃を打ち続ければ、弾が飛ぶ範囲に居る敵兵たちは死ぬ。いくら自分を特別だと思っていても、人なんて簡単に死ぬし、殺すことができる。……私の能力はそれとは別次元のものなんだ。個人的な現実はもっと複雑で矛盾ばかりの世界なんだぞ」
「ぶぅ。存在しないったって特殊能力を持っているクーが言っていい言葉じゃないと思うんだけど」
「私の力は、個人個人の持つ世界観に干渉し影響させる能力だ。そ

もそも、ハルの言うような敵を殺す能力が必要な状況だったら、重火器を使えばいいんだ。カノン砲、臼砲、ミサイルといったような一発で人を死に追いやるような強力な武器を使えばいいんだ。それを使っていけなくたって、一番手っ取り早い手段がある。それは核爆弾だ。原爆でも投下すれば、人類は破滅する。単純じゃないか」
「それを言ったら身も蓋もないじゃんかー」
ハルはやれやれ、といった様子で両肩を上げる。
クリフはそのハルの仕草を楽しそうに見終わってから、言葉を続ける。
「いいか？　私の力はあくまで個人の認識に干渉するものである。はい、復唱」
「えーっと、個人のニンシキに干渉うんぬん」
「……ハルいえてないぞ」
「うるさいなー。干渉するものであーる。これでいいんでしょ？」
「ああ。そして、人は他人を一方的に傷つけることができる。また他人は人を傷つけることができる」
「うん。それは分かる。傷ついて、傷つけられる。その人その人の気持ちがあるってことだよね。でも、そんないろんな人がいるからこそ、自分の立ち位置がわかるんじゃない？」
「……ほう」
「例えば……あの人と比べたらぼくは指示する能力が劣っているから、黙ってようとかさ」
「違う……と言っておく。ハルが間違えているわけじゃない。もちろん他者しか個人を規定することが出来ないと私も思う。けれど、そんなのは妄想だという人もいる」
「違うの？」
クリフはハルの脱げたパーカーフードを被せて頭を撫でる。
「……オーナーが言うにはな。それに、他者しか自分を規定することができないのなら、他人から見られることのない霊は存在しないも当然になる。霊を見ることができる私たちが居なければだけどな」

ハルは首をかしげる。
「ふーん。じゃあキリマがそう言ってるんだ。そういえばキリマの能力ってなんなの？」
あの死ぬほど着物が似合っていない西洋人形の容貌を持つ伊井筋桐真はどうなのだろう、とハルは思った。
悪魔……といっていいのか分からないが、霊を唯一消すことができるクリフが実在する人物なのであれば、あの少女はどうなのだろう？
クリフは頬を掻いて説明を始める。
「オーナーもまた、特殊な力を持っている。彼女の場合は……本当に特殊すぎて、一口では説明できない。だから……」
「本人に聞けっていうんでしょ？　でも絶対教えてくれないよ。断言できるね！！」
鼻息を荒らげ言い切るハルをみて、クリフはくすりと笑う。
「ハルもオーナーのこと良く分かってるじゃないか。さては私が居なかったときに、親交を深めたりでもしたのか？」
「いーから教えてよ。ぼくは、今、全てを知る必要に立たされているんだ！！」
その言葉に大笑いして、クリフはハルの頭を撫でようとする。その行為を察知したハルは素早く体を後ろに引く。
「なっ……」
手が空を切ったことを知って、クリフは落ち込む。
「いま、ぼくのニンシキを消そうとしたでしょ」
「ちがっ……」
「いーや、消そうとしたね！！　これじゃあオチオチ頭も撫でられないなあ」
「そ、そんなあ……」
クリフはがくっと肩を下げ大げさに項垂れる。
そんな悪魔の尋常じゃない落ち込みようを見て、いい気味だとばかりにハルはニヤニヤと笑っていたが、なんだかとんでもなく悪い

ことをしているような気がして、人差し指を立てた。
「……そこまでぼくの頭を撫でたい？」
クリフは落とした肩を持ち上げて、両手の握り拳をぶんぶん振ってオーバーに頷く。
「うん。うん。今すぐ撫でたい」
「……じゃあもう断わり無しにぼくに力を使わないって約束する？」
「ああ。約束するぞ」
「ほんと？」
「約束だ」
「キリマに消せって命令されても？」
「うっ……や、やくそくだ」
「じゃあ小指」
「ハルはそういうところしっかりしてるんだな」
「だって、クーは約束事を律儀に守ってくれそうなんだもん」
「う……悪い気はしないが、なんだか馬鹿にされてるみたいだな」
「いーから小指！！」
ハルはクリフの手を取って、小指に小指を絡ませた。
「ゆーびきーりげーんまーん。っと、絶対針千本飲ませちゃるかんね！！」
「わかった。大丈夫。ちゃんと約束は守る。まったくお百度参りといい、指切りげんまんといい、なんか古風だな、ハルは」
「……悪い？　それと、キリマの力はなんなの？」
「その前にナデナデしていいか？」
「よし、許す」
クリフは待ちきれないといった調子で、ハルの頭を撫で付ける。手を忙しなく動かす大女を見て、本当に子供が好きなんだなとハルは感じた。
「ほら、早く教えてよ」
「……こほん。オーナーの力はもっと複雑だ。それでも聞きたいか？」

考えるまでもなく、ハルは力強く頷いた。
「もちろん！！」
「じゃあ力を使わなきゃいけないな」
悪魔はそういって、ハルの頭をぽんと叩いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8968z/

壁伝いSOS

2011年12月28日05時56分発行